二葉町遺跡第22次発掘調査報告書

—新長田駅南第２地区震災復興第二種市街地再開発事業に伴う発掘調査—

2010
神戸市教育委員会

二葉町遺跡第22次発掘調査報告書

—新長田駅南第２地区震災復興第二種市街地再開発事業に伴う発掘調査—

2010
神戸市教育委員会

調査区全景（東から）

巻頭写真図版 2

左上：SE315出土遺物
右上：SE318出土遺物
左下：SE317出土遺物
右下：輸入陶磁

序

神戸市長田区は、古来より交通の要衝として栄え、多くの人々の生活が営まれていました。その足跡は、区内随所で窺い知ることができますが、近年の発掘調査において、より明確なものになってまいりました。

二葉町遺跡は、近年の再開発事業などに伴う発掘調査によって、様相が明らかになった遺跡のひとつです。同遺跡の発掘調査においては、主として、平安時代から鎌倉時代の遺構・遺物が数多く確認されており、同時期の大規模な集落跡であることが明らかになりました。

これらの成果は、長田のみならず神戸の歴史像を探る上でも、重要な資料となりうるもので、広く活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、本調査が関係諸機関および地域住民の皆様の多大なるご理解とご協力によって実施することができましたことを、厚くお礼申し上げます。

平成22年3月
神戸市教育委員会

例　　言

1．本書は、神戸市長田区久保町６丁目において発掘調査を実施した、二葉町遺跡第22次調査の埋蔵文化財調査の報告書である。

2．当調査は、新長田駅南第２地区震災復興第二種市街地再開発事業に伴うもので、神戸市教育委員会・(財)神戸市体育協会が神戸市都市計画総局の委託を受けて実施した。現地における調査は、平成21年５月18日から平成21年７月16日の期間で実施し、(財)神戸市体育協会総務課　池田　毅・阿部　功が担当した。

3．遺物整理作業は、平成21年度に神戸市埋蔵文化財センターにおいて実施し、神戸市教育委員会文化財課　黒田恭正、佐伯二郎、池田、阿部が担当した。遺物写真の撮影は独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所　牛嶋　茂氏の指導の下、西大寺フォト　杉本和樹氏が行った。

4．本書に掲載した位置図は、国土地理院発行の25,000分の１地形図「神戸首部」、「神戸南部」、神戸市発行の2,500分の１地形図、「大橋」を使用した。

5．本書に用いた方位・座標は、平面直角座標系世界測地系で、標高は東京湾中等潮位（T.P.）で示した。

6．本書の執筆は、「第２章・第３節」について、文化財課　中村大介が、これ以外は池田・阿部が担当し、池田が編集を行った。出土遺物ならびに図面・写真は、神戸市埋蔵文化財センターに保管している。

7．第４章における本調査（第22次調査）以外の出土遺物実測図等の番号については、掲載されている番号をそのまま使用している。

8．下記の作業については作業委託を行った。
発掘調査作業　　（有）和田発掘調査所
航空写真測量　　（株）GEO ソリューションズ

9．現地での発掘調査の実施には、神戸市都市計画総局新長田南再開発事務所の協力を得た。

目　　次

序
例　言
目　次
第１章　はじめに …… 1　阿部
　第１節　調査に至る経緯と経過 …… 1
　　(1)　調査に至る経緯 …… 1
　　(2)　調査組織 …… 2
　　(3)　調査の経過 …… 2
　　(4)　調査日誌抄 …… 3
　第２節　二葉町遺跡の立地と歴史的環境 …… 4
　　(1)　遺跡の立地 …… 4
　　(2)　歴史的環境 …… 5
　　(3)　既往の調査概要 …… 8
第２章　調査の成果 …… 13　池田
　第１節　基本層序 …… 13
　第２節　遺構・出土遺物 …… 14
　　(1)　掘立柱建物 …… 17
　　(2)　井戸 …… 18
　　(3)　溝 …… 24
　　(4)　その他の遺構 …… 25
　　(5)　遺構に伴わない出土遺物 …… 28
　第３節　第22次調査出土木質遺物の樹種 …… 31　中村
第４章　まとめ …… 32
　第１節　第22次調査の成果について …… 32　池田
　第２節　二葉町遺跡における古代末～中世前半の土器様相について …… 39　阿部
　第３節　二葉町遺跡出土の輸入陶磁 …… 49　池田

挿　図　目　次

fig. 1　二葉町遺跡の位置 …… 1
fig. 2　調査地位置図（S = 1 ：2,500） …… 4
fig. 3　周辺の主な遺跡（S = 1 ：25,000） …… 6
fig. 4　久保町６丁目地区調査範囲 …… 9
fig. 5　基本層序断面図 …… 13
fig. 6　第22次調査地平面図 …… 14
fig. 7　久保町６丁目地区遺構平面図 …… 15
fig. 8　ＳＢ326平面図・断面図 …… 16
fig. 9　ＳＢ326遺物実測図 …… 17
fig.10　ＳＢ327平面図・断面図 …… 17
fig.11　ＳＥ315平面図・断面図 …… 18
fig.12　ＳＥ315遺物実測図 …… 19
fig.13　ＳＥ316平面図・断面図 …… 20
fig.14　ＳＥ316遺物実測図 …… 21
fig.15　ＳＥ317平面図・断面図 …… 21
fig.16　ＳＥ318平面図・断面図 …… 21

fig.17　ＳＥ317遺物実測図 ……22
fig.18　ＳＥ317石製品実測図 ……22
fig.19　ＳＥ318遺物実測図 ……23
fig.20　ＳＤ311・ＳＤ318遺物実測図 ……24
fig.21　遺物実測図 ……25
fig.22　ＳＰ310平面図・断面図 ……26
fig.23　ＳＸ301遺物実測図 ……27
fig.24　遺物実測図 ……28
fig.25　二葉町遺跡遺構変遷図 ……33
fig.26　上小名田遺跡掘立柱建物配置（模式）図 ……33
fig.27　ＳＥ301（久保５）平面図・断面図 ……34
fig.28　二葉町遺跡出土樟葉型瓦器椀 ……35
fig.29　二葉町遺跡出土漁撈関係資料 ……36
fig.30　土師器皿分類図（Ｓ＝１：８） ……40
fig.31　二葉町遺跡出土土器変遷図 (1)（Ｓ＝１：８） ……42
fig.32　二葉町遺跡出土土器変遷図 (2)（Ｓ＝１：８） ……43
fig.33　第１次調査出土遺物 ……49
fig.34　二葉町遺跡出土白磁 ……50
fig.35　二葉町遺跡出土青磁 ……51
fig.36　ＳＴ301（二葉６）遺構図および遺物実測図 ……55
fig.37　ＳＴ302（二葉６）遺構図および遺物実測図 ……55
fig.38　ＳＴ302（久保６）遺構図および遺物実測図 ……56

表　目　次

表１　二葉町遺跡調査成果公開展示 ……2
表２　二葉町遺跡出土輸入陶磁一覧 ……52
表３　二葉町遺跡出土輸入陶磁の消長 ……53

巻頭写真目次

巻頭写真図版１　調査区全景（東から）
巻頭写真図版２　ＳＥ315出土遺物・ＳＥ317出土遺物
ＳＥ318出土遺物・輸入陶磁

挿図写真目次

写真１　重機掘削作業状況 ……3
写真２　発掘体験学習 ……3
写真３　クレーンによる空中写真撮影 ……3
写真４　木材組織顕微鏡写真 ……31

写真図版目次

図版１　二葉町遺跡調査地空中写真（俯瞰モザイク）
図版２　二葉町遺跡調査地（久保６）空中写真〔俯瞰モザイク〕
図版３　調査区全景（東から）
調査区全景（西から）
図版４　ＳＢ326・327（北西から）
ＳＢ326柱穴（Ｐ6）断面（南東から）
ＳＢ327柱穴断面（南東から）
図版５　ＳＥ315断面（南東から）
ＳＥ315遺物出土状況（南西から）
ＳＥ315完掘状況（南東から）
図版６　ＳＥ316断面（北西から）
ＳＥ316完掘状況（北西から）
ＳＥ317断面（東から）
図版７　ＳＥ317石製品検出状況（東から）
ＳＥ317曲物検出状況（東から）
ＳＥ317完掘状況（南から）
図版８　ＳＥ318断面（北東から）
ＳＥ318曲物検出状況（北東から）
ＳＥ318完掘状況（南東から）
図版９　ＳＢ326出土遺物
ＳＥ315出土遺物 (1)
図版10　ＳＥ315出土遺物 (2)
図版11　ＳＥ315出土遺物 (3)
ＳＥ316出土遺物
ＳＥ317出土遺物 (1)
図版12　ＳＥ317出土遺物 (2)
ＳＥ318出土遺物 (1)
図版13　ＳＥ318出土遺物 (2)
図版14　ＳＥ318出土遺物 (3)
図版15　ＳＤ311・ＳＤ318・ＳＫ313・ＳＫ314・ＳＸ315出土遺物
ＳＸ301出土遺物 (1)
図版16　ＳＸ301出土遺物 (2)
土錘
遺物包含層出土遺物
ＳＰ310出土遺物
図版17　遺構に伴わない出土遺物
輸入陶磁

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経緯と経過

(1)　調査に至る経緯

二葉町遺跡が所在する、長田区腕塚町・久保町・二葉町周辺は、南北方向の大正筋商店街、東西方向の六間道商店街など多くの商店街が存在する商業地域であり、古い木造家屋が密集する地区であった。

平成７年１月17日午前５時46分に発生した、兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）は多くの建物や高速道路を倒壊、焼失した。当地区も甚大な被害を受け、多くの市民が避難生活を余儀なくされた。その後、当地区を対象に新長田駅南第２地区震災復興第二種市街地再開発事業（以下、再開発事業）として都市計画が決定された。

事業区域内には、周知の埋蔵文化財包蔵地である松野遺跡、二葉町遺跡などが存在しており、平成７年度より、施工範囲決定地区について、順次試掘調査を実施し、二葉町遺跡では遺物包含層と遺構面が良好に遺存することが確認された。この結果を踏まえ、神戸市都市計画局新長田南再開発事務所（当時、現神戸市都市計画総局新長田南再開発事務所）と協議を行ない、建物除却の完了した部分から、順次全面発掘調査を実施することとなり、調査は平成８年度より開始された。調査の完了した範囲については再開発ビルが着工され、久保町６丁目における今回の調査地を除き、すでに調査は完了している。

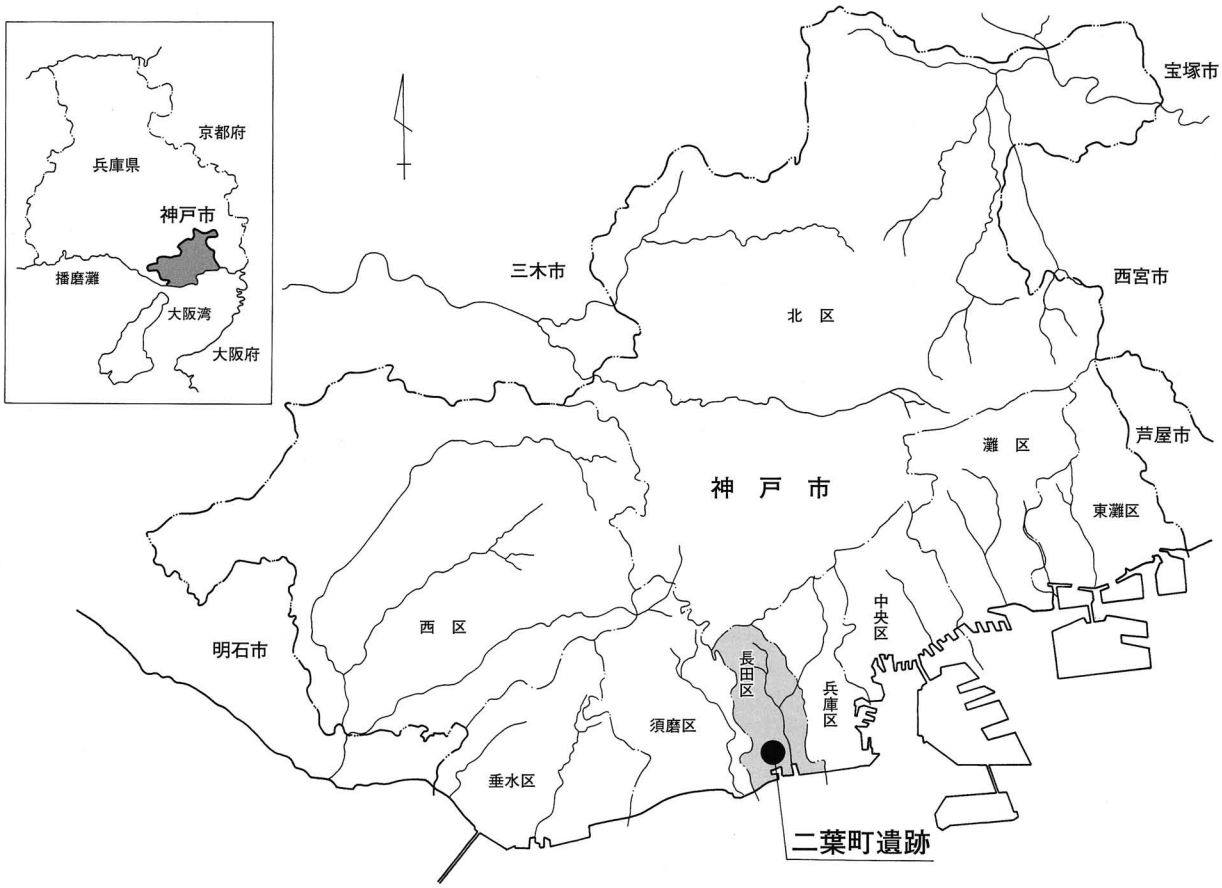


fig. 1　二葉町遺跡の位置

(2) 調査組織

神戸市文化財保護審議会　　史跡・考古資料担当

工樂　善通　　大阪府立狭山池博物館長

和田　晴吾　　立命館大学文学部教授

神戸市教育委員会事務局

教育長　　橋口　秀志

社会教育部長　　大寺　直秀

教育委員会参事　　柏木　一孝

(文化財課長事務取扱)

社会教育部主幹　　渡辺　伸行

(埋蔵文化財センター所長事務取扱)

埋蔵文化財指導係長　　丸山　潔

埋蔵文化財調査係長　　千種　浩

文化財課主査　　丹治　康明

同　　安田　滋

同　　斎木　巌

事務担当学芸員　　中谷　正

遺物整理担当学芸員　　黒田　恭正

佐伯　二郎

保存科学担当学芸員　　中村　大介

(財) 神戸市体育協会

会長　　表　孟宏

副会長　　小川　雄三

(専務理事事務取扱)

常務理事　　碩　弘四郎

総務課長　　赤沢　徹

総務係長　　簑輪　龍男

調査担当学芸員　　池田　毅

阿部　功

(3) 調査の経過

今回の調査は、再開発事業に伴う二葉町遺跡の最後の調査範囲となる部分である。調査地の位置する久保町６丁目地区は、今回の調査地の南側隣接地において、平成元年度に神戸女子大学二葉町遺跡調査会による共同住宅建設に伴う第１次調査が実施され、平成８年11月からは再開発事業に伴う発掘調査（第３次調査）が最初に開始された地区である。

今回の調査対象地の面積は500m²で、調査は平成21年５月18日から開始した。

平成８年度に開始された、再開発事業に伴う二葉町遺跡の発掘調査成果については、これまで、現地において地元地域住民を対象とした見学会等を適宜実施し、公開を行なって来た。平成10年度には、二葉町６丁目地区SE306出土の井戸枠船材を、埋蔵文化財センターにおいて速報展示を行なっている。その他、地域の歴史についての理解を深めてもらうために、地域施設を利用した展示会等を開催し、下記の通り公開を行なって来た。

開催年度	展　示　内　容	展 示 場 所
平成12年度	長田区歴史変遷展	アスタギャラリー
平成14年度	長田区の遺跡	長田区役所震災資料室
平成15年度	アスタくにづか発掘展－地下に眠る中世の遺跡－	アスタギャラリー

表１　二葉町遺跡調査成果の公開展示

尚、これまでの調査成果は、平成13年度に『二葉町遺跡発掘調査報告書　第３・５・９・12次調査』、平成20年度に『二葉町遺跡発掘調査報告書　第14～21次調査』として刊行されている。

(4) 調査日誌抄

平成21年5月18日　調査資材を搬入、調査地周囲の防塵ネット仮囲いを開始する。

5月19日　重機掘削を開始。並行して攪乱掘削、遺物包含層の掘削、遺構面の検出、精査を行なう。攪乱の影響が著しい。

5月26日　重機掘削完了。

5月27日　調査区北西部で井戸1基（SE315）検出、掘削を開始する。

5月28日　調査区東半部で井戸1基（SE316）を検出。

6月1日　調査区西半部の遺構検出掘立柱建物2棟程か。

6月2日　杭打ち、割付開始。攪乱掘削除去、遺構検出、遺構掘削を続行。

6月4日　市立駒ヶ林中学校1年生生徒、発掘体験学習実施。60名参加。

6月5日　井戸2基断面写真撮影、断面図実測。

6月8日　平面図実測開始。各遺構掘削、記録作業を継続。

6月9日　SE316完掘状況写真撮影。

6月11日　調査区南側で新たに2基の井戸を検出。（SE317・318）掘削を開始する。

6月12日　基準点測量実施。SE315遺物出土状況写真撮影。

6月15日　遺構掘削、記録作業を続行。

6月16日　SE317・318・SX301断面写真撮影、断面図実測。

6月17日　全景写真撮影。空中写真撮影準備。

6月18日　クレーンによる空中写真撮影実施。

6月19日　全景写真撮影。

6月23日　ピット半裁開始。

6月26日　SE317・318曲物取上げ、完掘へ。

6月30日　東半部下層の自然河道断割開始。

7月1日　テレビ局取材、番組収録。

7月2日　ピット半裁、記録作業を継続。

7月9日　自然河道からの遺物の出土は無し、南東側から、重機による埋戻し作業開始。

7月13日　南壁土層断面図実測。

7月14日　北壁土層断面図実測。

7月15日　北壁断割、遺構掘削、記録作業完了。

7月16日　埋戻し作業完了。資材搬出、撤収作業。

7月17日　仮設事務所搬出、調査を完了する。

写真1　重機掘削作業状況

写真2　発掘体験学習

写真3　クレーンによる空中写真撮影

第２節　二葉町遺跡の立地と歴史的環境

(1)　遺跡の立地

大阪湾岸に東西に連なる六甲山系は、花崗岩が風化した崩落しやすい土壌で、六甲山系の南側には流出する大小の河川により、数多くの扇状地が形成されている。二葉町遺跡は、この六甲山系から流出する苅藻川や妙法寺川などによって供給された土砂と、瀬戸内海からの海流により形成された、自然堤防上に立地している。現在の海岸線からは、約500m北西に位置する。調査地付近の標高は現況で3.8～3.9m前後である。

調査地付近はかつて八部郡駒ヶ林村に属し、明治18年（1885）の『仮製地形図』では、扇状地のやや高位部をほぼ東西に通過する西国街道と、海岸部に立地する駒ヶ林村、野田村の集落との間には、南東への緩斜面地上に水田が広がり、溜池が点在する風景が認められる。駒ヶ林村は明治22年(1889)に、林田村として付近の村々と合併、明治29年(1896)に神戸市と合併している。大正時代の耕地整理以降は市街地化が急速に進行し、腕塚町・久保町・二葉町の地名は大正９年（1920）年に誕生している。昭和７年（1932）の地形図ではすでに、ほぼ平成７年の震災以前の街区に近い状況となっており、現在の国道２号線には、昭和２年（1927）に須磨浦通５丁目まで延伸した、神戸市電が東西に走り、街区に建物が密集する、神戸市西部有数の商工業地域として発展している状況が読み取れる。

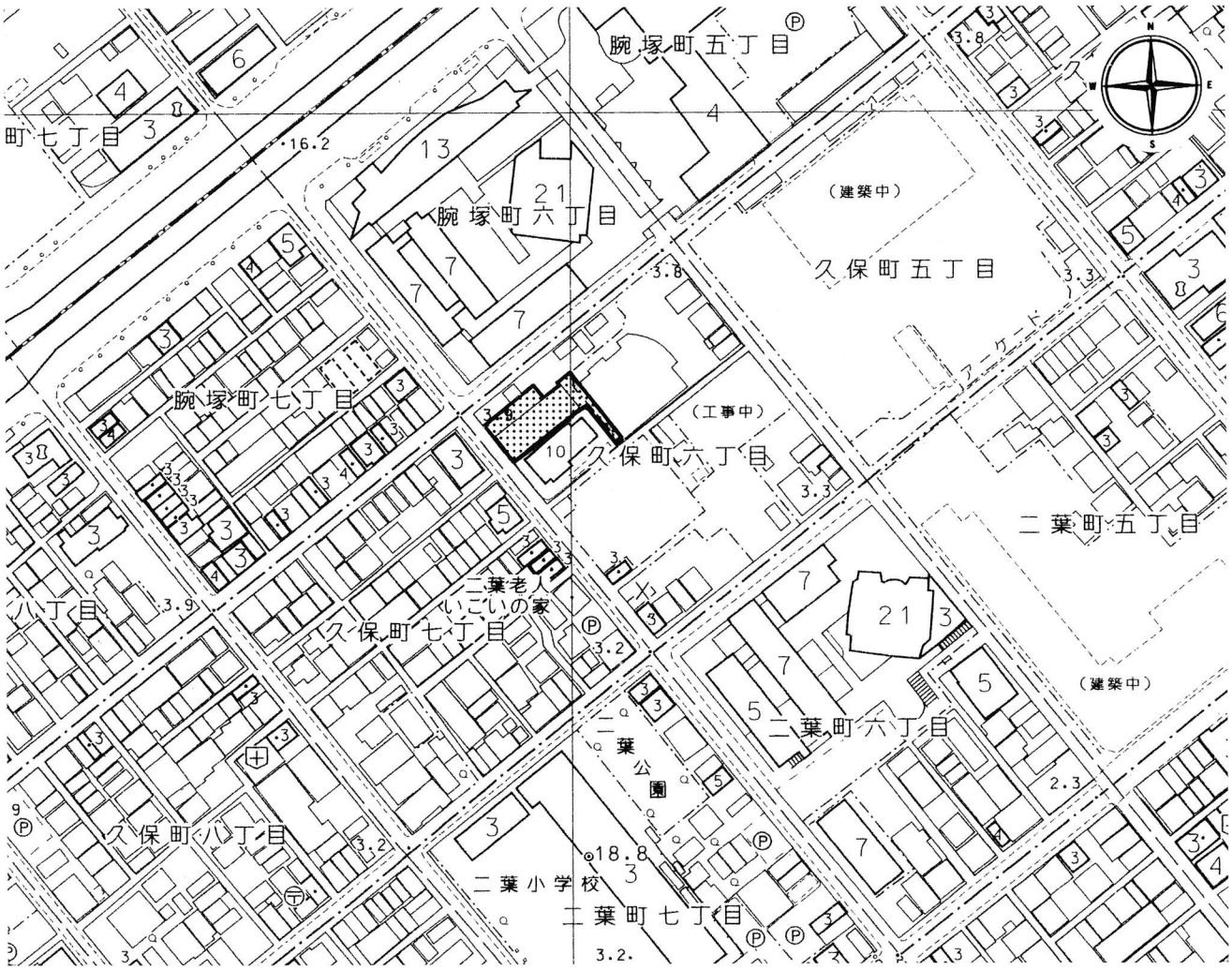


fig. 2　調査地位置図（S＝1：2,500）

(2) 歴史的環境

二葉町遺跡が立地する長田区は、神戸市内でも濃密に遺跡が分布する地域のひとつである。近隣の遺跡から調査地付近の歴史的な概観を見てみたい。

旧石器時代

これまでに知られている最古の生活の痕跡は、会下山遺跡[1]において、サヌカイト製国府型ナイフ形石器が採集されており、長田神社境内遺跡から尖頭器が出土しているが[2]、詳細は明らかではない。

縄文時代

縄文時代については、大手町遺跡で早期の神並上層式と考えられる山形押型文土器片が出土している[3]。前期の様相は明らかではない。中期には名倉遺跡から土器片が採集されており[4]、楠・荒田町遺跡[5]では中期に遡るものと考えられる土器片、後期の土坑などの遺構、遺物が確認されている。晩期後半～弥生時代前期にかけては、遺跡数も増加し、楠・荒田町、上沢[6]、三番町[7]、五番町[8]、長田神社境内[9]、御蔵[10]、二葉町、戎町[11]、大手町などの各遺跡から土坑、溝などの遺構や、突帯文土器が出土している。

弥生時代

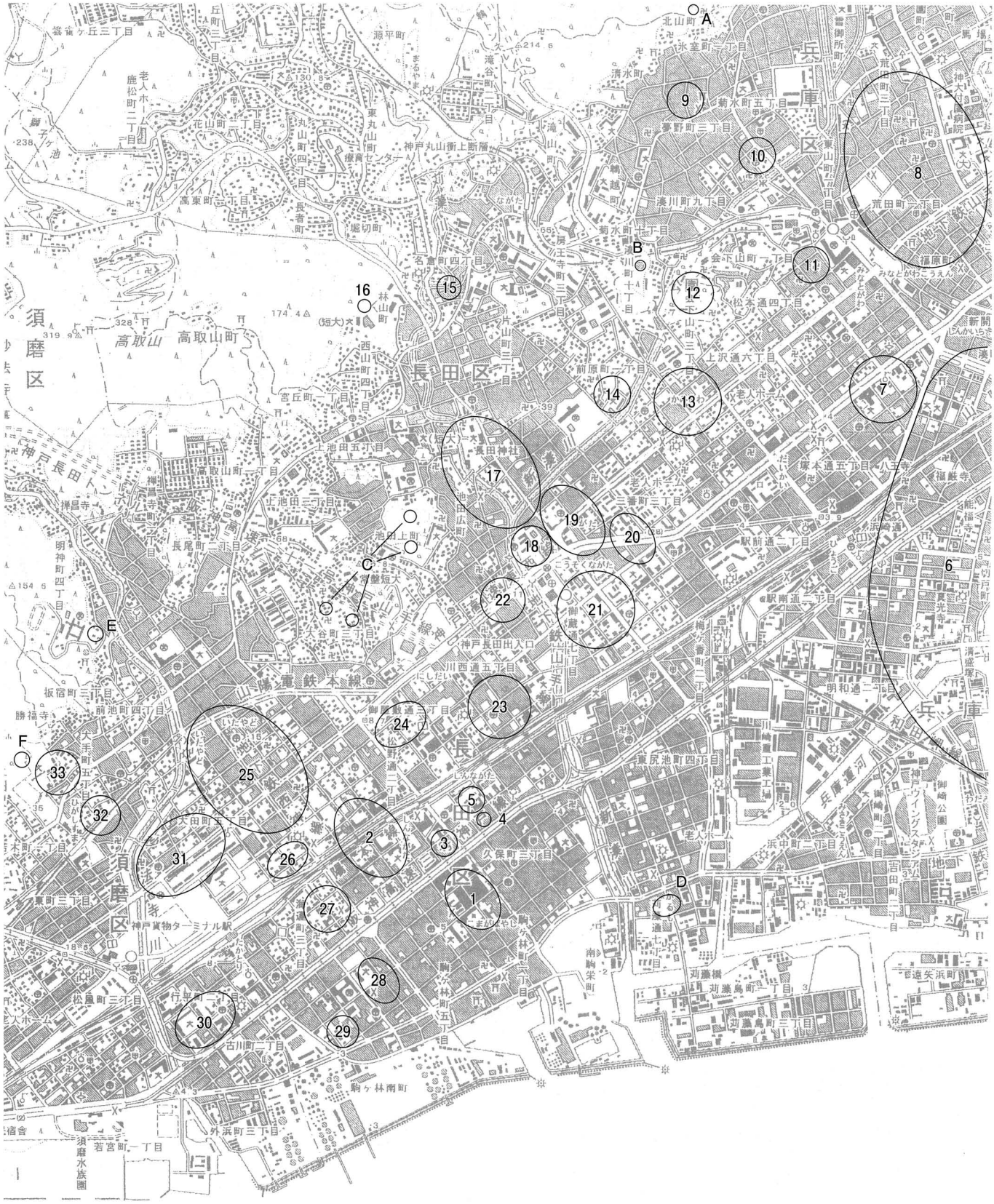
縄文時代晩期末～弥生時代前期には、大開遺跡[12]で環濠を伴う集落が形成される。近畿で最古段階の環濠集落として注目され、縄文時代と弥生時代の接点を考える上での重要な資料となっている。また、前期後半には二葉町遺跡でも遺構、遺物が確認されている。

続く前期末～中期には楠・荒田町遺跡が西摂地域の拠点集落の一つとして位置づけられる。前期末～中期初頭の貯蔵穴、中期前半の竪穴建物、中期後半の方形周溝墓などの多くの遺構が検出され、時代の推移による集落内における貯蔵域、居住域、墓域の変遷が確認されている[13]。また出土土器は前期から中期における西摂地域の基準資料となっている。戎町遺跡も前期～中期にかけて盛行する集落遺跡である。前期の竪穴建物や、水田などが確認され、木製鍬未製品も出土している。また中期の竪穴建物、方形周溝墓群が確認されている[14]。この他に中期中葉の土器が大量に出土した東山遺跡[15]、ゴホウラ貝製貝輪40点余が中期後半の壺に納められて出土した、河原遺跡[16]などが古くから知られている他、大手町遺跡からも遺物が多数検出されている。

後期～古墳時代初頭にかけては数多くの遺跡が確認されており、遺跡数は急増する。楠・荒田町、兵庫松本[17]、上沢、三番町、五番町、長田神社境内、長田南[18]、御蔵、戎町、若松町[19]、鷹取町[20]、大手町などの遺跡が挙げられ、兵庫松本、長田神社境内、大手町遺跡などはこの時期に盛行を迎え、竪穴建物や掘立柱建物などの多くの遺構や遺物の検出が確認されている。大手町遺跡からは線刻による、龍をモチーフにした絵画土器や、手焙形土器などが出土している[21]。

古墳時代

古墳時代前期には、平野部を望む丘陵上に夢野丸山古墳（円墳、径20m）[22]、会下山二本松古墳（前方後円墳、全長55m）[23]、得能山古墳（円墳）[24]などが築造される。中期には旧苅藻川河口に念仏山古墳が築かれたとされ、鰭付円筒埴輪が出土しているが、古くに消滅し詳細は不明である[25]。後期には池田古墳群[26]、大手古墳群[27]等が挙げられるが、古くから市街地化が進んだ地域であるため、詳細は不明である。この他、兵庫区雪御所町から荒田町にかけて横穴式石室を埋葬施設とする古墳群、旧苅藻川河口付近の海岸に近い低地には雀塚、櫟塚、大水の子古墳などの後期古墳、兵庫区氷室町付近や長田区大塚町付近にも古墳群が存在したといわれている[28]。



1．二葉町遺跡	9．河原遺跡	17．長田神社境内遺跡	25．戎町遺跡	33．大手町遺跡
2．松野遺跡	10．東山遺跡	18．長田南遺跡	26．千歳遺跡	A．夢野丸山古墳
3．大橋町遺跡	11．兵庫松本遺跡	19．五番町遺跡	27．若松町遺跡	B．会下山二本松古墳
4．大橋町東遺跡	12．会下山遺跡	20．三番町遺跡	28．長田野田遺跡	C．池田古墳群
5．若松町東遺跡	13．上沢遺跡	21．御蔵遺跡	29．長田本庄町遺跡	D．念仏山古墳
6．兵庫津遺跡	14．室内遺跡	22．御船遺跡	30．鷹取町遺跡	E．得能山古墳
7．大開遺跡	15．名倉遺跡	23．神楽遺跡	31．大田町遺跡	F．大手古墳群
8．楠・荒田町遺跡	16．林山古窯址	24．水笠遺跡	32．権現町遺跡	

fig. 3　周辺の主な遺跡（S＝1：25,000）

古墳時代中期以降の集落は、柵に囲まれた「豪族居館」と考えられる6世紀初めの掘立柱建物群が検出された松野遺跡[29]をはじめ、楠・荒田町、湊川[30]、三番町、上沢、神楽、水笠[31]、大田町などの各遺跡で集落跡が確認されている。

松野遺跡の柵に囲まれた掘立柱建物群は、この地域の神奈美である高取山を望む建物群と推定され、モニュメントとの見方もある[32]。この建物群の南側からは、中期末～後期前半の竪穴建物群や掘立柱建物群が検出され、多数の滑石製品が出土している。三番町遺跡からは竪穴建物、土器溜り、大溝などが検出され、大溝からは中期の土師器類と共に小型仿製鏡が出土している[33]。上沢、神楽の両遺跡では中期～後期の竪穴建物や掘立柱建物が多数検出され、滑石製玉類、韓式系土器などが出土している[34]。

長田区林山町では、神戸市内で確認されている数少ない古墳時代の須恵器窯のひとつである林山古窯址が確認されている[35]。発掘調査が実施されていないため詳細は不明であるが、採集された遺物から6世紀後半頃に操業した窯であると考えられている。

飛鳥時代～平安時代

飛鳥時代～奈良時代には、御蔵遺跡で掘立柱建物など多くの遺構が確認され、奈良三彩の脚付火舎または盤の脚、土馬や銙帯などが出土している[36]。室内遺跡[37]は現在の室内小学校内における瓦類の出土から白鳳期の寺院「房王寺」の推定地と考えられている。

室内遺跡の南側に位置する上沢遺跡では、飛鳥時代の掘立柱建物、鞴羽口、鉄滓、銅滓、漆容器、奈良時代～平安時代の掘立柱建物群などの多くの遺構や、銅製巡方、銅製絞具、銭貨や、井戸から銅鋺などの遺物が出土している[38]。

大田町遺跡は古代山陽道の駅家のひとつ「須磨駅家」の可能性が高いことが指摘されている。奈良時代～平安時代の掘立柱建物約30棟、土坑、地鎮遺構、土器埋納遺構などが確認されており、平成3年度の兵庫県教育委員会による調査ではヘラ描文字が施された円面硯が出土した。「荒田郡　中富郷　直□□」と現時点で解読され、文献には現れない「荒田郡」の存在が判明した[39]。

また、長田野田遺跡からは、奈良時代の掘立柱建物、柱列が確認されている[40]他、二葉町遺跡でも奈良時代の掘立柱建物群が確認されており、公共性の高い性格が指摘されている。当地域は古代山陽道が通過していたものと推定され、交通の要衝であったことから、官衙的な性格が強い遺跡が集中している。

中世以降

平安時代末期以降、遺跡の数は急増する。この時期には開発が活発に進行したものと考えられる。楠・荒田町遺跡の神戸大学付属病院敷地内からは大規模な二重の堀、柱穴内に礎盤石を据えた櫓と考えられる掘立柱建物が検出されており[41]、楠・荒田町遺跡の北側に位置し、園池遺構が確認された祇園遺跡[42]と共に平氏の「福原京」に関連するものとして注目されている。平安時代後半～鎌倉時代にかけては、長田神社境内遺跡で祭祀に関連すると考えられる遺構が確認され[43]、大橋町遺跡[44]、長田野田遺跡[45]から掘立柱建物群、溝、土坑墓などが検出されている。長田野田遺跡からは室町時代の遺構、遺物も確認されている。二葉町遺跡から掘立柱建物群や井戸、木棺墓など数多くの遺構が確認されている。

律令期以降近世にかけて、瀬戸内海航路の基幹港のひとつとして港湾都市を形成した兵庫津遺跡では、奈良時代～近世に至る数多くの遺構、遺物が確認され、近年は多方面の分野からの総合的な考察が行なわれ、その様相が次第に明らかになりつつある[46]。

(3) 既往の調査概要

二葉町遺跡は、昭和63年度に市立二葉小学校校舎改築に伴う試掘調査によって、初めてその存在が確認された遺跡である。試掘調査では中世の良好な遺物包含層が確認された。平成元年度には久保町６丁目において、共同住宅建設に伴う発掘調査（第１次調査）が実施された。平安時代末～鎌倉時代初めの掘立柱建物３棟、井戸１基が確認され、遺物包含層から白磁四耳壺が出土した。平成５年度には個人住宅建設に伴う第２次調査が実施され、中世の遺構・遺物が確認された。平成８年度からは、新長田駅南第２地区震災復興第二種市街地再開発事業に伴い、大規模な調査が継続して実施されている。

縄文時代以前　二葉町遺跡で初めて、生活の痕跡が確認されるのは縄文時代晩期からである。

腕塚町６丁目・久保町５丁目地区の流路、二葉町６丁目地区の遺構面の粗砂層から、晩期の突帯文土器片などが出土しているが、明確な遺構は確認されていない。

弥生時代　前期の遺構・遺物が確認されている。腕塚町６丁目地区、久保町６丁目地区で、土坑、溝が検出され、蓋、壺等の遺物の出土が確認されている。

古墳時代　古墳時代については、これまでに遺構、遺物は確認されていない。

飛鳥時代　飛鳥時代の遺構は、二葉町６丁目で土坑１基（SK202）が確認されているのみである。７世紀前半から中頃の須恵器坏、土師器坏、小型甕、鍋、蛸壺、土錘が出土している。

奈良時代　奈良時代の遺構・遺物は、二葉町６丁目地区北東部において比較的集中的に確認されている。これまでの調査では、奈良時代の遺構、遺物の分布はこの地区に限られている。掘立柱建物５棟、井戸、土坑が検出されている。

検出された掘立柱建物は、南北棟の建物２棟が並んで検出されており、北側には２間×２間の小さな建物が、南側には２間×２間の建物と南北棟の建物が検出されている。２間×２間の小さな建物を間にして、大型の建物が東西に並ぶ建物配置から、権力者の邸宅若しくは公共性を帯びた施設である可能性が指摘されている。

平安時代前半　平安時代前半の遺構は、二葉町６丁目地区において、10世紀代の掘立柱建物２棟、井戸２基、溝が検出され、建物は、その規模と位置から主屋と附属屋である可能性が指摘されている。この他、久保町６丁目地区からは土坑１基（SK301）が検出されており、10世紀半ばの時期が考えられる「ての字状口縁」の土師器皿、坏が出土している。

飛鳥時代～平安時代前半（10世紀）までの段階では、二葉町６丁目地区付近に遺構・遺物の分布が集中する傾向が認められる。

平安時代中頃～鎌倉時代　平安時代中頃（11世紀中頃）～鎌倉時代（13世紀中頃）にかけては、二葉町遺跡で最も多くの遺構・遺物が確認される時期であり、連綿と集落が営まれている。出土遺物から、概ね平安時代中頃（11世紀中頃～12世紀前半）、平安時代末（12世紀中頃～後半）、鎌倉時代前半（13世紀前半～中頃）の３期の遺構群に分けられることが指摘されている。

平安時代中頃　腕塚６丁目地区では、当該期の遺構はわずかにピットが確認されているに過ぎない。

久保町６丁目地区では、掘立柱建物３棟と井戸、大型土坑が認められる。SB301とSE302は同時に存在したものと考えられ、その廃絶後に大型土坑SX302が掘削されている。

二葉町６丁目地区では、掘立柱建物４棟、井戸が確認されている。中央西側に建物が集中し、地区の北西側には井戸が存在している。また、木棺墓１基が検出されている。

平安時代末　　腕塚町６丁目地区では、掘立柱建物１棟、土坑が認められる。

久保町６丁目地区では、地区の北東側に掘立柱建物４棟、井戸などの遺構のまとまりが認められる。また、付近にはこの時期に機能していたものと考えられる鋤溝群が多数検出されている。これらの鋤溝群は12世紀後半以降に造営が開始される掘立柱建物群に切られており、耕地が集落域へと変化していく状況を示しているものと考えられる。

二葉町６丁目地区では、前段階で井戸の分布が見られた地区の北西側に、新たに掘立柱建物３棟の造営、井戸の存在が認められる。

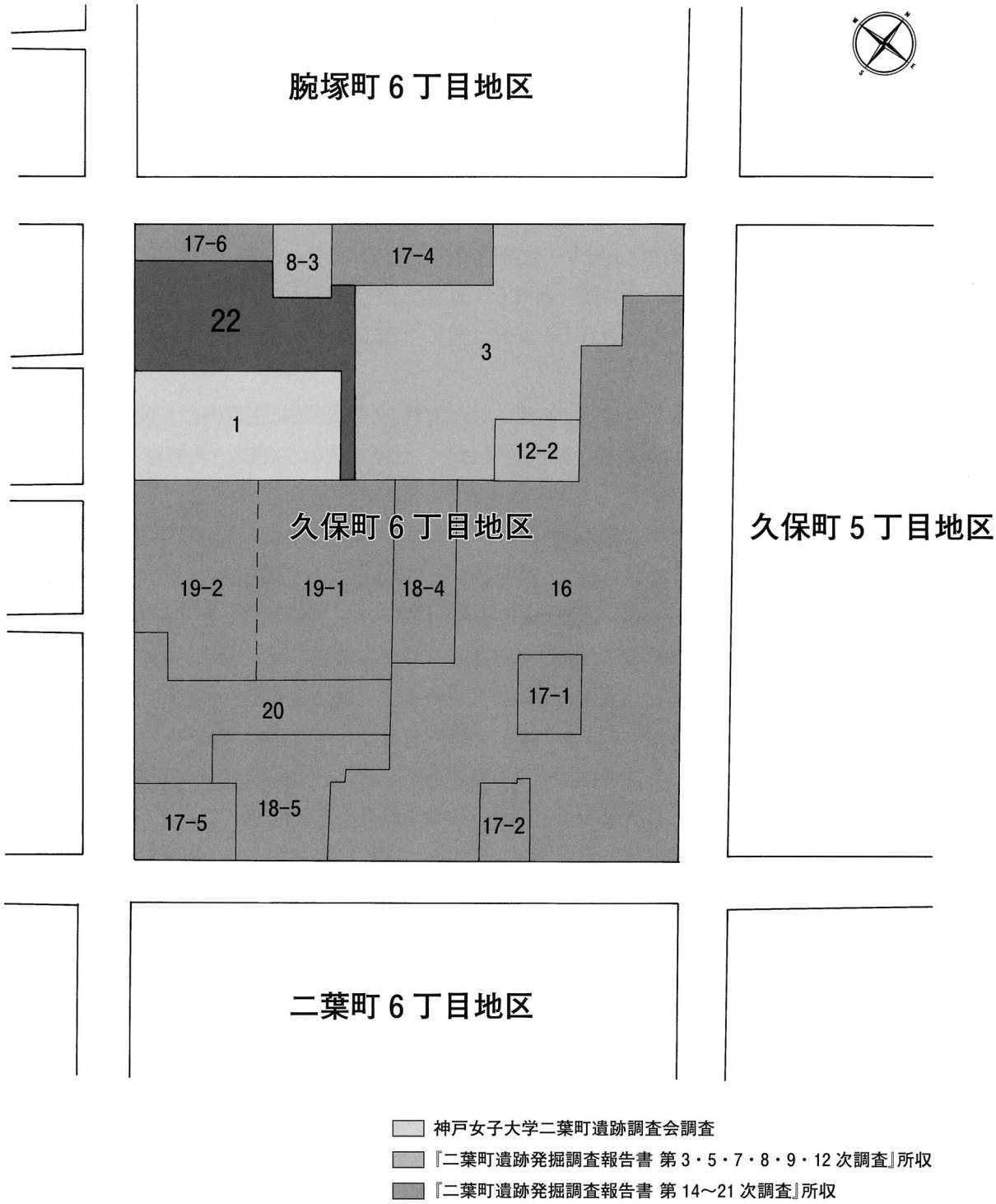


fig. 4　久保町６丁目地区調査範囲（数値は調査次数を示す）

鎌倉時代前半　腕塚町６丁目地区では、掘立柱建物１棟が確認されている。

久保町６丁目地区は、大型土坑SX302埋没後に掘立柱建物４棟の造営が行なわれる。また、木棺墓２基が検出され、ST302には赤漆塗りの皿、黒漆塗り皿各１点が土師器皿２点、白磁碗片、鉄刀１点と共に埋納されていた。

二葉町６丁目地区では８棟の掘立柱建物が確認される。木棺墓が３基確認され、ST301には中国製白磁碗１点、青磁皿４点、ST302には白磁碗２点、土師器皿４点、刀子、手斧、ST303には漆塗り烏帽子、土師器皿３点、刀子１点が埋納されていた。

井　戸　二葉町遺跡では奈良時代～鎌倉時代の井戸が多数検出されている。

内訳は、奈良時代（８世紀）と平安時代前半（９世紀）井戸各１基が二葉町６丁目地区で検出され、平安時代前半（10世紀代）の井戸１基が久保町６丁目地区で検出されている。平安時代中頃～鎌倉時代の井戸が大半を占めており、腕塚町６丁目地区から２基、久保町５丁目地区で３基、久保町６丁目地区から14基、二葉町６丁目地区からは20基の井戸が検出され、これまでの調査で総数42基（中世39基）の井戸が検出されている。

中世の井戸側構造は素掘り、縦板組隅柱横桟留があり、井筒には曲物の有無、数にバリエーションがある。この他二葉町６丁目地区SE306では、複材構造船の胴部を井戸側に再利用しており、注目される。また、同じくSE313では井筒に一木刳抜き材を使用している。

また、二葉町６丁目地区で検出された大型土坑SX302は掘形内に大量の木材を使用して、枡型の水槽状構造物を設置しており、大型土坑のSX303、久保町６丁目SX301、302と共に灌漑を目的とした溜井状遺構である可能性も考えられる。

遺構の分布　二葉町遺跡における遺構の分布は、これまでの調査成果から久保町６丁目、二葉町６丁目に多くの遺構が集中することが確認されている。しかし調査地は、古くからの商工業地域であるため、従前建物基礎等による撹乱が著しく、建物配列などに不明な部分も多数存在している。しかし、これまでに確認されている遺構の検出状況からは、12世紀中頃～13世紀前半の建物は、大きく分けて久保町６丁目地区北東部の一群と、二葉町６丁目地区北西部の一群の２つのグループに分けられることが指摘できる。また、12世紀末～13世紀の段階では、５基の木棺墓の存在が認められ、一部は屋敷墓の性格が指摘されている。集落の周囲には久保町５丁目地区の調査成果から、耕地が広がっていたと推定される。腕塚町６丁目地区は北西側に、12世紀中頃以降掘立柱建物の継続的な造営が認められ、国道２号線側である、さらに北西側に建物群の存在が推定される。

これまでの調査における各遺構・遺物の詳細については、既刊の『二葉町遺跡発掘調査報告書　第３・５・９・12次調査』、『二葉町発掘調査報告書　第14～21次調査』を参照されたい[47)]。

註

1）喜谷美宣「旧石器・縄文時代」『新修神戸市史』歴史編Ⅰ　自然・考古　神戸市　1989

2）須藤　宏「長田神社境内遺跡　第14次調査」『平成12年度　神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　2003

3）中谷　正・山本雅和・須藤　宏『大手町遺跡第１～４・６次発掘調査報告書』　神戸市教育委員会　2003

4）直良信夫「神戸市名倉町出土の縄文土器片」『近畿古文化叢考』　葦牙書房　1943

5）丸山　潔「楠・荒田町遺跡」『昭和61年度　神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　1989
黒田恭正・阿部敬生「楠・荒田町遺跡　第11次調査」『平成４年度　神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　1995
6）阿部敬生編『上沢遺跡発掘調査報告書』　神戸市教育委員会　1995
7）口野博史・水嶋正稔「三番町遺跡　第２次調査」『昭和63年度　神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　1994
8）丸山　潔「五番町遺跡出土の土器」『楠・荒田町遺跡発掘調査報告書』　神戸市教育委員会　1980
川上厚志「五番町遺跡　第７次調査」『平成12年度　神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　2003など
9）黒田恭正編『長田神社境内遺跡発掘調査概報』　神戸市教育委員会　1990
10）山口英正「御蔵遺跡　第３次調査」『平成９年度　神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　2000
11）口野博史・井尻　格「戎町遺跡（第６次）」『平成２年度　神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　1993
口野博史「戎町遺跡　第14次調査」『平成７年度　神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　1998
12）前田佳久編『大開遺跡発掘調査報告書』　神戸市教育委員会　1993
13）丸山　潔・丹治康明編『楠・荒田町遺跡発掘調査報告書』　神戸市教育委員会　1980
14）藤井太郎編『戎町遺跡第35・38・50・56次・松野遺跡第32・33・38次発掘調査報告書』　神戸市教育委員会　2005
15）小林行雄「神戸市東山遺跡弥生式土器研究」『考古学』4-4　東京考古学会　1933
16）濱田耕作「貝輪を容れた素焼壺」『人類学雑誌』36-8合併号　東京人類学会　1933
前掲15）
17）中谷　正編『兵庫松本遺跡　第２～４・12・17・19次発掘調査報告書』　神戸市教育委員会　2005
18）池田　毅「長田南遺跡　第１次調査」『平成10年度　神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　2001
19）口野博史「若松町遺跡　第２次調査」『平成10年度　神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　2001
20）大平　茂編『神戸市鷹取町遺跡』　兵庫県教育委員会　1991
21）前掲３）
22）梅原末治「神戸市夢野丸山古墳」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告』第二輯　兵庫県　1925
23）吉井太郎他「会下山二本松古墳及び経塚」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告』第五輯　兵庫県　1923
黒田恭正「会下山二本松古墳」『昭和59年度　神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　1987
24）梅原末治「神戸市板宿得能山古墳」『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告』第二輯　兵庫県　1925
25）喜谷美宣「市街地に消えた古墳－念仏山古墳－」『神戸市立博物館研究紀要』第６号　神戸市立博物館　1989
26）森田　稔「長田区観音山古墳の出土遺物」『神戸市立博物館だより』No.23　神戸市立博物館　1988
27）前掲３）
28）喜谷美宣「古墳時代」『新修神戸市史』歴史編Ⅰ　自然・考古　神戸市　1989
29）千種　浩編『松野遺跡発掘調査概要』　神戸市教育委員会　1983
30）西岡巧次「湊川遺跡」『昭和61年度　神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　1989
31）藤井太郎編『水笠遺跡第26・27・28・29次発掘調査報告書』　神戸市教育委員会　2009
32）口野博史「松野遺跡の性格とマツリ」『松野遺跡発掘調査報告書　第３～７次調査』　神戸市教育委員会　2001
高取山は、かつて神撫山と呼称されていた。
問屋真一「神撫山か高取山か……」『神戸市立博物館だより』No.35　神戸市立博物館　1991
33）山仲　進編『三番町遺跡　第１次調査（1987・1988年度）』　妙見山麓遺跡調査会　2006
34）池田　毅・井尻　格「上沢遺跡　第９次調査」『平成９年度　神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　2000
渡辺伸行・西岡誠司「神楽遺跡」『昭和59年度　神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　1987
35）稲沢正行・渡辺伸行「神戸市長田区林山窯について」『神戸古代史』3-1　神戸古代史研究会　1986
36）山田清朝・山上雅弘編『御蔵遺跡－第８・９・10次調査－』　神戸市教育委員会　2000
安田　滋・富山直人・石島三和編『御蔵遺跡第４・６・14・32次発掘調査報告書』　神戸市教育委員会　2001
安田　滋・池田　毅・阿部　功・中居さやか『御蔵遺跡第17・38次発掘調査報告書』　神戸市教育委員会　2001
富山直人・川上厚志編『御蔵遺跡第５・７・11～13・18～22・24・28・29・31・33～36・39・41・43次発掘調査報告書』
神戸市教育委員会　2003
谷　正俊編『御蔵遺跡Ⅴ　第26・37・45・51次調査』　神戸市教育委員会　2003
37）室内遺跡では、平成９年度に兵庫県教育委員会により実施された調査で、白鳳期の遺物ではないが、奈良時代～平安時代の瓦や塑像の台座が出土しており、寺院の存在が確実視されている。瓦は芦屋市芦屋廃寺と同文である。
水口富夫・平田博幸・高瀬一嘉「室内遺跡」『平成９年度　年報』　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所　1998

38）斎木　巌「上沢遺跡　第４次調査」『平成８年度神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　1999
橋詰清孝・石島三和・中谷　正「上沢遺跡　第32次－１・２調査」『平成11年度　神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　2001
口野博史・関野　豊「上沢遺跡　第33次調査」『平成11年度　神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　2001
小林さやか編『上沢遺跡　第55次発掘調査報告書』　神戸市教育委員会　2009など
39）森内秀造編『神戸市須磨区　大田町遺跡発掘調査報告書』　兵庫県教育委員会　1993
40）兼康保明・小林健二「長田野田遺跡　第１次調査」『平成７年度　神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1998
41）岡田章一・久保弘幸・深江英憲『楠・荒田町遺跡－神戸大学付属病院構内遺跡－』　兵庫県教育委員会　1997
別府洋二編『楠・荒田町遺跡Ⅱ』　兵庫県教育委員会　2008
42）須藤　宏「祇園遺跡　第２次調査」『平成６年度　神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　1997
富山直人『祇園遺跡　第５次発掘調査報告書』　神戸市教育委員会　2000
43）長田神社境内遺跡では、長田神社の北方地域において、鎌倉時代～室町時代の祭祀に関連するものと考えられる遺構・遺物が確認されている。
前田佳久・井尻　格「長田神社境内遺跡　第６次調査」『平成８年度　神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　1999
前田佳久・阿部敬生・阿部　功「長田神社境内遺跡　第８次調査」『平成８年度　神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　1999
阿部　功『長田神社境内遺跡第17次発掘調査報告書』　神戸市教育委員会　2008
44）大橋町遺跡では、12世紀末～13世紀前半の掘立柱建物群や木棺墓１基が確認されている。木棺墓は１棟の建物の近くから検出されていることから、屋敷墓と考えられている。
中谷　正『大橋町遺跡　第１次－１～６調査発掘調査報告書』　神戸市教育委員会　2006
藤井太郎編『大橋町遺跡第２次発掘調査報告書』　神戸市教育委員会　2007
45）中谷　正「長田野田遺跡」『平成18年度　神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　2009
46）兵庫津遺跡では、近年考古学、文献史、歴史地理学、絵画研究などの多方面からの研究が進展しつつある。
内藤俊哉「兵庫津遺跡　第15次調査」『平成10年度　神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　2001
黒田恭正「兵庫津遺跡　第20次調査」『平成11年度　神戸市埋蔵文化財年報』　神戸市教育委員会　2001
藤井太郎「兵庫津遺跡における埋蔵文化財調査の現状－発掘調査の成果と文献・絵画資料から考える近世都市景観の復原に向けて－」『神戸市立博物館研究紀要』第18号　神戸市立博物館　2002
岡田章一・菱田淳子・深江英憲編『兵庫津遺跡Ⅱ』　兵庫県教育委員会　2004
神戸市立博物館編『特別展　よみがえる兵庫津－港湾都市の命脈をたどる』　神戸市立博物館　2004
藤本史子編『兵庫津遺跡－御崎本町地点発掘調査報告書』　大手前大学史学研究所　2006
藤本史子・中江淳史編『兵庫津の総合的研究－兵庫津研究の最新成果－』　大手前大学史学研究所　2006
阿部　功編『兵庫津遺跡第42次発掘調査報告書』　神戸市教育委員会　2008など
47）川上厚志編『二葉町遺跡発掘調査報告書　第３・５・７・９・12次調査』　神戸市教育委員会　2001
東喜代秀編『二葉町遺跡発掘調査報告書　第14～21次調査』　神戸市教育委員会　2008

参考文献

竹内理三編『角川日本地名辞典　兵庫県』　角川書店　1988
清水靖男編『明治前期・昭和前期神戸都市地図』　柏書房　1995
神戸史学会『新　神戸の町名』　神戸新聞総合出版センター　1996

第２章　調査の成果

第１節　基本層序

今回の調査地においては、同地域が市街化される以前の層位が随所に遺存するものの、大半が建物基礎等による攪乱を受けており、遺物包含層や遺構面が削平されている箇所が目立った。

遺存が良好な箇所における層序については、現地表面より概ね－40～50cm は盛土で、遺構面を覆う遺物包含層までの間に、中世～現代の旧耕土層が３～４層存在する。旧耕土層はいずれも灰色または茶灰色系の砂混りの砂質土である。遺物包含層は暗褐色粘砂土もしくは砂質土で、層厚約５cm である。遺物包含層を除去した面が遺構面となり、遺構面までの深度は箇所によって差異がみられるが、現地表面より凡そ－80～90 cm である。遺構面ベースとなる層位については、調査地の大半が灰茶色系の粘砂土もしくは砂質シルトであるが、東南部は灰茶色または灰褐色系の礫混りの砂質土となっている。

東南部の礫混りの砂質土については、過去の調査において確認されている縄文時代晩期の遺物を含む自然流路[1)]の堆積層に類似するが、今回の調査においては、遺物が確認されなかった。

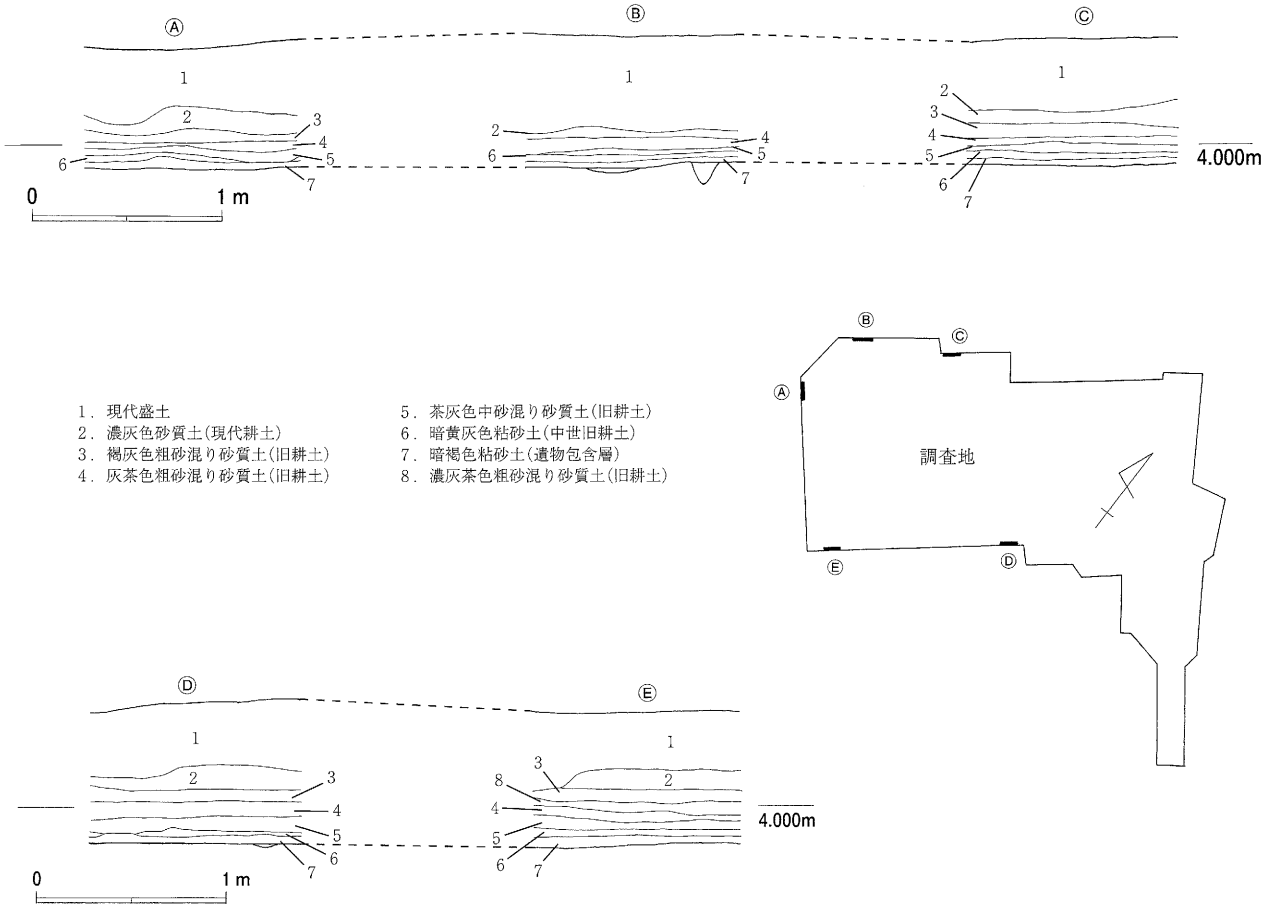


fig. 5　基本層序断面図

第２節　遺構・出土遺物

掘立柱建物２棟、井戸４基のほか、溝、土坑、ピット、落ち込み状遺構などが検出された。遺構は比較的密に存在したと考えられるが、攪乱箇所が多く、削平されたものも多いと推察される。

過去の久保町６丁目地区の調査においては、掘立柱建物26棟、井戸18基などが確認されており[2)]、南側の二葉町６丁目地区を含めた地域が、二葉町遺跡の中核であることが窺える。また、地下には水量豊富な湧水層が存在することから、井戸が多く造られたことも同遺跡の特徴のひとつである。井戸の規模や形状はさまざまであるが、湧水層（久保町６丁目地区では、検出面－2.5～３m、二葉町６丁目地区では、検出面－２～2.5m）に達するような大規模なものについては、中世～近世にかけての９基が確認されている。今回の調査で検出された４基の井戸のうち、２基（SE315・316）が大規模の範疇に入るもので、いずれも、掘立柱建物などと同様に中世のものである。

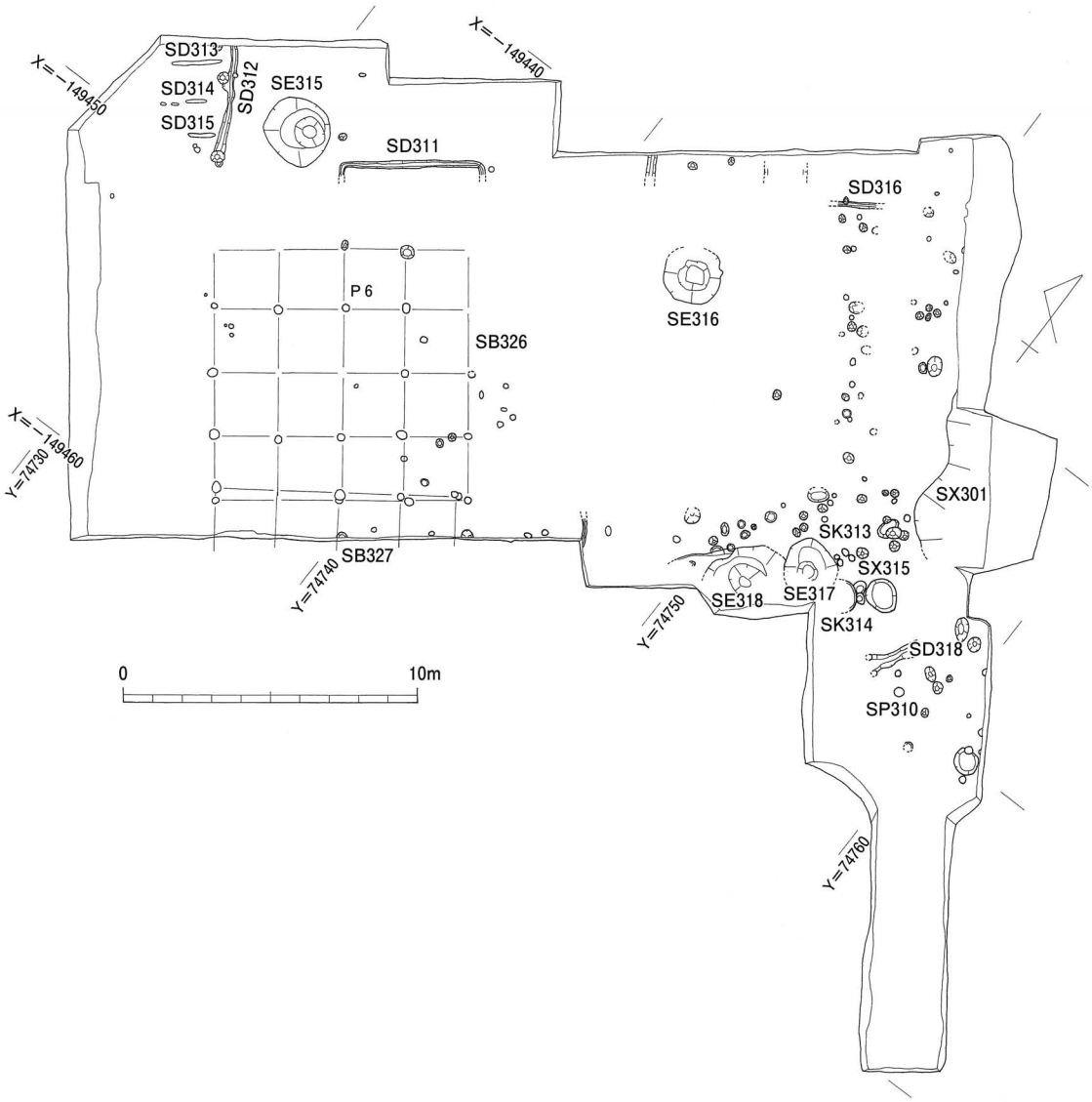


fig. 6　第22次調査地　平面図

その他の遺構で、時期の判明しているものについても、すべてが中世の範疇と考えられ、概ね11世紀末～14世紀後半頃のものと推察される。尚、遺構番号については、過去の報告に連続するかたちにしており、調査時点での番号は「旧○○○」と表記した。

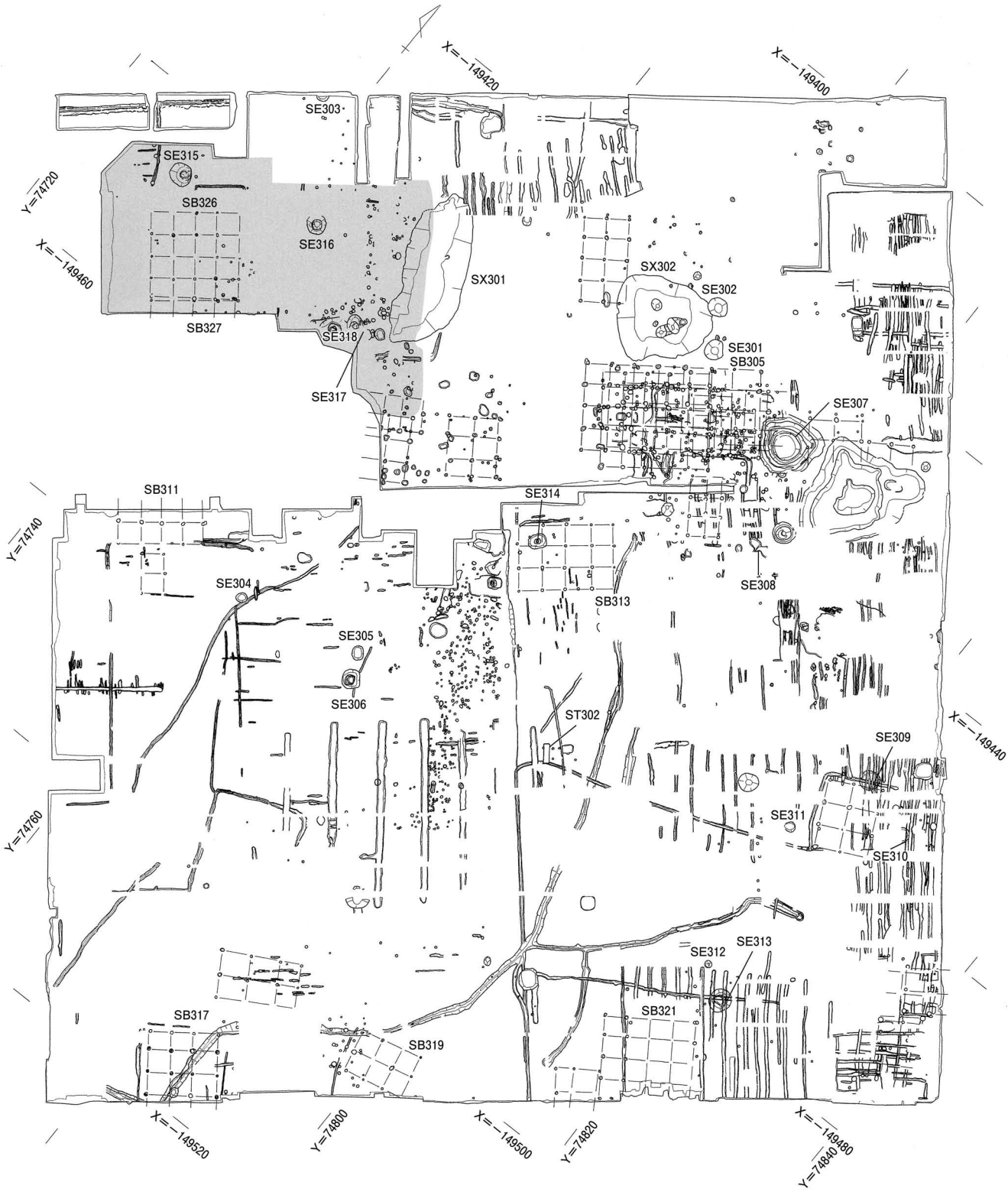


fig. 7　久保町６丁目地区　遺構平面図

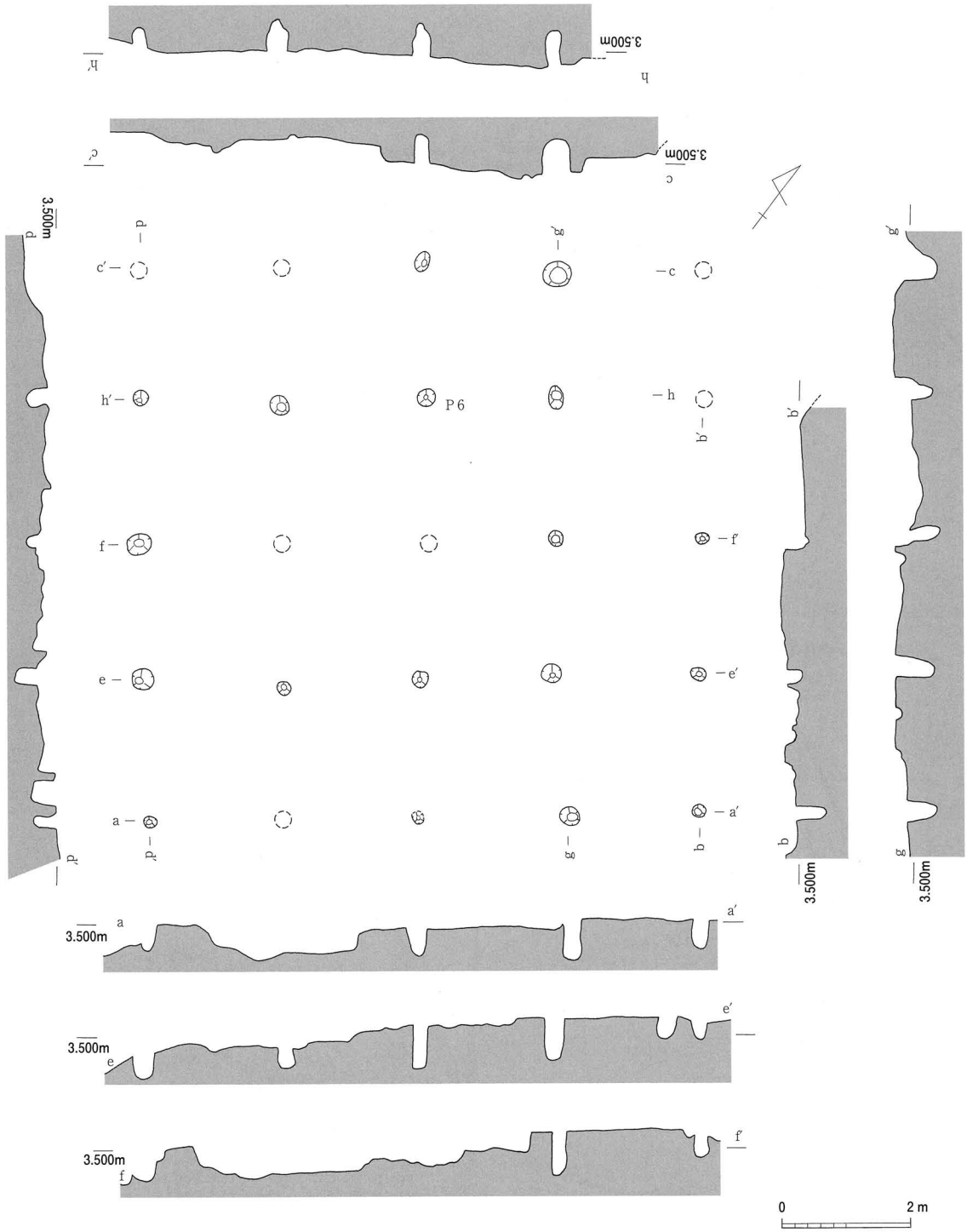


fig. 8　SB326 平面図・断面図

(1) 掘立柱建物

SB326
(旧SB2201)

東西４間（約8.7m）×南北４間（約8.7m）以上の総柱の建物と推定されるが、攪乱や削平によって失われた柱穴もある。柱穴は規模がまちまちで、掘形の平面形が円形かもしくはやや不整な円形を呈する。規模は径約20～40cm、深さ約25～65cmを測り、柱間隔は凡そ2.1～2.3mである。柱穴の柱痕部分を確認できたものも多く、柱痕（柱材）が遺存していたもの（P6・樹種：ムクノキ）も確認された。

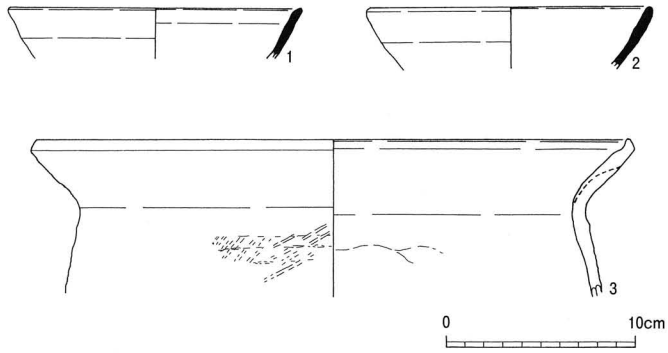


fig. 9　SB326 遺物実測図

出土遺物は少量ながら土師器、須恵器の小片が柱穴内より出土した。１、２は東播系須恵器の埦で、口縁部のみの残存である。口径（復元）が１は15.6cm、２は15.2cmを測る。３は土師質で、口径（復元）32.0cmを測る。口縁部から体部上位にかけてのみの残存であるため、全体形状は把握できないが、堝もしくは甕と考えられる。体部外面はタタキ後ナデ、内面なナデにより調整されている。いずれも、12世紀代のものと推測されるが、詳細は不明である。

SB327
(旧SB2202)

東西４間（約8.2m）×南北不詳の建物と推定される。遺存する柱穴は、掘形の平面形が不整円形もしくは楕円形で、径約25～35 cm、深さ約30～35cmを測り、柱間隔は凡そ1.9～2.1mである。調査地内では、建物北端の柱列のみが検出されており、調査地南側に連続するものと推測される。

出土遺物は少なく、柱穴内より土師器の小片が出土している程度である。

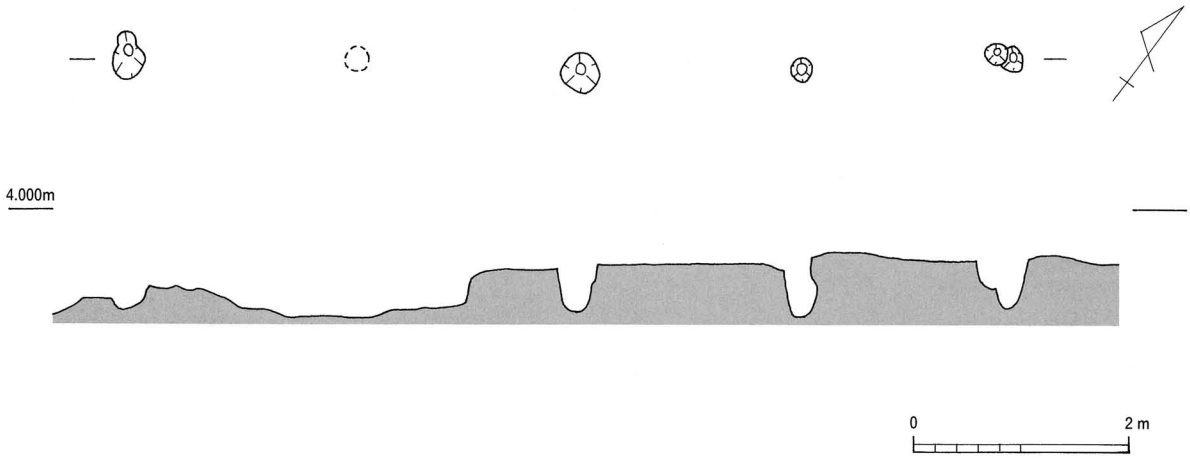


fig. 10　SB327 平面図・断面図

(2) 井戸

SE315
(旧 SE2201)

調査地の北西隅で検出された井戸である。掘形の平面形がやや不整な円形、断面形が漏斗状を呈する。規模は検出面での径が約2.3m、深さ約3.2m を測る。埋土より加工材（樹種：ニヨウマツ）や曲物側板の小片（樹種不明）が出土したが、井戸側材や水溜材に使用されたものかは不明で、井戸側等の構造については確認できなかった。

出土遺物は埋土中より数多く確認されており、上層部からの出土が多く、特に、検出面より－50cm ～120cm のあたりに集中する箇所がみられる。4～10は土師器の小皿で、4～8が手づくね、9、10がロクロによる成形である。また、4～8は、いわゆる「ての字状口縁」と呼ばれる形態のもので、伊野近富氏分類[3)]の Bc タイプに属するものである。9、10はいずれも糸切り底で、10は口縁部が彎曲するタイプである。8が完形で、口径9.7cm、器高1.5cm、9、10もほぼ完形で、9が口径10.0cm、器高15.8cm、10が口径9.7cm、器高1.9cm を測る。また、4～7については、口径（復元）8.8～9.8cm、器高1.1～1.6cm を測る。11～22は東播系須恵器の埦である。法量が口径14.4～16.0cm、器高4.8～5.6cm 測り、型式的には森田稔氏分類[4)]の第Ⅰ期第2段階～第Ⅱ期第1段階の範疇に入るものと考えられる。23は白磁で、碗の底部と考えられる。24は土師質のほぼ完形の有溝土錘で、全長4.5cm、最大径2.2cm を測る。25は器種を特定しにくいが、甕の口縁部と考えられる。須恵質のものと考えられるが、焼成が不良で、瓦器の

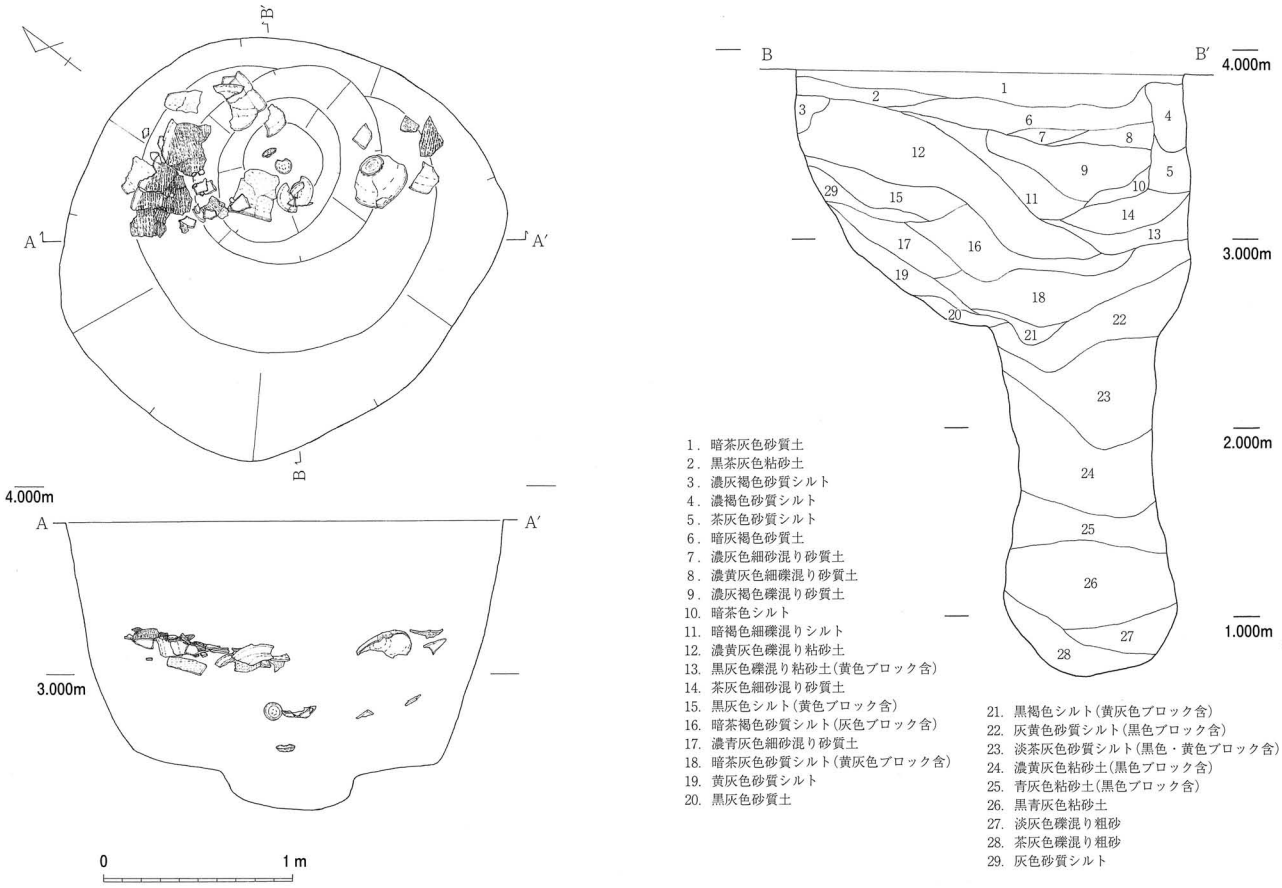


fig. 11　SE315 平面図・断面図

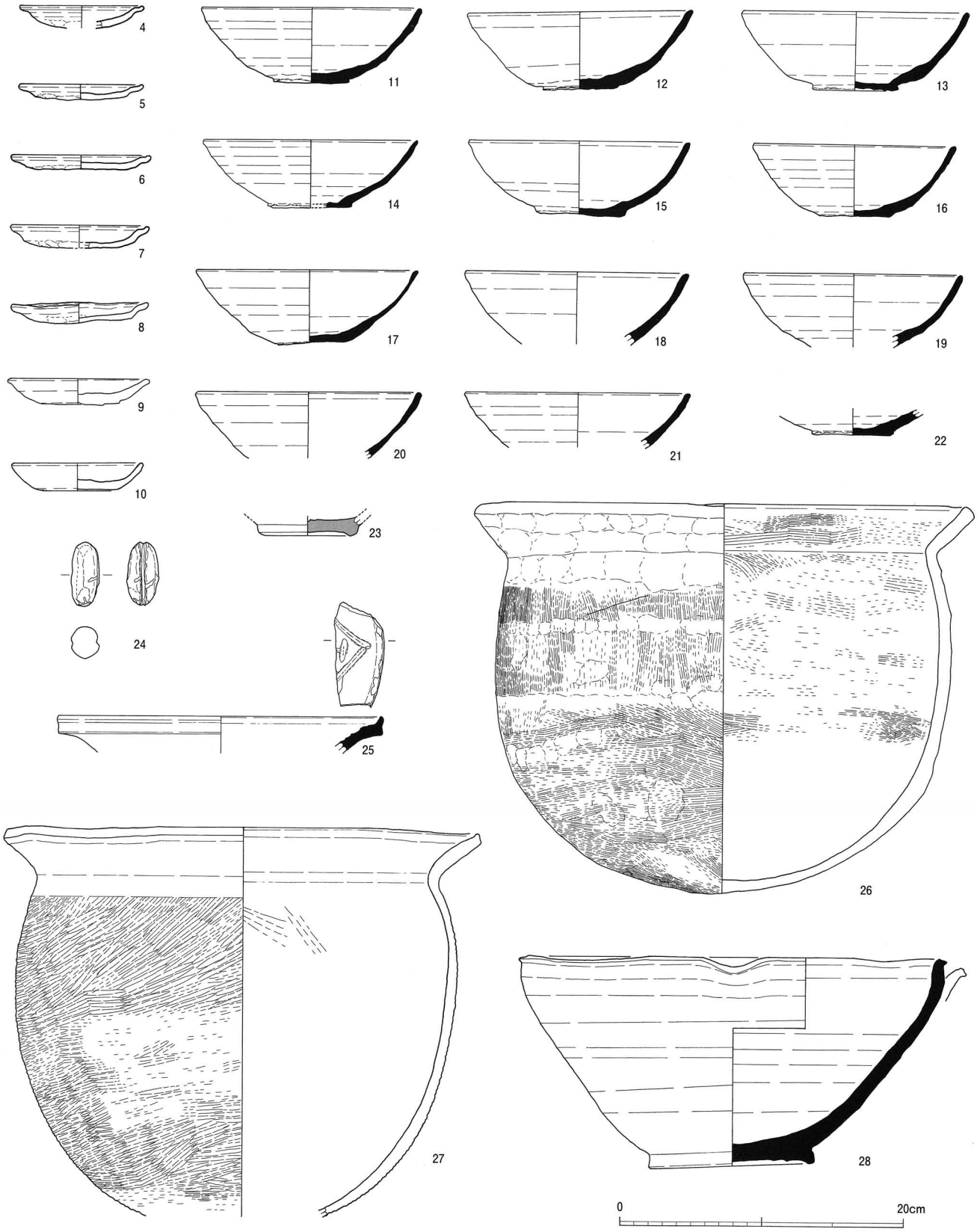


fig. 12　SE315 遺物実測図

ような質感である。内面に線刻がみられ、部首が「ひとがしら」の漢字の一部分と考えられるが、文字の判読には至らなかった。26、27は土師器の堝である。26は口径35.2cm、器高27.6cmを測り、ハケとナデによって調整されている。内外面の体部下半と底部に煤の付着がみられる。27は底部が欠損するが、口径33.6cm、残存高27.5cmを測り、内面を丁寧なナデ、外面をタタキによって調整されている。内外面の体部下半に煤の付着がみられる。28は東播系須恵器の捏鉢で、口縁部が内湾し、端部が下方に拡張されている。また、低い輪状高台を有し、底平面には明確な糸切り痕がみられる。型式的には、森田分類の第Ⅰ期第2段階のものと考えられる。口径30.2cm、器高15.0cmを測る。

これらの遺物の詳細な時期については、東播系須恵器椀の輪高台部分や見込み部分などの特徴から、概ね3時期を想定できる。古い方から13・14・15→11・12・16・22→17の順で、28の須恵器捏鉢と4の土師器小皿が、13・14・15とほぼ同時期、また、5・6・7・8の土師器小皿も13・14・15と11・12・16・22にまたがる時期と推測される。凡そ、13・14・15が11世紀末～12世紀初頭、11・12・16・22が12世紀前半、17が12世紀中頃と考えられ、数量的には12世紀前半のものが多いようである。

SE316
(旧SE2202)

調査地のほぼ中央部で検出された井戸である。掘形は一部を攪乱されているものの、ほぼ円形と考えられ、断面形は漏斗状を呈する。下半部の狭隘となる部分の平面形は、正方に近い隅丸方形を呈する。規模は検出面での径が約2.0m、深さ約2.5mを測る。埋土より曲物側板の小片（樹種：ヒノキ属）が出土したが、水溜などの構造物に伴うものか否かは不明で、井戸側材の痕跡等も確認されなかった。

出土遺物はいずれも小片で、数量的にも少なく、図示し得たものも僅かであった。29は土師器の小皿で、「ての字状口縁」のタイプである。白色系で緻密な胎土を呈し、口径（復元）9.7cm、器高1.7cmを測る。30は土師質の椀もしくは皿の高台部である。中世前期において、高台を有する

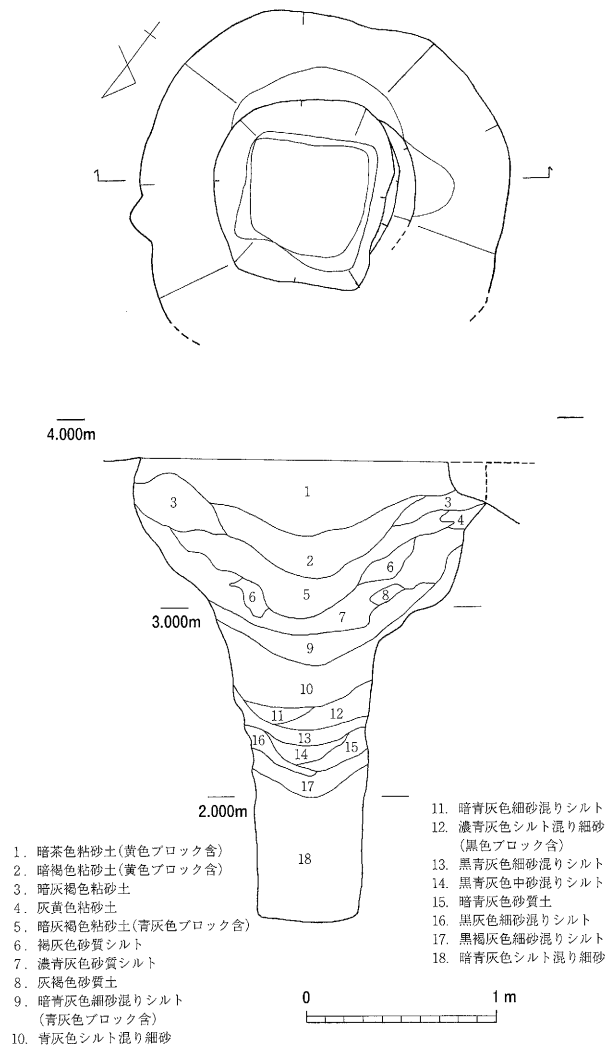


fig. 13　SE316 平面図・断面図

椀皿類は、播磨以西において散見できるようである[5]が、同遺物が小片であるため、詳細は不明である。31は土師器、32は須恵器の椀の口縁部と考えられる。いずれも口径(復元)15.6cmを測るが、詳細は不明である。

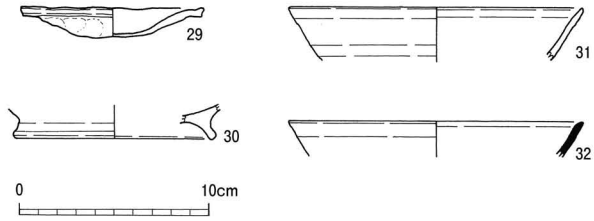


fig. 14　SE316 遺物実測図

29の土師器小皿は、口縁端部の形状や器壁の厚さなどから、Bbタイプ（伊野分類）に属するものと考えられ、11世紀後半頃のものと推測されるものの、他の遺物については、時期を検討できる要素は乏しい。

SE317
(旧SE2203)

調査地の南端部でSE318と並んで検出された素掘りと考えられる井戸である。南半部が攪乱を受けているが、掘形の平面形が不整な円形、断面形が扁平な漏斗状を呈すると考

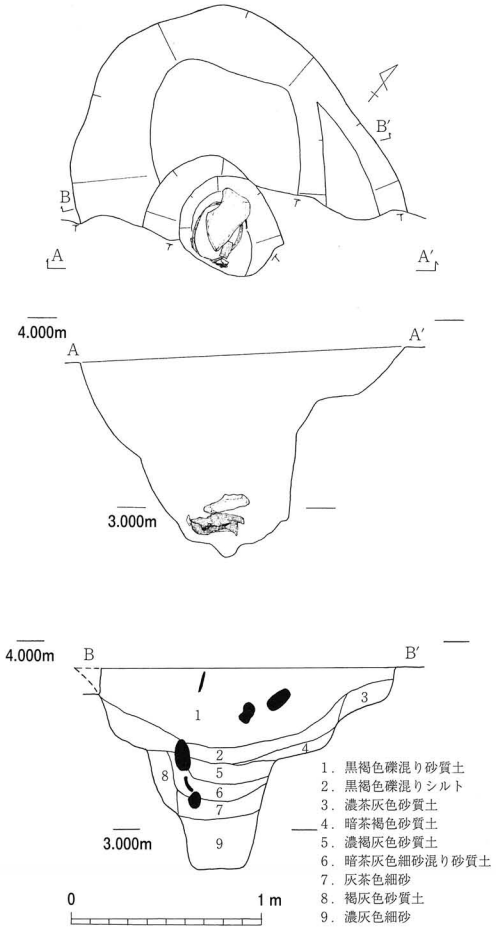


fig. 15　SE317 平面図・断面図

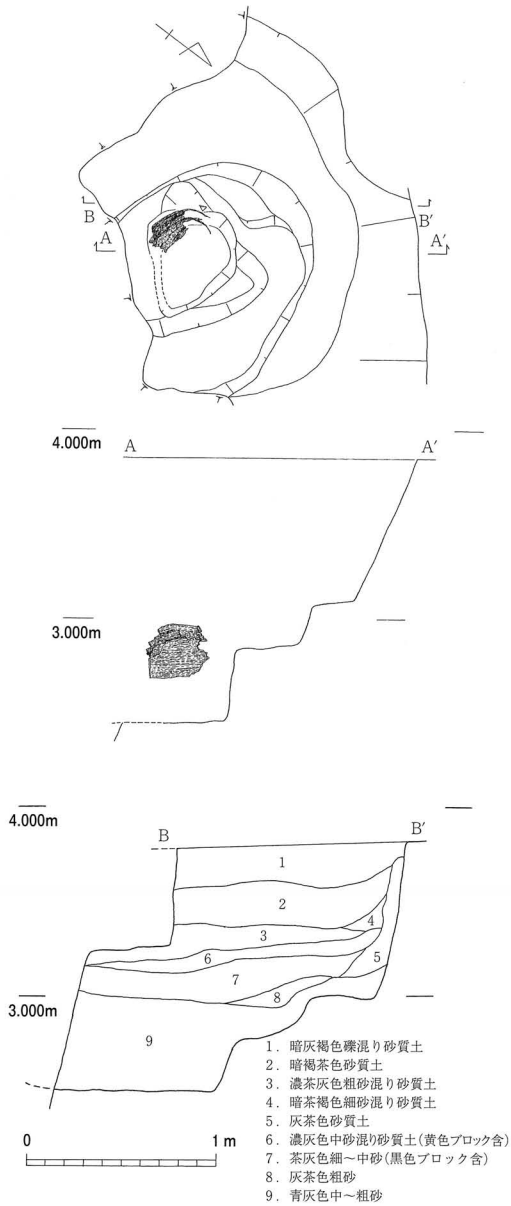


fig. 16　SE318 平面図・断面図

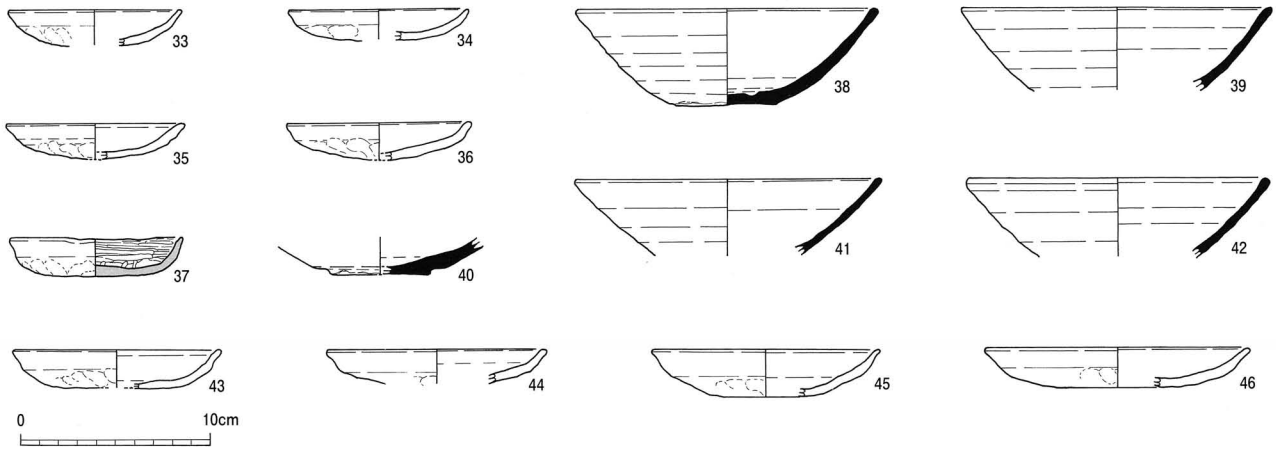


fig. 17　SE317 遺物実測図

えられる。残存する部分での規模は、径約1.7m、深さ約1.1mを測り、同遺跡で確認されている井戸の中では小規模な部類に入る。底部では水溜部分に設置されたと考えられる曲物（樹種不明）の痕跡が認められた。

出土遺物は土師器・須恵器の他、瓦器や白磁も若干みられる。33、34、35、36は土師器の小皿である。いずれも、口径10cm弱、器高2cm弱を測る。手づくね成形で、口縁部が1段ナデにより調整されていることから、Abタイプ（伊野分類）に属するものと考えられる。37は瓦器の小皿で、口径9.2cm、器高2.0cmを測る。内面のみにヘラミガキが施され、体部から口縁部にかけては密である。底面には、不明瞭ながら鋸歯状の暗文がみられる。形状や調整の特徴などから、橋本久和氏分類[6]の樟葉型Ⅱ-1期に属するものと考えられる。38、39、40、41、42は東播系須恵器の椀である。38は口径30.2cm、器高15.0cmを測る。39～42は、口縁部もしくは底部の一部のみの残存で、口径（復元）16.1～16.4cm、底径5.2cmを測る。これらは、形状の特徴から第Ⅰ期第2段階～第Ⅱ期第1段階（森田分類）に属すると考えられるが、型式的には40が若干古く、それ以外がそれに続くものと推測される。43、44、45、46は土師器の皿で、口径（復元）11.0～14.0cm、器高2.0～2.5cmを測る。小皿と同様にAbタイプ（伊野分類）に属するものと考えられる。

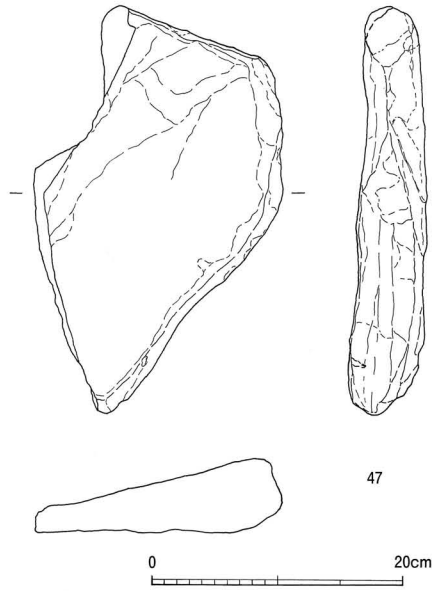


fig. 18　SE317 石製品実測図

出土遺物はいずれも12世紀代のものと推測され、12世紀前半～中頃のものが中心と考えられるが、須恵器に関しては、12世紀後半頃のものも含まれる可能性がある。また、37の瓦器小皿は、近年の編年的研究[7]から12世紀前半頃の実年代が想定されている。

47は水溜部分より検出された石製品で、やや崁のある平滑面を広面と側面に有するこ

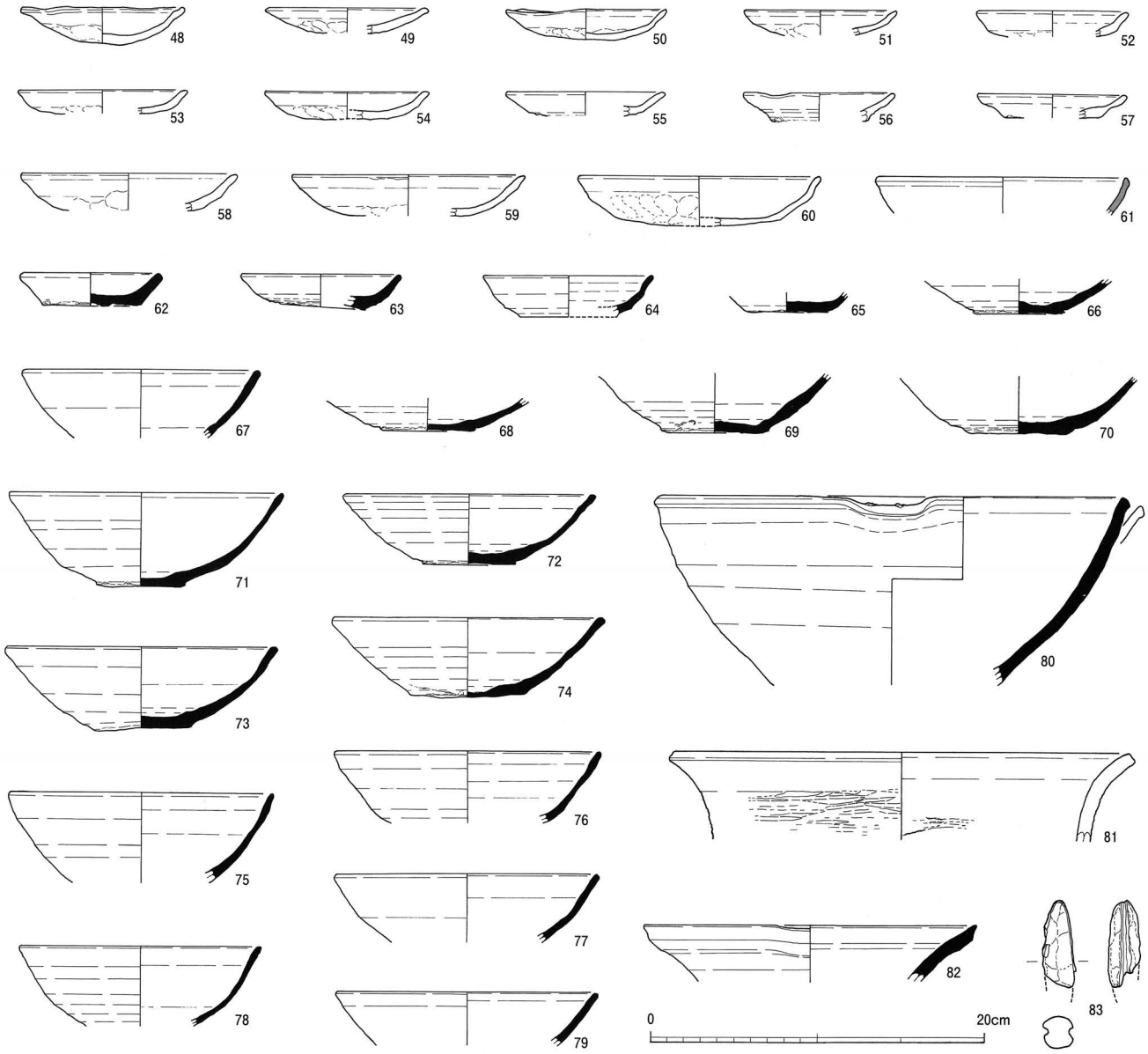


fig. 19　SE318 遺物実測図

とから、砥石として使用された可能性が考えられるが、詳細は不明である。

SE318
(旧 SE2204)

調査地の南端部、SE317の西側に隣接して検出された素掘りと考えられる井戸である。SE317と同様に南半部が攪乱を受けているため、詳細は不明であるが、掘形の平面形状は長方状で、井戸本体部分においては、不整な楕円形状を呈し、断面形が扁平な漏斗状を呈する。残存する部分での規模は、井戸本体部分の径が約2.7m、深さ約1.3m を測る。また、隣接する SE317と切り合い関係にあり、SE317に切られるかたちで確認された。底部では水溜部分に設置されたと考えられる曲物側板（樹種：ヒノキ属）の一部が確認された。曲物は２段以上に組まれていたものと考えられるが、遺存状態が悪く、構造等の詳細は不明である。

出土遺物は多様であるが、土師器・須恵器の埦・皿類が数量的には多い。48～60が土

師器で、48～57が小皿、58～60が皿である。48は「ての字状口縁」のタイプのもので、Bcタイプ（伊野分類）に属するものと考えられる。口径9.9cm、器高2.3cmを測る。49、50、51、52、53、54は、形状にバリエーションがみられるものの、いずれもAbタイプ（伊野分類）の範疇のものと考えられる。50がほぼ完形である他は、すべて破片で、50は口径9.7cm、器高1.9cmを測り、49、51、52、53、54は、口径（復元）9.2～10.2cm、器高1.4～1.6cmを測る。55、56、57は、底部が糸切りのタイプで、口径（復元）9.0～9.6cm、器高1.4～1.7cmを測る。58、60はAbタイプ（伊野分類）に属する皿と考えられる。58は口径（復元）13.0cm、残存高2.2cm、60は口径（復元）9.7cm、器高3.0cmを測る。59は口縁部の内傾が少ないこと、２段ナデによる調整などの特徴から、Aaタイプ（伊野分類）に属する可能性が考えられる。口径（復元）14.0cm、器高2.5cmを測る。61は白磁の碗で、口径(復元)15.2cmを測る。形状から山本信夫氏分類[8]のⅡ１類に属すると考えられる。62～65は東播系須恵器の小皿である。62は完形で、口縁部が直線的に立ち上がるタイプである。口径8.6cm、器高2.0cmを測る。63は口縁部がやや内湾するタイプで、口径（復元）9.6cm、器高2.1cmを測る。64は口縁端部がやや外反するタイプで、口径(復元)10.2cm、器高2.5cmを測る。65は底部のみの残存で、底部径4.6cmを測る。66～79は東播系須恵器の椀で、口縁部や底部の形状から、いずれも第Ⅰ期第２段階～第Ⅱ期第１段階（森田分類）の範疇に属すると考えられる。71が第Ⅰ期第２段階に近い型式で、66、68、69、70、72、73、74が、第Ⅱ期第１段階に近い型式と推察され、67、75、76、77、78、79についても、形状から上記の型式内に属するものと考えられる。71は口径（復元）16.6cm、器高5.7cmを測り、72、73、74は口径15.2～16.4cm、器高4.2～5.1cmを測る。また、底部のみが残存する66、68、69、70は底部径5.6～6.4cm、口縁部のみが残存する67、75、76、77、78、79は口径（復元）14.4～16.0cmを測る。80は東播系須恵器の捏鉢で、体部から口縁部にかけてのみ残存しており、口径28.6cmを測る。口縁端部等の形状等から第Ⅰ期第２段階（森田分類）に属するものと考えられる。81は口縁部のみの残存であるが、土師器の堝と考えられる。内面をナデと一部ハケ、外面体部をタタキ後ナデにて調整されている。口径（復元）28.0cmを測る。82は須恵器の小型の捏鉢と考えられ、口径（復元）20.0cmを測る。83は土師質の有溝土錘で、全体の1/3程度を欠損しており、残存長5.25cm、最大径1.9cmを測る。

以上のことから、48、59、80が12世紀初頭頃、それ以外の土師器皿、須恵器椀などは12世紀前半～中頃のものと推察される。

(3) 溝

SD311
(旧SD2201)

調査地の北西部において検出されたコの字状に屈曲する溝で、幅約15～20cm、深さ約５

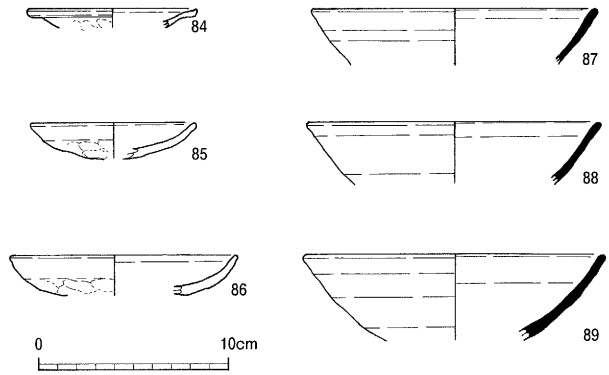


fig. 20　SD311・SD318 遺物実測図

～10cmと比較的小規模である。総延長で5m程度の部分が検出されているが、南側の延長部分が攪乱により失われている。形状から推察するならば、建物の雨落ち溝の可能性が考えられるが、この溝に伴う柱穴などが確認されていないことから、その性格については不明である。

出土遺物は土師器、須恵器の破片が数点確認された。84は土師器の小皿で、「ての字状口縁」のタイプである。白色系で緻密な胎土を呈し、口径（復元）9.0cmを測る。87、88は東播系須恵器の埦である。いずれも口縁部のみの残存で、口径（復元）は87が15.2cm、88が15.6cmを測る。

84の土師器小皿は、SE316出土の29とほぼ同タイプと考えられる上に、29に比べて口縁部が薄く、調整も丁寧であることから、Bbタイプ（伊野分類）に属し、11世紀後半頃のものと考えられる。

SD312（旧SD2202）　調査地の北西部において検出された南北方向の溝である。幅約15～30cm、深さ約10cmを測る。出土遺物は無く、時期や性格の詳細は不明である。

SD313～315（旧SD2203～2205）　いずれも調査地の北西部において検出された東西方向の小規模な溝で、いずれも幅約10cm、深さ約2～3cmを測る。形状、方向等から鋤溝の痕跡の可能性が高い。出土遺物は無く、時期は不明である。

SD316・317（旧SD2206・2207）　いずれも調査地の東半部において検出された溝である。攪乱によってごく一部分のみの検出にとどまった。いずれも幅約20cm、深さ約5cmで、小規模なものである。集落に関連する溝と推察されるが、出土遺物も無く、詳細は不明である。

SD318（旧SD2208）　調査地の南東部で検出された幅約30～60cm、深さ約5～10cmを測る溝状遺構である。攪乱により、その大部分が失われている。

出土遺物は数点確認されたが、いずれも小片である。85・86は土師器の小皿・皿で、85は口径（復元）8.8cm、器高1.9cmを測り、86は口径（復元）12.0cm、器高2.1cmを測る。89は東播系須恵器の埦で、口径（復元）16.0cmを測る。

85、86の土師器皿は、形状からAbタイプ（伊野分類）に属し、12世紀前半～中頃のものと考えられる。

(4) その他の遺構

SK313（旧SK2201）　調査地の南東部で検出された小規模な土坑である。平面形は楕円形を呈し、長径約80cm、短径約50cm、深さ約20cmを測る。

出土遺物は土師器、須恵器の小片が数点確認された程度である。92は土師器の小皿で、口径（復元）9.4cmを測る。口縁部がやや「ての字状」に屈曲するが、Abタイプ（伊野分類）の範疇で、12世紀前半～中頃のものと推測される。

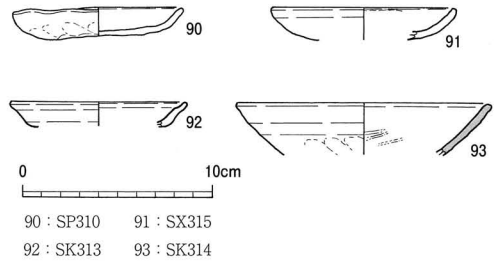


fig. 21　遺物実測図

SK314（旧SK2202）　調査地の南東部で検出された小規模な土坑で、攪乱により半分以上が失われている。平面形は円形もしくは楕円形と推測され、残存径約1.1m、深さ約25cmを測る。

土師器、須恵器、瓦器の小片が出土している。93は瓦器の椀で、口径（復元）13.6cmを測る。外面口縁部がヨコナデ、体部がユビオサエ、内面が磨きによって調整されており、その形状から和泉型Ⅲ-1期（橋本分類）〔12世紀中頃～後半〕に属する可能性が高い。

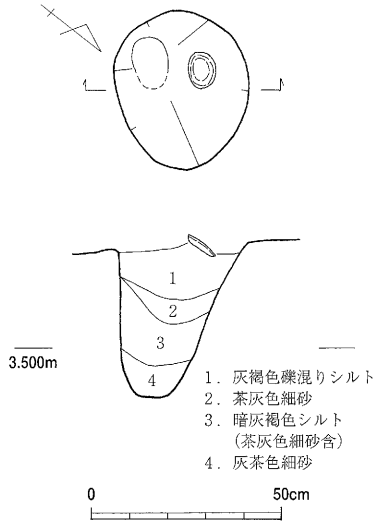


fig. 22　SP310 平面図・断面図

SP310
（旧SP2209）

調査地の南東部で検出された柱穴である。長径40cm、短径35cm、深さ40cmを測る。土師器、須恵器などの出土遺物が確認され、埋土の上位で完形の土師器の小皿（90）が検出された。90は口径9.0cm、器高1.6cmを測り、手づくね成形で仕上げられている。形状の特徴から、Abタイプ（伊野分類）に属し、12世紀前半～中頃のものと考えられる。

SX301
（旧SX2201）

調査地東端で検出された深い落ち込み状遺構で、東側に隣接する第3次調査地にて検出されたSX301に連続する遺構である。このため、今回の調査においても同遺構をSX301として扱うこととした。

西側肩部のみが確認されており、東にむけて約45°傾斜で下がる。しかしながら、性格等の詳細は確認できなかった。

第3次調査においては、12～14世紀にかけての遺物が出土しており、同安窯系と考えられる青磁碗（山本分類Ⅰ1bタイプ）なども確認されている。今回の調査においても、同時期の範疇と考えられる土師器、須恵器、瓦器、白磁などが確認されている。

94～101は土師器小皿である。形状にバリエーションがみられるものの、94～100はAbタイプ（伊野分類）の範疇ものと推察される。101は口縁端部に面取りがみられるなどの特徴から、Jbタイプ（伊野分類）に属するものと考えられる。法量は94、95、96、97、98、99が、口径（復元）8.4～9.0cm、器高1.3～1.5cmを測り、また、100、101はそれらに比べてやや大きく、100が口径（復元）9.6cm、残存高1.9cm、101が口径（復元）9.8cm、器高2.1cmを測る。102は小型の土師器堝と考えられ、口径（復元）15.2cm、残存高5.6cmを測る。一部分のみの残存であることや、剥離等によって調整等が不明瞭である。103は東播系須恵器の小皿である。ほぼ完形で、口径8.4cm、器高1.8cmを測る。104は東播系須恵器の捏鉢の口縁部と考えられ、口径（復元）26.0cm、残存高2.8cmを測る。丁寧に仕上げられているものの、片口部の調整がやや粗雑である。口縁端部が上方に拡張されている特徴などから、第Ⅱ期第1段階（森田分類）の範疇に属するものと考えられる。105～111は東播系須恵器の椀である。105、106、108は残存が比較的良いものの、107、110が口縁部、109、111が底部のみの残存となっている。法量は105が口径（復元）16.2cm、器高4.8 cm、106が口径（復元）16.4cm、器高4.8cm、108が口径（復元）17.0cm、器高4.0cm、107が口径（復元）16.0cm、110が口径（復元）16.6cm、109が底部径6.0cm、111が底部径（復元）5.3cmを測る。これらは、第1期第2段階～第Ⅱ期第2段階（森田分類）の範疇に属すると考えられる。112～116は瓦器椀で、いず

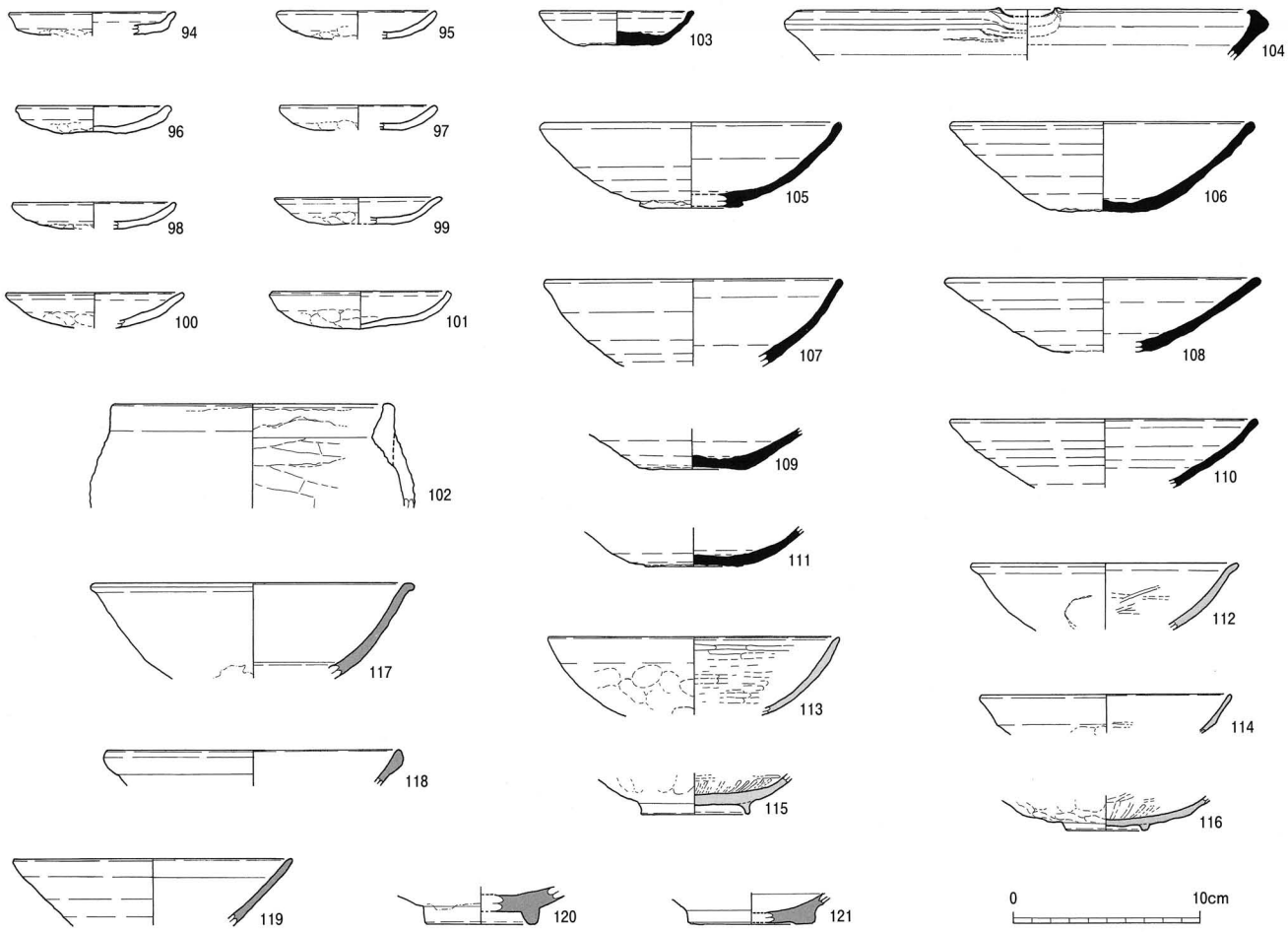


fig. 23　SX301 遺物実測図

れも口縁部もしくは底部のみの残存である。いずれも摩滅が著しく、調整がやや不明瞭である。112は口径（復元）14.4cmを測り、口縁端部がやや外反する。113は口径（復元）15.6cmを測る。口縁内端部に沈線が施されているなどの特徴から、樟葉型瓦器椀と考えられ、外面のミガキがみられないなどの特徴から、Ⅲ-1期（橋本分類）に属する可能性がある。114は口径（復元）14.4cmを測り、口縁部を薄く仕上げている。115、116は底部のみの残存で、不明瞭ながら平行状の暗文がみられる。高台部の特徴から、115より116の方が新しい型式に分類され、115が和泉型Ⅲ-1期（橋本分類）、116が和泉型Ⅲ-2期（橋本分類）に属する可能性が考えられる。117～121は白磁の碗と考えられる。117は口径（復元）17.4cmを測る。形状の特徴から、Ⅴ2a類（山本分類）に属すると考えられる。118は口縁部が玉縁状に肥厚するタイプで、口径（復元）16.0cmを測る。底部が残存しないため、詳細は把握しにくいが、Ⅳ類（山本分類）に属するものと考えられる。119は口径（復元）15.0cmを測る。形状の特徴からⅧ2類（山本分類）に属するものと考えられる。120、121は底部のみの残存で、121は形状の特徴からⅣ1a類（山本分類）に属するものと考えられる。120については、Ⅱ類（山本分類）に属すると考えられるが、詳細は不明である。いずれも削り出しによる高台の成形で、121が輪状高台である。高台径（復元）は、120が6.0cm、121が6.8cmを測る。

同遺構の出土遺物は、第３次調査と同様に時期幅がみられる。須恵器の埦については、105〔第１期第２段階（森田分類）〕が最も古く、108、110〔第２期第２段階（森田分類）〕が最も新しい型式と考えられ、概ね11世紀末～13世紀初頭の時期が想定でき、100年余の時期幅が確認できる。一方、土師器の小皿においても、94～100〔Ab タイプ(伊野分類)〕が12世紀代に属するものの、101〔Jb タイプ(伊野分類)〕は13世紀初頭～前半に該当する。また、瓦器埦に関しても、115と116とで高台部の形状等に明確な差異がみられる。同遺構は第３次調査において、掘り直しを行った痕跡も確認されており、長期間にわたって使用された施設と考えられ、凡そ12世紀代～14世紀後半以降にかけて存在していたものと推察される。

また、木製品（杭・板材）の一部が２点（樹種はいずれもニヨウマツ）が確認されているが、小片のため、図示するには至らなかった。

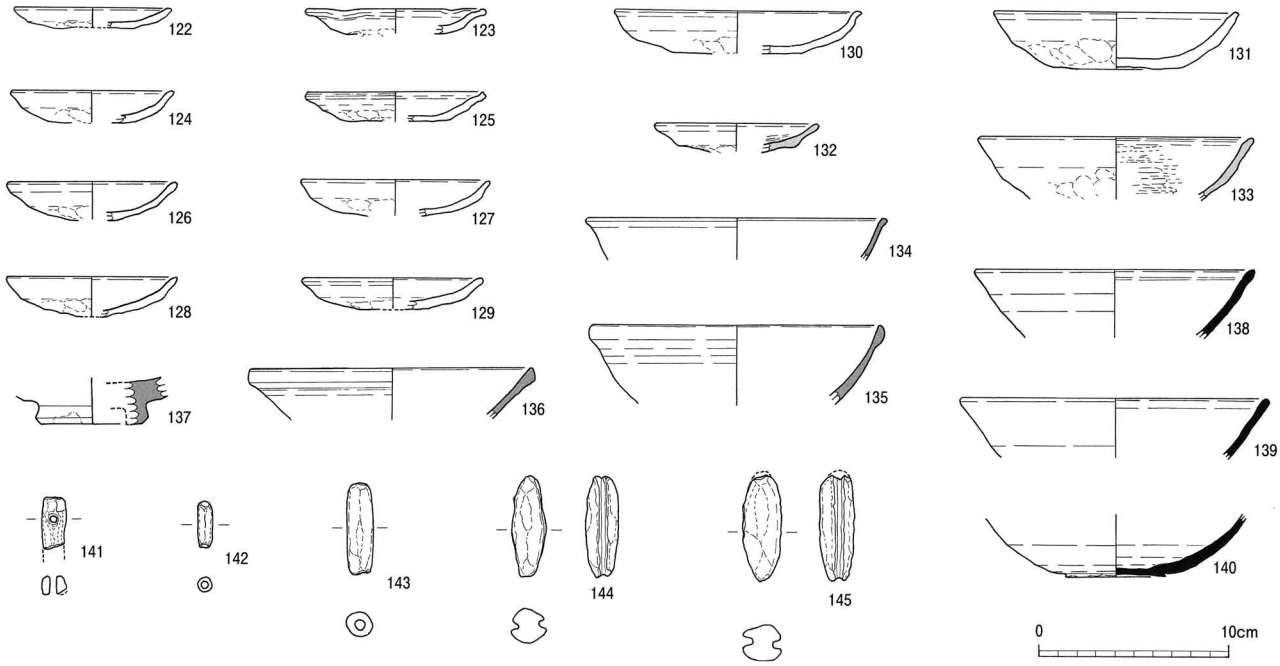
SX315（旧 SX2202）

調査地の南東部で検出された小規模な落ち込み状遺構である。平面形が楕円形を呈し、長径約1.2m、短径約1.0m、深さ約10cm を測る。形状から推察すると、土坑の痕跡の可能性も考えられる。

土師器、須恵器の小片が出土した程度である。91は土師器の小皿で、口径（復元）9.8cm を測る。形状から Ab タイプ（伊野分類）のものと推察されるが、摩滅によって調整等が不明瞭であるため、詳細は不明である。

(5) 遺構に伴わない出土遺物

調査区の大半が攪乱によって削平を受けており、遺物包含層あるいは旧耕土層が遺存する箇所が限定されていたものの、数点の出土遺物が得られている。攪乱についても、調査



遺物包含層：122～125・130・132・135・137～139・141・145
旧耕土層：131・136・142～144　攪乱(SE317・318 南側)：126～129・133・134・140

fig. 24　遺物実測図

地東南部で検出されたSE317、SE318に接する箇所にて、数点の遺物が確認されており、これらの遺構に伴う可能性が高い。

122～131は土師器で、122～129が小皿、130、131が皿である。123、125が、「ての字状口縁」のBcタイプ（伊野分類）に属する他は、Abタイプ（伊野分類）のものと考えられる。法量は130が口径（復元）13.0cm、器高2.3cm、131が口径（復元）13.0cm、器高3.0cmを測る。また、小皿（122～129）は、口径（復元）8.4～10.0cm、器高1.1～2.1cmを測る。132は瓦器の小皿で、口径（復元）8.8cmを測る。小片のため、詳細は不明であるが、和泉型Ⅲ-1～2期（橋本分類）に属する可能性が考えられる。133は瓦器の埦で、口径（復元）14.6cmを測る。摩滅が著しく、詳細は不明であるが、形状等の特徴から、前述の113と同様のタイプ〔樟葉型Ⅲ-1期（橋本分類）〕に属する可能性が考えられる。134～136はいずれも白磁の碗と考えられ、口径（復元）15.2～16.0cmを測る。口縁部のみの残存であるため、詳細を検討しにくいが、形状の特徴等から、134がⅤ3a類、135がⅡ1類、136がⅣ類（いずれも山本分類）にそれぞれ属するものと考えられる。137は青磁碗の底部と考えられる。小片であることから、詳細は不明であるが、高台の形状や高台から体部に屈曲する部分に丸みがある点などから、Ⅰ5類〔新しい分類[9]ではⅡ類〕（山本分類）に属する可能性が考えられる。138～140は東播系須恵器の埦である。138、139が口縁部、140が底部のみの残存であることから、詳細は検討しにくいが、概ね、第1期第2段階～第2期第1段階（森田分類）に属するものと考えられる。141～145は土師質の土錘で、141が有孔土錘、142、143が管状土錘、144、145が有溝土錘に分類されるものである。141が1/3程度しか残存しない他は、ほぼ完存しており、142が全長2.4cm、最大径0.8cm、孔径0.4cm、143が全長4.85cm、最大径1.4cm、孔径0.5cm、144が全長5.3cm、最大径1.8cm、145が全長（残存長）5.55cm、最大径2.0cmをそれぞれ測る。

これらは、凡そ11世紀末～13世紀初頭の範囲内に属するものと考えられ、12世紀前半～中頃のものが多くみられる。

註

1）川上厚志編『二葉町遺跡発掘調査報告書－第３・５・７・９・12次調査－』 神戸市教育委員会　2001
東喜代秀編『二葉町遺跡発掘調査報告書－第14～21次調査－』 神戸市教育委員会　2008

2）前掲１）

3）伊野近富「土師器皿」『概説　中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会編　1995

4）森田　稔「東播系中世須恵器の生産と流通」『中近世土器の基礎研究』 Ⅱ　中世土器研究会編　1986
森田　稔「中世須恵器」『概説　中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会編　1995

5）渡辺　昇編『宝林寺北遺跡－太子龍野バイパス建設に伴う発掘調査－』 兵庫県教育委員会　1987
11世紀後半頃に属する高台径が10cm 弱の坏が出土している。当該資料（30）が小片のため、同資料との比較はやや困難であるが、ここでは参考までに取り上げておく。このようなやや大きめの高台を有する坏椀は、備後あたりまでみられるようである。

6）橋本久和編『上牧遺跡発掘調査報告書』 高槻市教育委員会　1980
橋本久和「瓦器椀研究と中世史」『中世考古学と地域・流通』 真陽社　2009

7）橋本久和「瓦器椀研究と中世史」『中世考古学と地域・流通』 真陽社　2009
和泉型・樟葉型・大和型の編年を整合し、併行関係を明らかにした上で、実年代観を検証している。よって、本文作成についても、これに準拠している。

8）山本信夫「中世前期の貿易陶磁器」『概説　中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会編　1995
山本信夫・宮崎亮一『大宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－』 太宰府市教育委員会　2000

9）山本信夫・宮崎亮一『大宰府条坊跡ＸＶ－陶磁器分類編－』 太宰府市教育委員会　2000
Ⅰ類中の他類型との年代観の違いから、Ⅰ５類をⅠ類から除外し、Ⅱ類として設定している。

参考文献

横田賢次郎・森田　勉「大宰府出土の輸入中国陶磁について」『九州歴史資料館研究論集』 4　1978
小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』 第３号
（財）京都市埋蔵文化財研究所　1996
森田　稔「東播系中世須恵器生産の成立と展開－神出古窯址群を中心に－」『神戸市立博物館研究紀要』 第３号
神戸市立博物館　1986
尾上　実・森島康雄・近江俊秀「瓦器椀」『概説　中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会編　1995
鋤柄俊夫「中世食器の地域性・山陽」『国立歴史民俗博物館研究報告』 第71集　国立歴史民俗博物館　1997

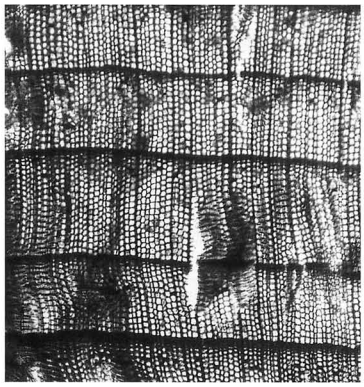
第３節　第22次調査出土木質遺物の樹種

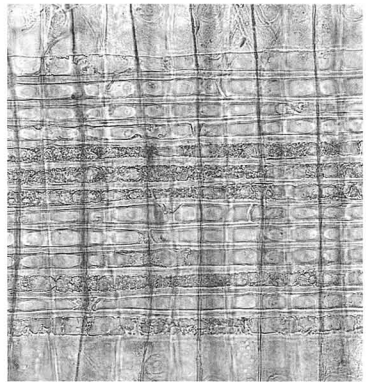
曲物側板２点（SE316・SE318）、柱材（SB326）、杭（SX301）、板材（SX301）、加工材（SE315）の計６点につき、検鏡観察による樹種同定を実施した。結果、ヒノキ属（曲物側板）、ニヨウマツ（板材、杭、加工材）、ムクノキ（柱材）と、３種の樹種が使用されていたことが判明した。以下に各樹種の同定根拠について、要旨のみ記す。

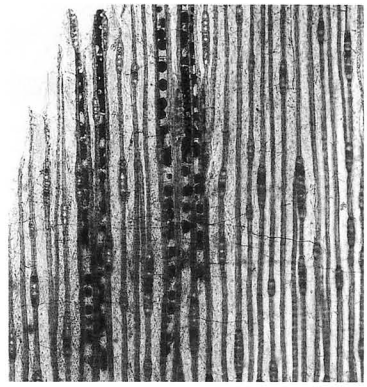
ヒノキ属　（*Chamaecyparis* Spach）木口では早材の晩材に近い部分に樹脂細胞が環状に分布する。柾目の中央に横走する放射組織には、分かり辛いが小型の分野壁孔が見える。板目にも樹脂細胞のストランドが見える。

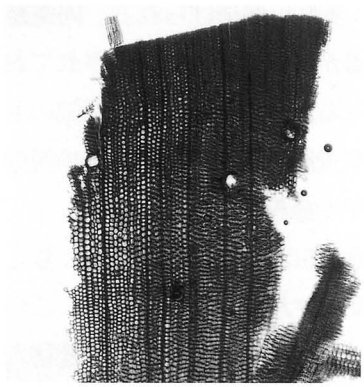
ニヨウマツ　（*Pinus densiflora* Sieb）木口の早材部には３箇所に垂直樹脂道が開孔する。柾目の中央に見える放射組織の上下には放射仮道管が存在し、内壁に鋸歯状の突起が存在する。また分野壁孔は窓状を呈する。

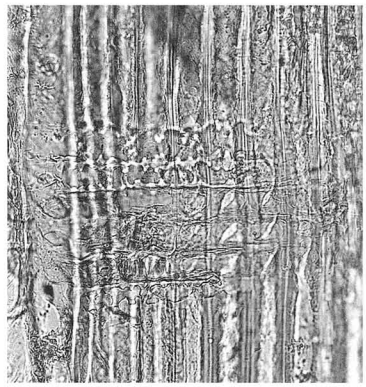
ムクノキ　（*Aphananthe aspera* Planch）木口写真下方に年輪界が見える。環孔材であり、単独または２個の道管が放射方向に連なって散在する。柾目写真の右方に縦走する道管のせん孔板は単せん孔である。放射組織は異性で、上下は直立細胞、中央は平伏細胞で構成される。板目の道管内壁には密集する対列壁孔が見える。

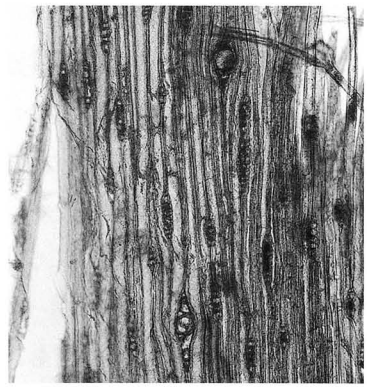

ヒノキ属　木口断面（25倍）

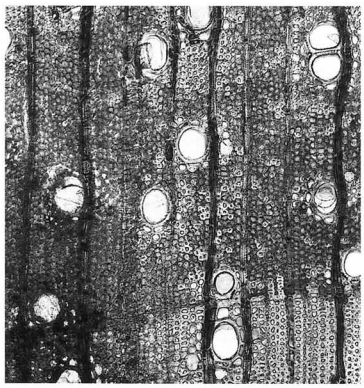

ヒノキ属　柾目断面（200倍）

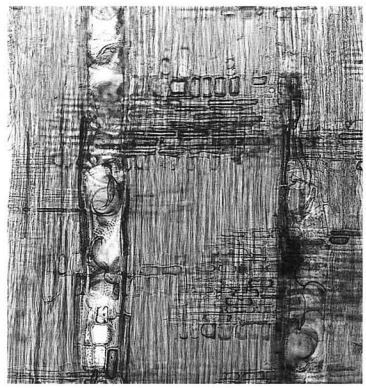

ヒノキ属　板目断面（50倍）


ニヨウマツ　木口断面（25倍）


ニヨウマツ　柾目断面（200倍）


ニヨウマツ　板目断面（50倍）


ムクノキ　木口断面（50倍）


ムクノキ　柾目断面（50倍）

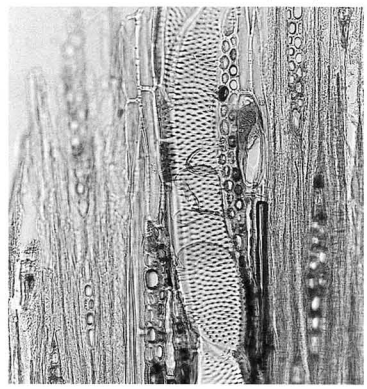

ムクノキ　板目断面（100倍）

写真４　木材組織顕微鏡写真

第4章　まとめ

二葉町遺跡の調査も今回で22次を数え、遺跡の様相がかなり明確になってきた。特に、中世（11～13世紀頃）の遺構・遺物は豊富で、大規模な集落が形成されていたことを窺わせる。今回の調査で確認された遺構・遺物は、凡そ11～14世紀頃に属するもので、12世紀代のものが多くみられる。ここでは、今回の調査の総括と、過去の調査、さらに、周辺遺跡の調査成果を踏まえたいくつかの考察を試みた。

第1節　第22次調査の成果について

先述のとおり、二葉町遺跡の調査は、今回で22次を数える。それに伴って多くの資料が得られており、同遺跡の諸相が徐々に明らかになっている。これらの調査成果等から、古代（8世紀代）より集落が営まれ、11世紀末～13世紀中頃に盛行することが確認されている[1)]。

遺　構

掘立柱建物、井戸、溝などの集落を形成する構造物の痕跡が確認されている。先述のとおり、今回の調査地の所在する久保町6丁目地区および南隣の二葉町6丁目地区にかけて、遺構が密集しており、同遺跡の中核地と考えられる区域である。

掘立柱建物

今回の調査では2棟検出されているが、攪乱によって、遺構が集中する箇所が大きく失われていることから、さらに数棟存在した可能性が高い。検出された掘立柱建物（SB326・327）は主軸がN－36～38°Wで、過去の調査においては、N－30～40°W程度のものが多いが、N－16°W〔SB319（久保6）〕のものからN－42°W〔SB317（二葉6）〕のものまで存在しており、建物配置も含めて規則性を欠いている。

中世集落遺跡の事例として、上小名田遺跡[2)]（北区八多町）が挙げられる。同遺跡で確認された掘立柱建物は、同じ時期に属する建物は、主軸がほぼ同方向に統一されており、時期が進むにつれて、主軸方向に規則的な変化がみられる。つまり、一定の規制のもとに集落形成が行われているような感がある。一方、二葉町遺跡の場合、主軸方向の規則性、時期別の統一がほとんどみられず、上小名田遺跡とはやや様相が異なる。

建物規模については、SB327は推測しにくいが、SB326は南北方向が4間と考えた場合、4×4間（約76m^2）の規模となり、全体としてはやや大きな部類に入る。この建物規模についても、二葉町遺跡においては全体的に統一性があまりなく、総柱の建物だけでも、2×2間（約15m^2）〔SB329（二葉6）〕から7×4間（約155m^2）〔SB305（久保6）〕ものまで大小さまざまなものが存在する。しかしながら、規模の違いは建物の性格等によって生じる可能性が高いため、検証しにくいところでもあるものの、このような主軸、規模のバラツキは、微地形や水利の問題、あるいは新たな開発等による土地利用（農地利用）の変化、また、屋敷地内での土地利用方法の違いなどによって、開発等に関わる一定の枠組みでの規則的な造成等が制限された結果とも推察できる。

宇野隆夫氏による平安京における鴨東地域の開発の検討[3)]に、その根拠となるヒントを見出すことができる。宇野氏は同地域における発掘調査成果などから、従来、平安京内の土地利用の枠組み（規制）の中で始まった鴨東地域（吉田、岡崎など）の開発は、平安時代後期以降、新しい枠組みによって行われた可能性を指摘しており、平安京従来の地割の

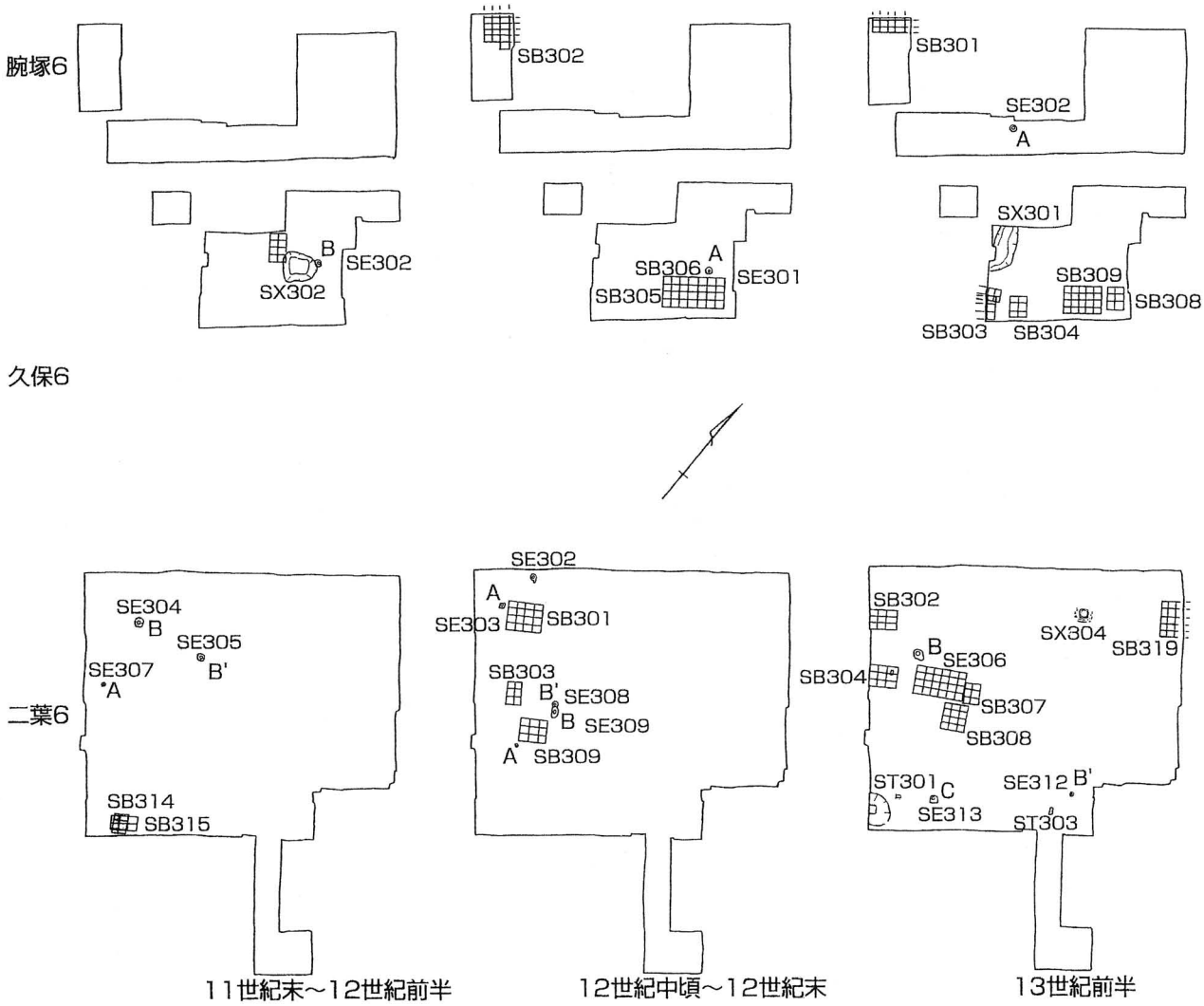


fig. 25　二葉町遺跡遺構変遷図（『二葉町遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会2001所収）

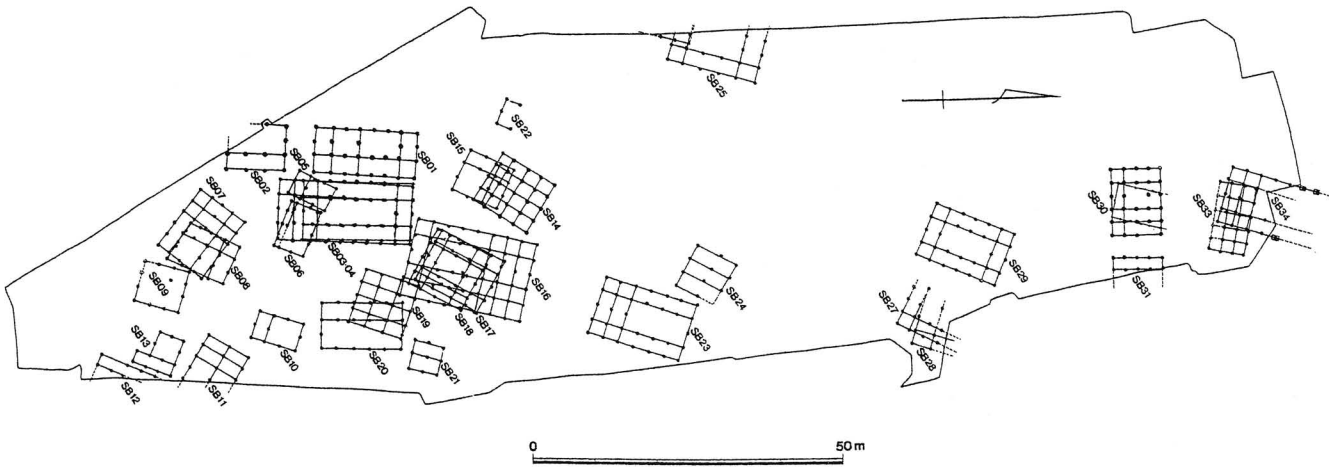


fig. 26　上小名田遺跡掘立柱建物配置（模式）図
（『平成元年度　神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会1992所収を一部改編）

改変の実施によって、平安京そのものの変質を決定づけるものと認識している。つまり、強固な枠組みが想定される平安京においてですら、平安時代後期における社会情勢の変化によって、変革が行われている可能性が窺え、さまざまな枠組み等にとらわれず、状況に応じた集落開発が広範に常態化していた実情が看取できるのである。

井　戸

過去の二葉町遺跡の調査では、40基余の井戸が検出されており、今回の調査においても４基（SE315～318）検出されている。同地域は地下水が豊富であることから、多くの井戸が設けられたと推察できるが、これらの井戸について、同遺跡の先の報告の中で、筆者による以下のような形態分類がが行われている[4)]。尚、fig. 25の中に示されたアルファベット（A・B・B'・C）は下記のタイプを表している。合わせて、参照されたい。

Aタイプ…掘形直径１～1.5m前後。掘削深度が１m前後であり、井戸底が粘土層で収まる素掘井戸。

Bタイプ…掘形直径２m前後。掘削深度が２m以上であり、井戸底が粗砂層まで到達している。井戸側に縦板などの構造物が設置されている。

B'タイプ…掘形直径２m前後。掘削深度が1.5m以上であり、井戸底が粗砂層まで到達している。井戸側構造が存在した可能性が残るもの。（井戸側材を再利用のために抜き取った可能性があるもの。）

Cタイプ…掘形直径２m以上。Bタイプの井筒等の規模が大きいもの。

SE315～318をこの分類に当てはめるならば、SE315・318がB'タイプ、SE317・318がAタイプに属すると考えられる。Bタイプ、B'タイプ、Cタイプは湧水

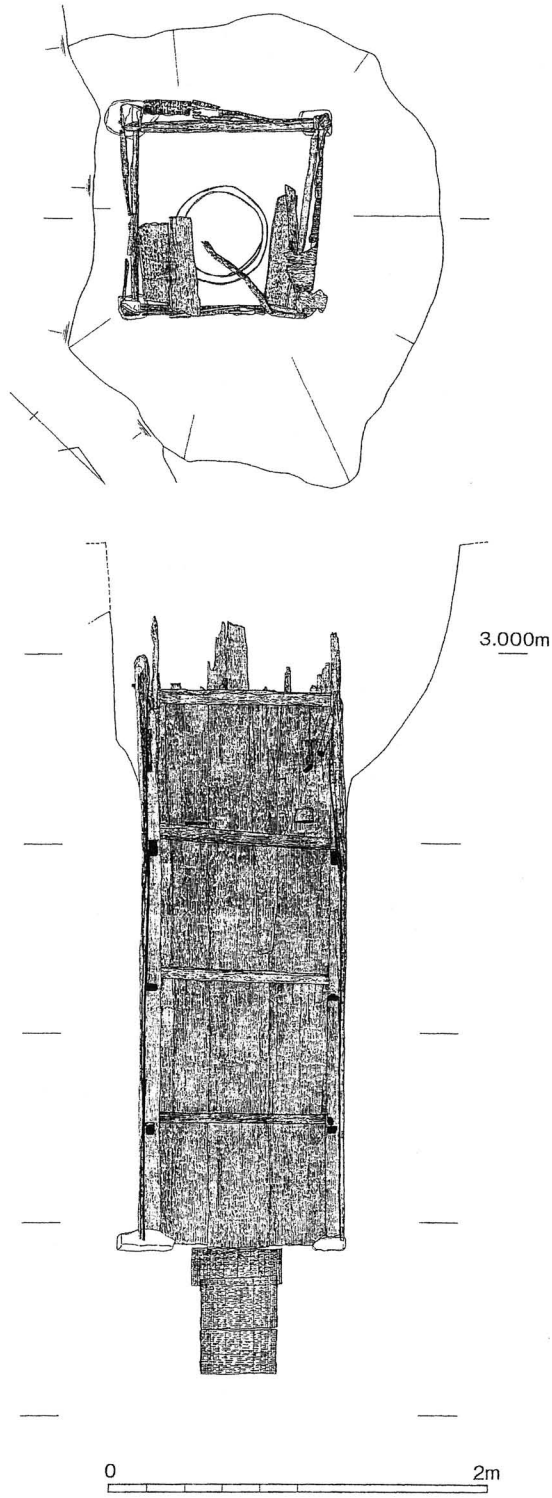


fig. 27　SE301（久保５）平面図・断面図
〔縦板組横桟どめ（BⅣ類）の実例〕
（『二葉町遺跡発掘調査報告書』
神戸市教育委員会2008　所収）

層（粗砂層）に達する深いタイプであるが、掘形の断面形状によって漏斗状タイプ（下半部が狭くなるタイプ）と、U字状タイプ（最下部の水溜までほぼ直線的に下がるタイプ）に大別することができ、B'タイプに属するSE315・316は、漏斗状タイプにあたる。二葉町遺跡において確認できる範囲では、漏斗状タイプが上記２例を含めて８例、U字状タイプが７例確認されている。掘形の断面形状の違いは、井戸側等の構造上の差異に起因する可能性も考えられるが、井戸側材が抜き取り等によって遺存しないものが多く、確証は得られない。また、構造が確認できるものについても、準構造船材を転用したSE306のような特殊例を除くと、すべて、宇野隆夫氏分類[5]の縦板組隅柱横桟どめ（BⅣ類）に該当するもの〔SE301（久保５）、SE302（久保６）、SE309・310・313・316・317（二葉６）〕であることから、掘形形状と井戸側構造との関係の検討については、資料の増加を待たねばならない。また、SE315・316の井戸側構造については、全く部材や痕跡が確認されなかったため、検証が不可能であるが、規模、形状から素掘りのものとは考えにくく、ここでは、宇野分類のBⅣ類あるいはBⅢ類[6]〔縦板組横桟どめ（BⅣ類の隅柱を持たないタイプ）〕の可能性を消極的ながら想定しておく。

出土遺物

今回の調査においては、井戸あるいは落ち込み状遺構（SX301など）のような大規模な遺構からの出土が多い。土師器および東播系須恵器の割合が高く、器種としては、土師器小皿と東播系須恵器埦が多くみられる。その他、瓦器、輸入陶磁（白磁・青磁）なども確認されており、埦類が割合が高い。また、僅かではあるが、国産陶器、平瓦の小片もみられる。さらに、過去の調査においても出土が確認された漁撈関係資料も数点みられ、管状土錘５点（うち３点が小片）、有孔土錘１点、有溝土錘４点が出土している。これらは、凡そ11世紀後半～13世紀前半の範疇のものと考えられ、形式的な検討が可能な資料で概観すると、土師器小皿・皿では伊野分類[7]のAa、Ab、Bb、Bc、Jb（11世紀後半～13世紀前半）、東播系須恵器埦では森田分類[8]の第Ⅰ期第２段階～第Ⅱ期第２段階（11世紀末～13世紀初頭）に該当するものが、それぞれ確認されている。

樟葉型瓦器埦

埦皿類が東播系須恵器主流の中において、瓦器も多くみられる。過去の調査成果を含めても同様で、埦、小皿などが確認されており、その大半が和泉型に分類されるものである。

畿内における瓦器埦の型式[9]で、和泉型以外でよく取り上げられるものとして、樟葉型・大和型などがあるが、二葉町遺跡においては、樟葉型に属する可能性が考えられるものとして、過去の調査で

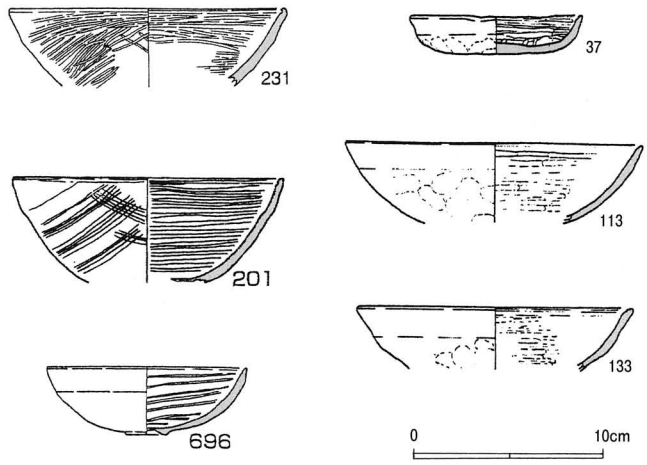


fig. 28　二葉町遺跡出土樟葉型瓦器埦

3点〔201（久保6・SE302)、231（二葉6・SE316)、696（二葉6・SX302)〕、今回の調査で2点〔113、133〕と小皿1点〔37〕が確認されている。形状等の特徴から、201がⅠ－2期〔11世紀末～12世紀初頭〕、37がⅡ－1期〔12世紀前半〕、231がⅡ－2期〔12世紀前半～中頃〕、113、133がⅢ－1期〔12世紀後半〕、696〔13世紀中頃～後半〕（いずれも橋本分類[10]）に属するものと推測される。

広範に分布し、数多くの流通がみられる和泉型に比べて、樟葉型は限られた分布を示し[11]、その流通量も少ないことから、稀少な資料と言えるものである。神戸市域においては、かつて、橋本久和氏の分布集成の中で、東灘区森北町遺跡、兵庫区大開遺跡での出土が紹介されている[12]。近年、尼崎市大物遺跡の調査[13]において、多くの樟葉型瓦器椀・皿が確認されているが、尼崎以西においては、遺跡数、出土量ともにごく少数である。

漁撈関係資料

漁撈に関わる資料として、今回の調査においては、先述のとおり土錘が10点（管状5点・有孔1点・有溝4点）確認されている。過去の調査においても、7世紀代～14世紀後半頃にかけての資料が確認されており、土錘以外にも真蛸壺、飯蛸壺などが確認されている[14]。

真蛸壺は4点確認されており、すべてSE313（二葉6）より出土している。土師質で、底を丸く仕上げた、いわゆる砲弾形のタイプである。共伴資料から13世紀前半頃のものと考えられる。

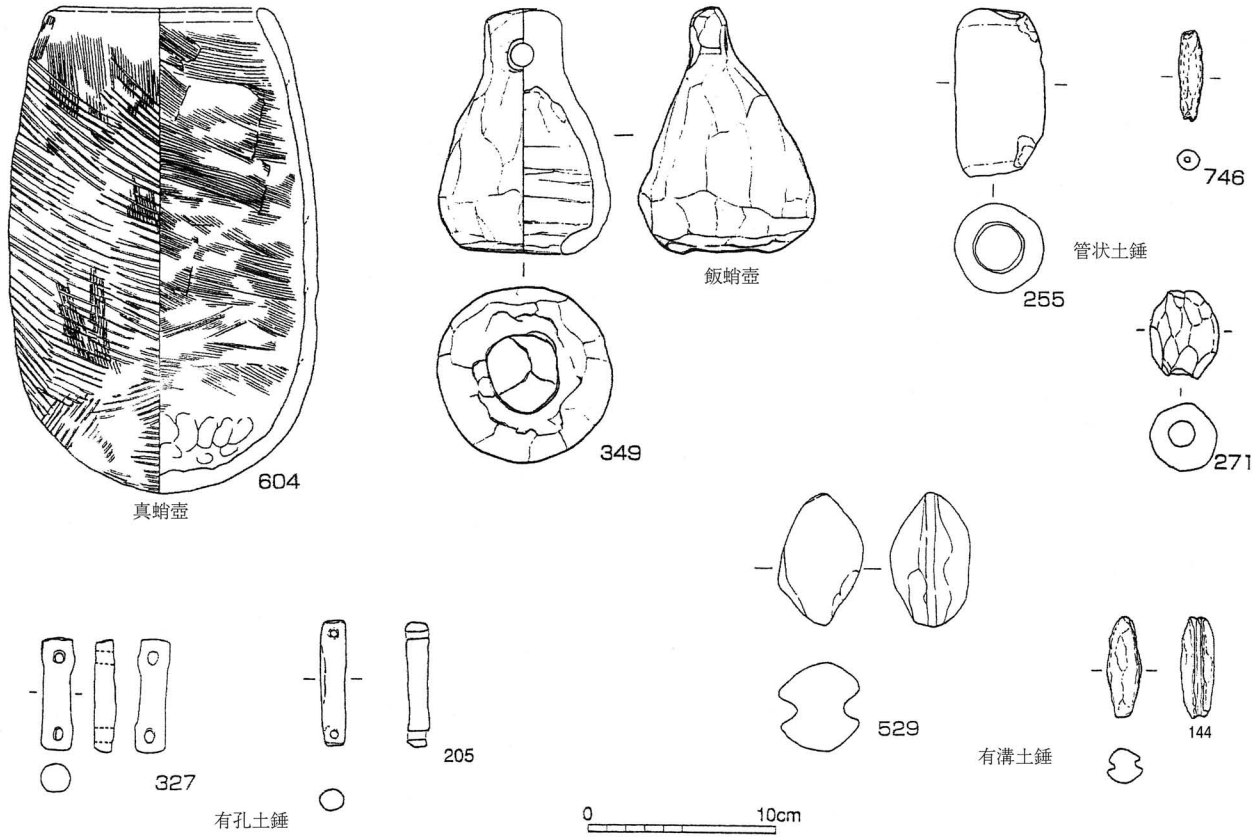


fig. 29　二葉町遺跡出土漁撈関係資料

飯蛸壺は、土師質で、上部に釣手がつく、いわゆる釣鐘形のものが５点確認されており、その中で残存が良いのが、SE319（二葉６）出土の２点である。この２点は共伴資料から13世紀前半のものと考えられる。

管状土錘は先述の３タイプの中では、最も出土数が多く、今回の調査を含めると41点確認されている。そのほとんどが、土師質で、全長５cm前後の細長いタイプのものであるが、やや太めのものや、球形のもの、須恵質のものも確認されている。大ぶりのものは少なく、最も大きいものでも、全長約11cm、径約６cm程度である。有孔土錘は、この３タイプの中では、最も出土数が少なく、今回の調査を含めても18点のみで、いずれも土師質である。法量がわかるものでも全長５～７cm、径１～２cm程度で、比較的小ぶりものが多い。

有溝土錘は今回の調査を含めると35点確認されている。いずれも土師質で、全長４～５cm、径１～２cm程度の小ぶりものが中心である。最も大きいものでも、全長約７cm、径約５cm程度である。

二葉町遺跡は海岸に近い立地であることから、海と密接な関係があったことは肯定でき、それに伴う可能性が高い資料も多い。準構造船材を側部材として転用した井戸〔SE306（二葉６）〕もそのひとつと言えよう。調査において確認された土錘や蛸壺は、集落内でもやや海岸に近い二葉町６丁目地区でその出土数が多く、蛸壺９点（真蛸壺４点・飯蛸壺５点）と土錘53点（管状26点・有孔16点・有溝11点）が同地区からの出土である。

しかしながら、有溝土錘については、久保町６丁目地区から24点確認されており、二葉町６丁目地区を大きく上回る。漁網の規模や形状、あるいは漁撈集団の違い等々、留意すべき点をいくつか挙げることができるが、詳細は不明である。

註

1）川上厚志編『二葉町遺跡発掘調査報告書－第３・５・８・９・12次調査－』 神戸市教育委員会　2001
東喜代秀編『二葉町遺跡発掘調査報告書－第14～21次調査－』 神戸市教育委員会　2008

2）菅本宏明「上小名田遺跡」『昭和62年度　神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会　1990
菅本宏明ほか「上小名田遺跡」『昭和63年度　神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会　1994
菅本宏明ほか「上小名田遺跡」『平成元年度　神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会　1992
10世紀末～12世紀末の掘立柱建物が約30棟確認されており、時代が進むにつれて、建物主軸が東方向にふれる傾向にある。筆者は集落に近接する河道の埋没等による地勢変化をその要因として考えている。

3）宇野隆夫「鴨東の開発」『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和53年度』 京都大学埋蔵文化財研究センター　1979
従来、京外にあたり、あまり居住域としての開発がなかった鴨東の岡崎において、京内と同様の平安時代後期の遺跡が所在することに着目し、「平安京改変」の端緒を窺うことができる資料として取り扱っている。さらに、「平安京改変」の要因として、京内の支配機構の変質を指摘している。また、平安京造営時には、京内外を問わず、区域、建物等に一定の規制があり、その枠組みの中で、開発が進められたと推測した上で、この枠組みそのものが、完全なものではなかった可能性が高いという見解を示している。

4）川上厚志「二葉町遺跡出土の井戸関連遺構」『二葉町遺跡発掘調査報告書－第３・５・８・９・12次調査－』
神戸市教育委員会　2001

5）宇野隆夫「井戸考」『史林』 第65巻第５号　1982

6）前掲５）
中世前期の比較的規模の大きい井戸においては、BⅢおよびBⅣタイプが多くみられることが、宇野氏の集成・研究から立証されている。また、数量的にもBⅢタイプの検出例が多いことから、この２タイプを想定した。

7）伊野近富「土師器皿」『概説　中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会編　1995
8）森田　稔「東播系中世須恵器の生産と流通」『中近世土器の基礎研究』Ⅱ　中世土器研究会編　1986
森田　稔「中世須恵器」『概説　中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会編　1995
9）橋本久和「中世日常雑器類の分析」『大阪文化誌』第２巻第３号　1977
工人集団の違いによる瓦器椀の製作技法等の差異を指摘し、型式分類を試みている。その後、大和・和泉・樟葉の３類型が設定されることとなる。
10）橋本久和「瓦器椀研究と中世史」『中世考古学と地域・流通』　真陽社　2009
森島康雄「畿内産瓦器椀の併行関係と暦年代」『大和の中世土器』Ⅱ　大和古中近研究会　1992
尾上　実・森島康雄・近江俊秀「瓦器椀」『概説　中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会編　1995
かつて、森島氏によって、大和・和泉・樟葉の３類型の併行関係を示されているが、近年、橋本氏によって時期区分の統一が図られている。ここで示している樟葉型Ⅰ－２期およびⅡ－１期は森島分類のⅠ－３期、樟葉型Ⅲ－１期は森島分類のⅡ－３期にそれぞれ重複しているものと理解している。
11）尾上　実・森島康雄・近江俊秀「瓦器椀」『概説　中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会編　1995
森島氏は、樟葉型瓦器椀の分布には特異性がみられ、特に、Ⅱ期の後半以降、分布圏が急激に狭まることを指摘している。
12）橋本久和『中世土器研究序論』　真陽社　1992
13）岡田　務ほか『尼崎市埋蔵文化財調査年報　平成７年度』(2)　尼崎市教育委員会　2001
岡田　務ほか『尼崎市埋蔵文化財調査年報　平成７年度』(3)　尼崎市教育委員会　2002
岡田　務ほか『尼崎市埋蔵文化財調査年報　平成７年度』(4)　尼崎市教育委員会　2003
岡田　務ほか『尼崎市埋蔵文化財調査年報　平成７年度』(5)　尼崎市教育委員会　2004
14）前掲１）

参考文献

橋本久和編『上牧遺跡発掘調査報告書』　高槻市教育委員会　1980
西岡巧次編『森北町遺跡発掘調査報告書』　神戸市教育委員会　1987
前田佳久編『大開遺跡発掘調査報告書』　神戸市教育委員会　1993
真鍋篤行「瀬戸内地方出土土錘の変遷」『瀬戸内地方出土土錘調査報告書』Ⅱ　瀬戸内海歴史民俗資料館　1993
兵庫県立歴史博物館ほか『津々浦々をめぐる－中世瀬戸内の流通と交流』兵庫・岡山・広島三県合同企画展実行委員会　2004
別府洋二ほか『楠・荒田町遺跡Ⅱ』（兵庫県文化財調査報告第339冊）　兵庫県教育委員会　2008

第２節　二葉町遺跡における古代末～中世前半の土器様相について

(1)　はじめに

二葉町遺跡では、11世紀中頃～13世紀中頃（平安時代中頃～鎌倉時代）にかけて、連綿と集落が形成されている。また、遺構からは、器種のセット関係が確認できる良好な状態で、一括資料となり得る遺物が出土しており、当該期の土器様相を示す好例とも言える。ここでは、これまでの調査の出土遺物から二葉町遺跡における、古代末～中世前半の土器様相とその変遷について、検討を試みたい。

方　法

神戸市域における中世土器については、これまでに、いわゆる東播系須恵器とも呼称される古代末～中世の須恵器生産地である、神戸市西区神出古窯址群、明石市魚住古窯址群からの出土遺物について、森田　稔氏[1)]、丹治康明氏[2)]を始めとする研究成果が公表されており、当地域における中世の土器様相は、神出・魚住両古窯址群出土土器編年を軸に語られる事が多い。畿内の古代～中世の土器変遷の編年基軸とされる土師器皿[3)]は、当地域ではその生産と実態は不明な点が多く、変遷にも未確定な要素が多い事から、平安京出土土器編年[4)]との対比から検証が行なわれている。もう一つの編年基軸とされる瓦器[5)]については、河内、和泉地域における編年が軸となっているのが現状である。

消費地の様相については、これまでに岡田章一氏による兵庫区兵庫津遺跡の12世紀～近世末の土器様相[6)]と変遷、谷　正俊氏による垂水区垂水日向遺跡の12世紀初頭及び13世紀前半の遺構からの出土遺物組成分析[7)]、中川　渉氏による西区玉津田中遺跡の12世紀末～13世紀初頭の出土遺物組成分析及び、11世紀中葉～16世紀代の土器様相[8)]と変遷、谷正俊氏による西区居住遺跡の12～13世紀の出土遺物組成分析[9)]などを始めとする、詳細な研究成果が公表されている。ここでは、これら先学の研究成果に導かれつつ二葉町遺跡出土遺物を検証してみたい。

尚、出土遺物の中で、土師器の皿については、いくつかのバリエーションが認められる。本来ならば、これらの型式分類を明らかにすべきであるが、紙幅の都合上、下記に示す通りの大分類とした。また、出土遺物全体からの数量算出による器種組成分析も実施できていない。他遺跡からの出土遺物の様相と合わせて、当地域の土器様相の実態を明らかにするためにも、将来的には詳細な型式分類が必要であり、出土遺物の器種組成の解明のためにも数量算出作業が必要であると考えている。このため、今回の遺構内からの一括資料による検証から、二葉町遺跡の土器様相の変遷について、一定の傾向を導き出すことはできたものと考えるが、より詳細な検証作業の課題が残されており、まずは、消費地における古代末～中世前半における土器様相とその変遷の粗案としたい。

尚、資料は二葉町遺跡出土遺物の中で、遺構からの一括資料を中心に用いた。その他、場合により、他の資料も使用している[10)]。

土師器

土師器の機種には、供膳具に皿、坏などがあり、煮炊具には鍋、甕などが存在する。

土師器皿の分類

土師器皿については、下記の通りの分類が可能である。

・皿A…平城京に系統が求められるタイプ。いわゆる「ての字状口縁」を有する。

・皿B…手づくね整形、体部上半の整形により２タイプに分けられる。体部下半には指頭圧痕が認められる。

皿B－a…体部外面上半に２段若しくは１段のヨコナデを施す。口径10cm 以上は大皿に分類できる。

皿B－b…体部外面上半に強くヨコナデを施す。下半にわずかに段が生ずる。

皿C…底部外面に回転糸切り痕が認められる。

体部の立ち上がりにより、２タイプに分けられる。

皿C－a…体部が直線的に延びる。

皿C－b…体部がナデにより、外反する。

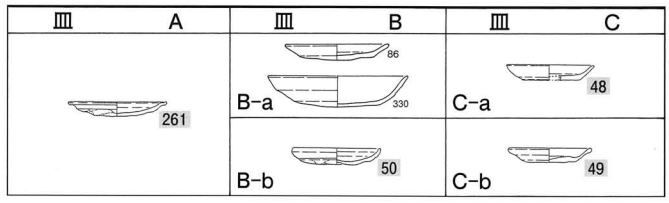


fig. 30　土師器皿分類図（S＝1：8）

黒色土器　椀が存在する、これまでに確認されているものはＡ類である。

瓦　器　椀と小皿が存在する。和泉型が大半を占め、わずかではあるが、樟葉型が出土している。二葉町６丁目地区 SX302出土（696）は、丸みを持つ体部と口縁端部の特徴から、樟葉型として分類した。和泉型は12世紀前半～13世紀半ばまで、その変遷を辿ることができる。

須恵器　椀、小皿、鉢、壷、甕などが存在する。

輸入陶磁　青磁・白磁が出土している。両者共に碗、小皿が存在する。第１次調査では白磁四耳壷が出土している。二葉町遺跡出土の輸入陶磁に関しては、第３節で触れているので、詳細はこちらを参照されたい。

(2)　土器様相の変遷について

様相１　全体に遺構の数は多くない、溝、井戸、土坑等がわずかに存在するが、二葉６地区では掘立柱建物 SB328・329と、井戸 SE320がひとつのまとまりとして検出されている。まとまった遺物としては SK301（久保６）、SE320（二葉６）からの出土遺物が挙げられる。

SK301（久保６）出土遺物には、いわゆる「ての字状口縁」を有する土師器皿Ａ（261）、坏（265）が存在している。口縁部の形態から平安京Ⅲ期古段階に比定でき、10世紀半ば頃の時期が考えられる。

SE320（二葉６）出土遺物は井戸からの出土であるが、京都府篠窯産須恵器鉢（356）（石井分類Ｃ）が特筆できる。また、黒色土器Ａ類椀（349）（森分類畿内系Ⅲ類Ⅶ期）が共伴している。これら出土から SK301（久保６）は10世紀半ば、SE320（二葉６）は10世紀後半に位置付けられる。

上記から10世紀半ば～後半の時期が考えられる。

様相２　二葉町遺跡では、この段階については、顕著な遺構・遺物が確認されていない。前後の遺物の関係から、11世紀前半に位置付けられる。

様相３　久保６地区南半でわずかに遺構の分布が認められ、掘立柱建物 SB317が存在する。遺物は SB317、SD310、SK307（久保６）出土遺物などが挙げられる。

土師器は皿Ａの他、底部糸切りの土師器皿Ｃ－ａが存在する。瓦器は、SE302(久保６）からは、11世紀末～12世紀前半にかけての遺物が出土しているが、樟葉型瓦器椀（201）は、内外面のヘラミガキの特徴から、橋本分類[11] Ⅰ－２期と考えられる。須恵器は、この

段階からいわゆる東播系須恵器が出現する。SD310（久保６）出土須恵器椀（80）、同SB317出土須恵器椀（43）は共に、丸みをもつ体部で、内面底部に凹みがあり、明瞭な平高台をもつ特徴から、神出古窯址群釜ノ口５号窯出土[12]の椀に類似している。SE315（久保６）出土片口鉢（28）はやや外反気味となる口縁部の特徴から、共に森田分類第Ⅰ期第１段階の時期が考えられる。

これらの出土遺物から11世紀後半～末葉の時期が考えられる。

様相４

この時期から掘立柱建物などの顕著な遺構が急増する。SK311、SE302、SE315、318（久保６）、SE304、SE318（二葉６）などから比較的まとまった遺物が出土している。

ST304（二葉６）出土の土師器皿（373）は皿Ａの最後の段階であろう。瓦器は、SE316（二葉６）から、樟葉型の椀（231）が出土している。細く鋭い内外面のヘラミガキから橋本分類のⅡ－２期に比定できるものと考えた。SK311（久保６）からは和泉型の椀（91）と須恵器椀（92）が共伴している。（91）は、器高が５cmを超える点や、内面の密なヘラミガキの特徴から、橋本分類和泉型Ⅱ－２期に類似する。（92）は平高台が消失しており、神出古窯址群老ノ口４号窯出土椀[13]に類似することから、森田分類第１期第２段階に位置付けられよう。SE315（久保６）出土（11）は平高台の名残りがわずかに認められることから、（92）よりもやや先行するものであろう。

これらの出土遺物から11世紀末葉～12世紀前半頃の時期が考えられる。

様相５

前段階に引き続き、遺構の増加は続く、遺物の出土数も多い。SB306、SP301、303、SE317、SX304（久保６）などから比較的まとまった遺物が出土している、

久保町６丁目地区北東部では、遺構の切り合い関係と遺構出土遺物から、その推移を検証することが可能である。その中でも、良好な一括資料にSB306（久保６）出土遺物があり、これを基準に次段階の様相６にかけて、詳細な前後関係を確認することができる。

SB306P9からは多くの遺物が出土している。土師器皿には手づくね系の皿Ｂと糸切り系の皿Ｃ（48・49）の両者が存在する。SP303（久保６）出土の土師器皿（120・119）は、やや後出するタイプであろう。須恵器椀（54）は内面の見込み部の凹みがほぼ消失しており、森田分類第Ⅱ期第１段階に位置付けられよう、P10からは和泉型と考えられる瓦器小皿、須恵器小皿が出土している。ST301（久保６）出土和泉型瓦器椀（209）は丸味を保った体部から、やや古い様相を持つものと考えられる。SB306よりも後出するSP301からは、和泉型瓦器椀（104）と須恵器椀（106）が共伴している。和泉型瓦器椀（104）は口縁部下外面の強いナデと強い指頭圧痕跡、形骸化した内面ヘラミガキから、また、SX301（久保６）出土の樟葉型椀（113）、SE317（久保６）出土の皿（37）は、外面ヘラミガキが省略され、内面のみにヘラミガキが認められることから、共に橋本分類Ⅲ－１期に比定されるものと考えられる。

これらの出土遺物から12世紀半ば～後半の時期が考えられる。

様相６

二葉町遺跡において、掘立柱建物群がピークを迎え遺構の数は多く、遺物もまた多い。SB304、305、309、SP302（久保６）出土遺物などが挙げられる。

特にSP302からは、土師器皿は皿Ｂ－ａ、皿Ｂ－ｂ、瓦器小皿、須恵器椀、小皿が共伴している。須恵器椀（117）は一層器高が低くなる。神出古窯跡群老ノ口支群２号窯[14]

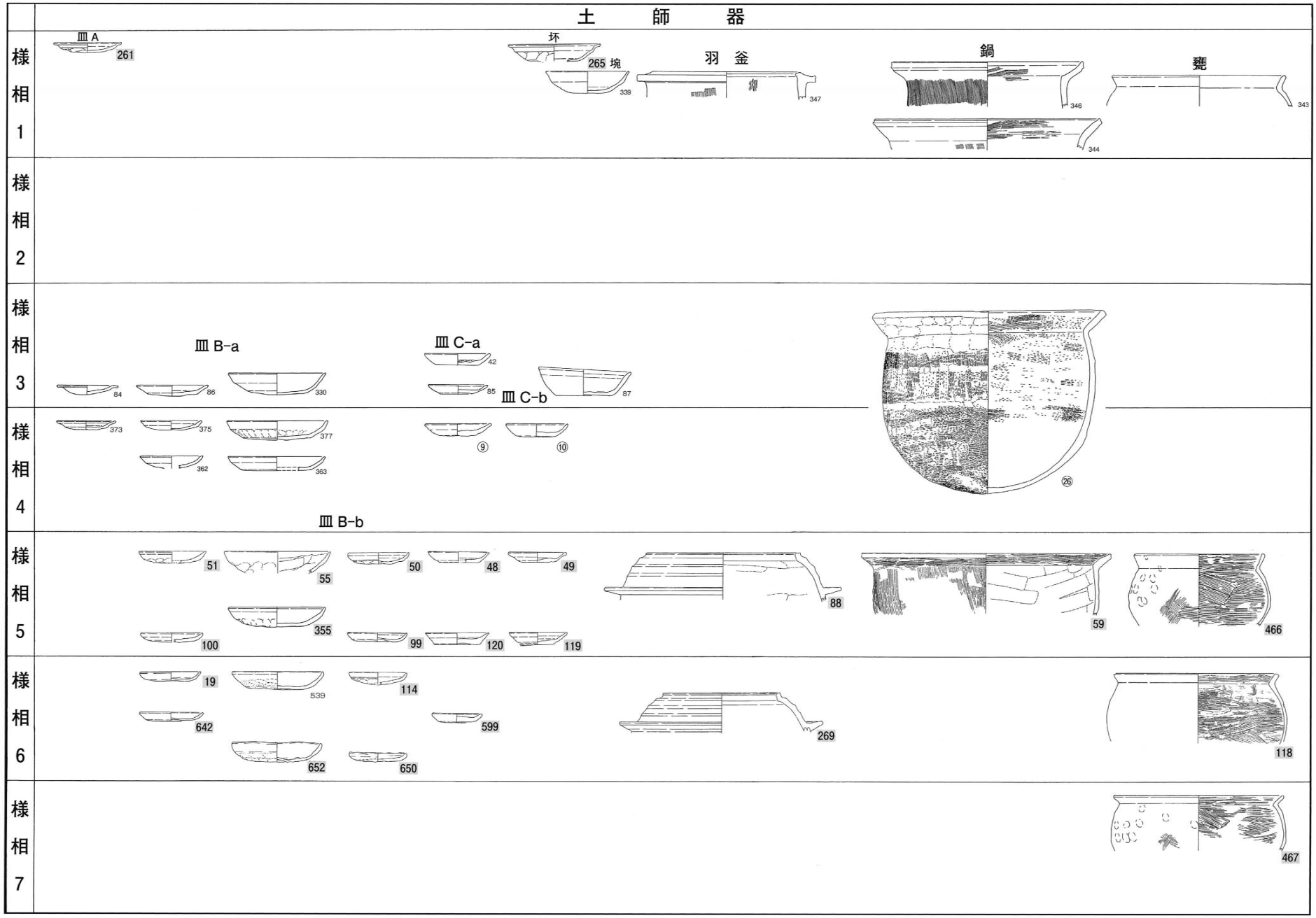


fig. 31　二葉町遺跡出土土器変遷図 (1)（S＝1：8）

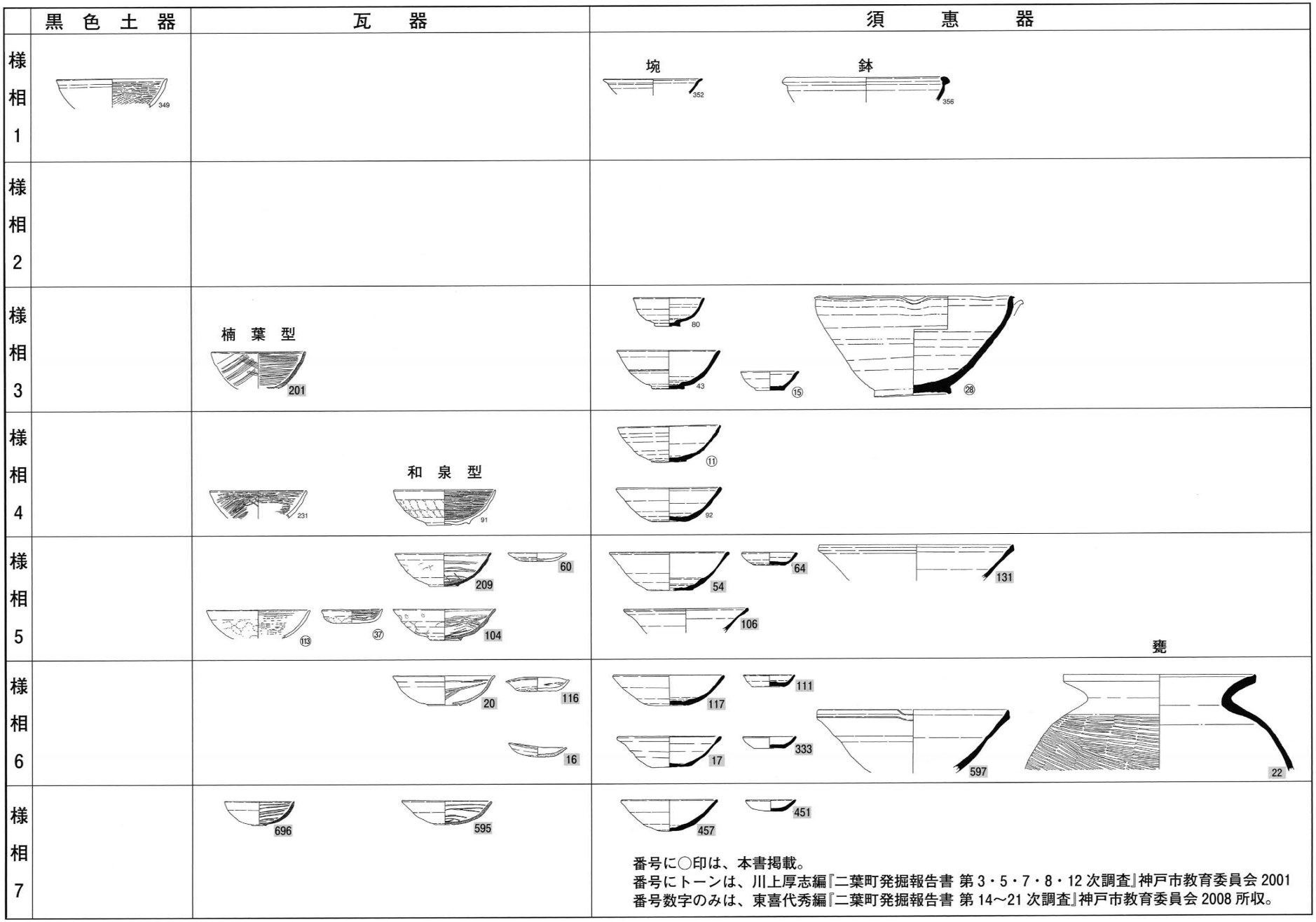


fig. 32　二葉町遺跡出土土器変遷図 (2)（S＝1：8）

の埦に類似しており、森田分類第Ⅱ期第２段階に比定されるものと考えられる。SP302よりもやや先行するSB304出土の和泉型瓦器埦（20）は前段階の（104）よりも高台の退化、器高の縮小化が進み、体部内面のヘラミガキも一層疎らとなっている。橋本分類Ⅲ－２期に比定できると考えられる事から、SB304・SP302は、ほぼ近い時期が考えられる。

これらの出土遺物から12世紀末～13世紀前半頃の時期が考えられる。この段階以降、遺構・遺物は急減する。

様相７

この段階では、遺構の数が激減する。掘立柱建物なども消失して、井戸や落ち込みなどがわずかに存在するのみである。SE312、313（二葉６）出土遺物などが挙げられる。

SE313（二葉６）出土の和泉型瓦器埦（595）は法量の縮小化、ヘラミガキの形骸化がさらに進むが、口径が13cmを超えており、器高は3.5cmで高台がわずかに残存することから橋本分類Ⅲ－３期に比定できるものと考えられる。SX302（二葉６）出土楠葉型瓦器埦（696）も同時期であろう。SE306（久保６）出土須恵器埦（457）は、神出古窯址群老ノ口２号窯[15]などに類似例が見られる。森田分類第Ⅱ期第２段階に比定されるものと考えられる。

これらの出土遺物から13世紀半ば頃の時期が考えられる。

以上、二葉町遺跡における古代末～中世前半の出土遺物の変遷を見て来たが、その特徴を検証してみたい。

土師器

土師器は、ⅢＡ・坏Ａのいわゆる「ての字状口縁」を有するタイプは、坏が様相１、ⅢＡは様相５まで存在が確認できる。この点は畿内中心部と同じく「ての字状口縁」を有するタイプは、12世紀前葉には消滅している点が認められる。ⅢＢ・Ｃは在地系のタイプと推定され、共に11世紀後半から変遷を辿ることができる。特に底部糸切りのⅢＣは、二葉町遺跡以外にも長田神社境内遺跡、御蔵遺跡や五番町遺跡などの長田区内に所在する、近隣の遺跡にも存在するが、木棺墓への副葬に御蔵遺跡では使用が認められるものの、二葉町遺跡では副葬に使用が認められず、長田神社境内遺跡や松野遺跡の祭祀に関連すると考えられる遺構からの出土遺物には含まれていないことから、使用に使い分けなどがあった可能性も推察される[16]。

瓦　器

瓦器は、広域な分布が知られる和泉型以外に、樟葉型の存在が注目される。

二葉町遺跡では、樟葉型は様相３～５及び７、和泉型は様相４～７までが現在確認されている。樟葉型は和泉型に比べると、分布範囲も狭く、流通量も少なかったものと見られ、分布範囲の西限は兵庫区付近とされる[17]が、神戸市域では、かつて橋本久和氏の分布集成の中に東灘区森北町、兵庫区大開遺跡からⅠ期の埦の出土が紹介されており、二葉町遺跡からの出土例も合わせて、その分布範囲はさらに西へと広がるものと考えられるが、神戸市域では、現在までに長田区から西側での出土は確認されていない[18]。しかし、樟葉型は瀬戸内海沿岸から高知県、九州まで広く出土例があり[19]、主要な交通路に沿う遺跡から出土しており、点的な分布の広がりが今後確認される可能性もあるものと思われる。

須恵器

須恵器では、様相１の篠窯産須恵器鉢（356）が特筆される。（356）は、口縁端部が丸みをもって肥厚する特徴から石井分類鉢Ｃと考えられる。篠窯の製品の須恵器鉢Ｃは、緑釉陶器と共に、広範囲な分布が知られており、宮崎県や北部九州、愛媛県でも出土が確認

されている[20]。畿内と西国を結ぶ、交通の要路上に位置する二葉町遺跡の性格を物語るものとして、挙げることができよう。

古代末～中世の須恵器生産地である、西区神出古窯址群は11世紀後半には生産が開始されており、13世紀後半まで生産が続くとされ、12世紀末には明石市魚住古窯址群での生産が急増し、13世紀代には主力が魚住へと移るとされている。二葉町遺跡を始めとする長田区内の遺跡からも、第１期第１段階(森田分類)から遺物の出土が確認されている。二葉町遺跡においても、その変遷は、様相３～７にかけて、神出・魚住両古窯跡群における須恵器の変遷と同じ動向を追うことができる。しかし、須恵器の器型には、いくつかのバリエーションの存在が認められる。これまでに東播系須恵器として取り扱われてきた古代末～中世の須恵器は、近年窯址の調査例が増加して、新たなデータが増えつつあり、生産地における様相、近隣地域、また遠隔地も含めた消費地での供給状況などを再検証する必要があるものと考える[21]。また、東播系須恵器と瓦器埦の編年対比は、これまでにも中央区・兵庫区楠・荒田町遺跡出土遺物などで検証が行なわれているが[22]、二葉町遺跡において、これまでの編年観と遺構の切り合い関係に齟齬が無く、双方の変化を追うことが出来たことは、消費地における様相のひとつとして、捉えられよう。

出土遺物からみた様相

二葉町遺跡における出土遺物の様相は、土師器については、底部糸切りの皿の存在が、畿内周辺部に多く見られる傾向を示し、東播系須恵器埦、鉢の多用という傾向からは、尼崎市大物遺跡などに代表される、出土遺物における瓦器の割合が卓越する西摂地域東部に対し、西摂地域西部に位置する二葉町遺跡の立地を物語るものであろう[23]。長田神社境内、御蔵、神楽、松野などの二葉町遺跡と近い距離に所在する、長田区内の同時期の遺跡からの出土土器の様相と対比しても、その動きには共通する要素が多く見られ、畿内縁辺部における様相のひとつを表しているものとも考えられる。この点は兵庫区祇園遺跡における、園池遺構内から出土した多量の土師器皿の多くが京都系土師器皿であるという特殊なケース[24]を除けば、当地域における傾向を示す一例である可能性も考えられる。その様相の変遷は、畿内中心部とその周囲の地域における土器変遷と流通を考える上で注目される。しかし、二葉町遺跡では一般的な集落とは異なり、様相１における篠窯産須恵器鉢Ｃの出土や、様相３～５・７における樟葉型瓦器埦の出土、また、輸入陶磁が比較的多く出土し、墓への副葬も存在する点などからは、二葉町遺跡が瀬戸内海航路及び山陽道という交通要路上に位置し、流通経路の拠点地の近くに位置していたものと考えられる。しかし一方では、二葉町遺跡では滑石製品の出土が非常に少なく、輸入陶磁の搬入は認められるが、瀬戸内地域を中心とする、西日本各地において生産された土器類の搬入は認められず、瀬戸内海航路と神崎川・淀川航路の結節点として重要な位置を占めていたとされる、文献上に見られる港の「大物浦」に近接する遺跡と考えられている尼崎市大物遺跡や、大物遺跡と共通する遺物の出土が確認されている、芦屋市寺田遺跡の様に古い段階の滑石製品の出土が認められない[25]などの傾向も見られる。

全体的な土器様相のあり方から考えると、二葉町遺跡は海岸にも近く交通至便な立地状況に展開した、有力者の存在も推定できる、拠点集落のひとつとも位置づけられよう。

註

1）森田　稔「東播系中世須恵器生産の成立と展開－神出古窯址群を中心に－」『神戸市立博物館研究紀要』第３号
神戸市立博物館　1986
森田　稔「須恵器系の中世陶器生産」『財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要　第５輯』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター　1997など

2）丹治康明「東播系須恵器について」『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会　1985
丹治康明「東播磨における瓦生産－神出・魚住窯を中心に－」『中近世土器の基礎研究Ⅲ』日本中世土器研究会　1987など

3）橋本久和氏は、土師器皿について「編年基軸となる資料として、長く生活必需品であった土師器系の供膳具が有効」として、「畿内では、古代から中世社会への変容に呼応するように型式変化する土師器皿が編年基軸とされる。」としているが、京都における精緻な土師器皿編年が、様相が明らかではない周辺地にそのまま適用できるのか疑問があるとしている。
橋本久和『中世考古学と地域・流通』真陽社　2009

4）伊野近富「土師器皿」『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社　1995
小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要　第３号』財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996など

5）橋本久和氏は、土師器皿と瓦器椀の関係について「京都では瓦器椀の出土が少なく、逆に京都以外では瓦器椀出土が多い」ことから、「京都を除くと瓦器椀が編年基軸となる地域が多い。」と述べている。
前掲３）

6）岡田章一「時期設定と土器・陶磁器組成の変遷」『兵庫津遺跡Ⅱ』兵庫県教育委員会　2004

7）谷　正俊・斎木　巌「第１次調査の成果」『神戸市垂水・日向遺跡　第一・三・四次調査』神戸市教育委員会・(財) 神戸市スポーツ教育公社　1992

8）中川　渉編『玉津田中遺跡－第４分冊－』兵庫県教育委員会　1995
中川　渉「中世」『玉津田中遺跡－第６分冊－（総括編)』兵庫県教育委員会　1996

9）谷　正俊「居住遺跡における土器・陶磁器の組成について」『居住遺跡発掘調査概要』神戸市教育委員会　1984

10）編年観については、下記の文献を参考にした。
中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社　1995
小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要　第３号』
財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996
橋本久和『中世考古学と流通』真陽社　2009

11）畿内産瓦器椀の中で、樟葉型と和泉型については、橋本久和氏による樟葉型、尾上　実氏の和泉型の編年が提示され、森島康雄氏によって樟葉・和泉・大和の３類型の併行関係と年代観を示されている。近年橋本久和氏によりこの３類型の時期区分の統一化が図られている。
橋本久和「中世土器研究予察」『上牧遺跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会　1980
尾上　実「南河内の瓦器椀」『古文化論叢』藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会　1983
森島康雄「畿内産瓦器椀の併行関係と暦年代」『大和の中世土器Ⅱ－大和型瓦器椀とその周辺－』大和古中近研究会　1992

12）丹治康明「神出古窯址群」『昭和56年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1983

13）森田　稔「神出古窯址群の発掘成果」『神戸市史紀要「神戸の歴史」』第19号　神戸市企画調整局　1988

14）森田　稔「神出古窯址群」『昭和58年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1986

15）前掲14）

16）長田区長田神社境内遺跡第17次調査SK06、谷２内遺物集中地点１・２は祭祀に関連する遺構と推定されるが、出土した土師器皿には皿Ｃは認められない。また、長田区松野遺跡第19次調査SK01も祭祀に関連する可能性があるが、出土遺物に皿Ｃは認められない。
安田　滋・富山直人・石島三和編『御蔵遺跡第４・６・14・32次発掘調査報告書』神戸市教育委員会　2008
関野　豊他「松野遺跡の調査」『松野遺跡第11～23・25・26・29～31次　水笠遺跡第２・３・５～15・17～21次発掘調査報告書』神戸市教育委員会　2002
阿部　功『長田神社境内遺跡第17次発掘調査報告書』神戸市教育委員会　2008

17）橋本久和「瓦器椀の分布」『中世土器研究序論』真陽社　1992

18）旧播磨国に属する垂水区、西区内の遺跡では瓦器の出土例は全体的に多くないが、瓦器埦の出土が確認されている垂水区垂水日向遺跡、西区居住遺跡、玉津田中遺跡などでは、現在までに樟葉型の存在は認められない。

19) 前掲３

20) 石井清司「篠窯須恵器」『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社　1995

21) 近年、北区小名田窯、西区神出古窯址群、三木市久留美窯跡群柳谷支群、小野市勝手野窯跡群などで平安時代～鎌倉時代の窯跡の調査が行なわれている。神出・魚住古窯址群などの広域流通を目的とした大規模生産とは異なった、在地系の窯跡の存在が指摘されており、神戸市繁田窯は12世紀初頭～前葉、勝手野窯跡群は11世紀末～12世紀前半、また、旧摂津国有馬郡に所在する小名田窯は12世紀末～13世紀前半に操業した、局地的な需要に対応した窯跡とされている。生産地の近隣地における、各窯の製品の供給状況と、これら小規模窯の供給範囲との関わりなども含めた検討も必要であろう。

繁田窯：丸山　潔・山本雅和『繁田古窯址発掘調査報告書』神戸市教育委員会　1988

小名田窯：久保弘幸・仁尾一人『小名田窯跡』兵庫県教育委員会　1997

神出古窯址群：池田征弘・久保弘幸・岡本一秀編『神出窯跡群』兵庫県教育委員会　1998など

久留美窯跡群：仁尾一人・池田征弘・森内秀造編『久留美・跡部窯跡群』兵庫県教育委員会　1999

勝手野窯跡群：井守徳男・久保弘幸・松岡千寿『勝手野古墳群』兵庫県教育委員会　2002

22) 山田清朝氏は、中央区・兵庫区楠・荒田町遺跡からの出土瓦器埦と、近隣遺跡から出土した東播系須恵器から、その時期を検討している。

山田清朝「出土瓦器について」『楠・荒田町遺跡Ⅱ』兵庫県教育委員会　2008

23) 尼崎市大物遺跡出土遺物（12世紀前半～13世紀後半）は福井英治氏・益田日吉氏・岡田　務氏・山上真子氏・高梨政大氏により数量分析が実施されている。これを基にした分析を橋本久和氏が行なっており、この時期全体では、瓦器が全体の34.4％を占め、東播系須恵器を中心とする国産陶器は1.9％となっている（前掲３）。兵庫区祇園遺跡 SX07（12世紀後半）出土遺物における数量は富山直人氏の分析比率では、瓦器1.63％、須恵器0.72％と瓦器がやや多く。垂水区垂水日向遺跡における谷　正俊氏の分析比率（前掲７）では、１次 SK02（12世紀初頭）では瓦器0.5％、須恵器27.1％、１次 SK04（13世紀前半）瓦器22％、須恵器35.3％、谷　正俊氏による西区居住遺跡の分析比率（前掲９）は瓦器1.44％、須恵器64.37％、西区玉津田中遺跡辻ヶ内地区、二ノ郷・徳政地区（共に12世紀後半～13世紀初頭）における中川　渉氏による分析比率（前掲８）は辻ヶ内地区で瓦器0.09％、須恵器3.6％、二ノ郷・徳政地区では瓦器2.4％、須恵器61.2％と須恵器の比率が高くなり、それぞれの計測法に違いはあるが、須恵器と瓦器の割合について、摂津西部と播磨東部における組成の違いを表している。

岡田　務・山上真子編『尼崎市埋蔵文化財年報　平成７年度(2)～(5)』尼崎市教育委員会　2001～2004

富山直人『祇園遺跡　第５次発掘調査報告書』神戸市教育委員会　2000

24) 兵庫区祇園遺跡では、園池と考えられる遺構内から多量の土師器皿が、須恵器埦、瓦器椀などと共に出土している。土師器皿には京都系の土師器皿が多く含まれ、伊野分類皿Ｃ、小森・上村分類皿 Ac に分類される、いわゆる「コースター型」なども出土している。また、建物については明らかではないが、播磨系の瓦と共に、山城系の瓦も出土している。この他、園池の南側に近接する地点からは、中国江西省吉州窯系玳玻盞天目小碗、白磁四耳壺、白磁水注などを含む白磁、青磁などの輸入陶磁が出土している。これらの出土遺物の時期がほぼ12世紀後半に限られる点や、立地、土師器皿の大量投棄、多量の輸入陶磁、山城系瓦の存在などから福原京関連の遺構であるとの見方がなされている。また、祇園遺跡出土の富山分類京都系土師器皿Ｎ類（今回の分類における皿Ｂに類似するタイプと思われる。）について、小森俊寛氏は京都における皿Ｎに近似したもので、「胎土に差異は認められるが、京都から工人が移動して製作された可能性がある。」としている。

須藤　宏「祇園遺跡　第２次調査」『平成６年度　神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1997

口野博史「祇園遺跡　第３次調査」『平成６年度　神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1997

富山直人『祇園遺跡　第５次発掘調査報告書』神戸市教育委員会　2000

小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究－日本律令的土器様式の成立と展開、７～19世紀』京都編集工房　2005

25) 尼崎市大物遺跡からは、九州系と考えられる瓦器埦、讃岐系、吉備系、防長系の土師器埦などが出土している。淀川水系流域の遺跡においてもこれらの遺物の出土が確認されている遺跡が存在しており、橋本久和氏は瀬戸内からの物資輸送との関わりを指摘されている。また、大物遺跡、芦屋市寺田遺跡第166・167地点からは、11世紀代と考えられる、断面縦長の瘤状突起を有する滑石製石鍋（木戸分類Ⅱ類）が出土している。木戸雅寿氏の研究によれば、Ⅱ類、Ⅲ－ａ－１類までの古い段階の滑石製石鍋の分布は、主要な生産地である長崎県西彼杵半島を中心とした九州地方が主体であり、鍔を有するⅢ－ａ－２類（12世紀末）以降に西日本への爆発的供給が始まるとされている。これまでに二葉町遺跡で出土が確認されている滑石製石鍋は、鍔を有するタイプ（木戸分類Ⅲ類）である。また、大物遺跡出土の黄釉鉄絵盤（12世紀後半～13世紀前半）は、同様の製品の12世紀後半の中国磁灶窯系黄釉鉄絵盤が、寺田遺跡第139地点から出土している点が注目される。

橋本久和「中世の淀川と河床遺跡」『中世考古学と流通』真陽社　2009

岡田　務・山上真子編『尼崎市埋蔵文化財年報　平成７年度(2)』尼崎市教育委員会　2001

岡田　務・山上真子編『尼崎市埋蔵文化財年報　平成７年度(5)』尼崎市教育委員会　2004
前田佳久・平田朋子「寺田遺跡第139地点の調査」『寺田遺跡発掘調査報告書　第132・133・137・139・141・142地点』
芦屋市　芦屋市教育委員会2003
川上厚志・阿部　功・中村大介『寺田遺跡発掘調査報告書　第150～153・157～160・166～168地点』
芦屋市・芦屋市教育委員会　2005
木戸雅寿「石鍋」『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社　1995

参考文献

大村敬通・水口富夫編『魚住古窯跡群』兵庫県教育委員会　1983
石井清司「篠窯跡群出土の須恵器について」『京都府埋蔵文化財情報』第７号　財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター　1983
宇野隆夫「後半期の須恵器－平安京・京都出土品にみる中世的様相の形成－」『史林』67-6　史学研究会　1984
森　　隆「西日本の黒色土器生産」（上～下）『考古学研究』37－２～４考古学研究会　1990・1991
神戸市教育委員会文化財課編『福原京とその時代－対外交流の門戸博多・平安京・北の都奥州平泉－』神戸市教育委員会文化財課　1996
須藤　宏「地中から語る清盛の時代」『歴史のなかの神戸と平家　地域再生のメッセージ』神戸新聞総合出版センター　1999
鈴木康之編『津々浦々をめぐる－中世瀬戸内の流通と社会－』兵庫・岡山・広島三県合同企画展実行委員会　2004
石島三和『五番町遺跡発掘調査報告書　第12次調査』神戸市教育委員会　2007

第３節　二葉町遺跡出土の輸入陶磁

(1)　第１次調査における白磁四耳壺の出土

二葉町遺跡が輸入陶磁を出土する中世集落遺跡として注目されるきっかけとなったのは、昭和63年度に実施された第１次調査における、ほぼ完形の白磁四耳壺の出土であった。その調査成果については、後に松岡千尋氏によって、詳細な資料紹介[1)]が行われ、広く周知されるに至った。

1996年以降、区画整理事業に伴う発掘調査[2)]が開始され、白磁、青磁などの輸入陶磁の出土が数多くみられるようになった。

第１次調査においては、白磁および青磁などの輸入陶磁が出土しているが、提示されているものは、fig. 33の１～３で、１が先述の白磁四耳壺、２が白磁碗、３が白磁皿である。これらの類型等については、後述することとする。

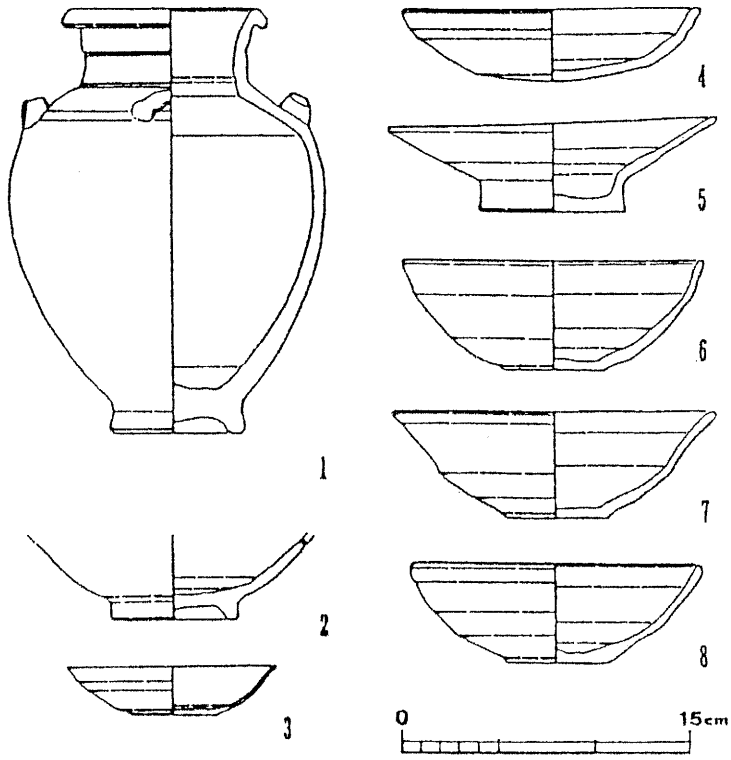


fig. 33　第１次調査出土遺物（註１〔松岡1992〕より）
〔１～３輸入陶磁、４～５土師器、６～８須恵器〕

(2)　器種と類型

二葉町遺跡出土の輸入陶磁は、白磁、青磁が大半を占め、僅かに他種も存在するようであるが、小片のためその詳細は確認できていない。これまでに報告されているもの（第22次調査を含む）では、白磁が55点、青磁が16点を数え、図示し得なかった小片等も含めると、かなりの数量となると思われる。確認できる器種としては、白磁が四耳壺、碗、皿で、四耳壺は先述の１点のみで、他はすべて碗もしくは皿である。青磁は皿が３点の他は、すべて碗である。尚、本文中で使用する類型は、前章と同様に山本信夫氏の分類型式[3)]に基づくが、山本氏の分類が、先学の横田賢次郎・森田勉両氏の分類[4)]をほぼ踏襲しており、両氏の分類にも準ずることも付け加えておく。また、fig. 34・35および表１にて図面・一覧等を示している。合わせて参照されたい。

白磁四耳壺　白磁四耳壺については、先述の資料紹介(1992松岡)[5)]の中で、詳細に述べられており、卵形の体部に直立する口縁、口縁端部の折り曲げが鈍い点などの特徴から、Ⅲ１類に分類されるものと考えられる。同タイプのものは、同遺跡より北西約５km に所在する兵庫区祇園遺跡においても数点出土している[6)]ものの、出土事例は然程多くなく、希少な資料と言えよう。

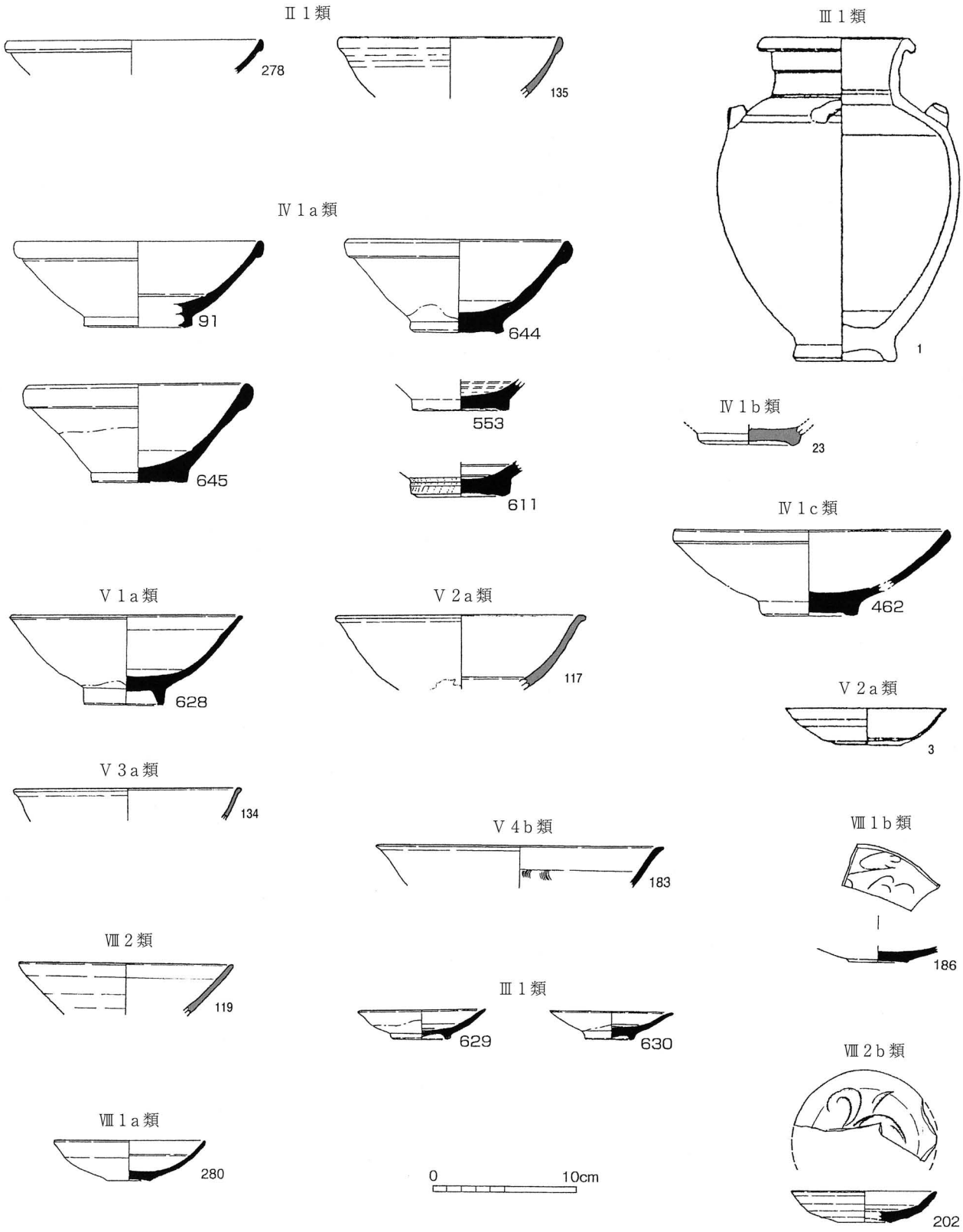


fig. 34　二葉町遺跡出土白磁

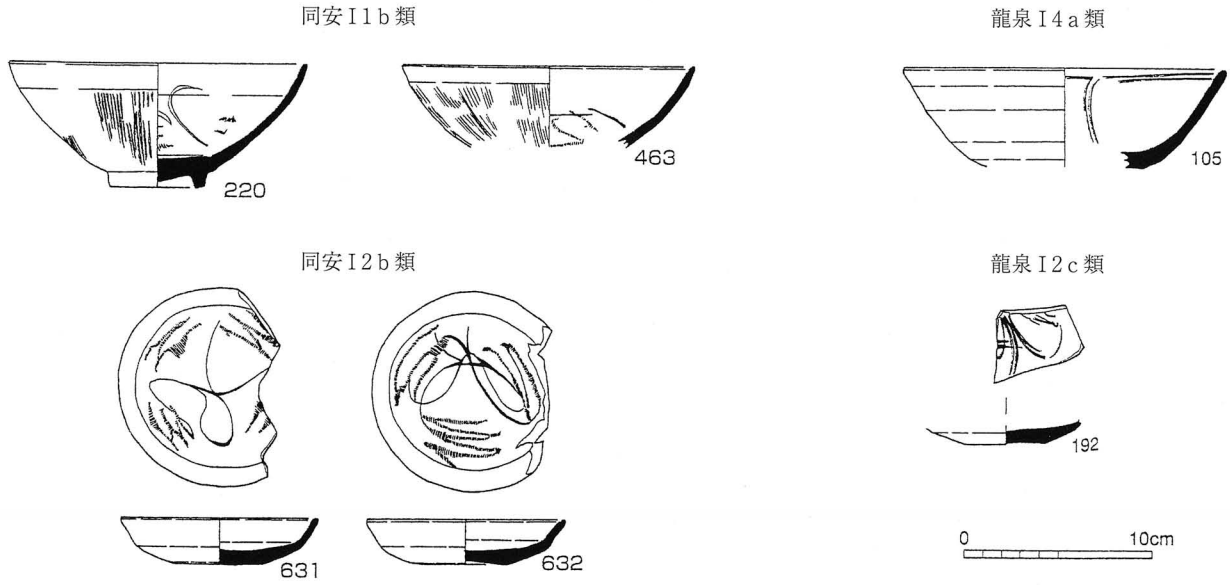


fig. 35　二葉町遺跡出土青磁

白磁碗　白磁碗については、Ⅱ類、Ⅳ類、Ⅴ類、Ⅷ類に属するものが確認されているが、Ⅳ類が最も多く、類型が判明するものの中では半数以上を占める。また、Ⅳ類中でもⅣ1a類の比率が高い。その他、細分類まで判明しているものとしては、Ⅱ1、Ⅳ1b、Ⅳ1c、Ⅴ1a、Ⅴ2a、Ⅴ3a、Ⅴ4b、Ⅷ2などの類型が挙げられる。

白磁皿　白磁皿については、Ⅲ類、Ⅴ類、Ⅷ類が確認されており、それぞれⅢ1、Ⅴ2a、Ⅷ1a、Ⅷ1b、Ⅷ2bの各類型に属するものと考えられる。

青　磁　青磁は同安窯系および龍泉窯系と考えられるものが確認されている。同安窯系のものとしては、I1b類の碗とI2b類の皿が、龍泉窯系のものとしては、I4a類の碗とI2c類の皿がそれぞれ確認されている。また、今回の調査（第22次調査）において、龍泉窯系のⅡ類（旧I5類）に属する可能性がある碗の底部が確認されているが、ここでは、型式不明資料として扱っておくこととする。

尚、底部等のみの残存であることから、系統、型式が不明な碗が数点確認されており、山本分類型式内においての特定が困難であるものの、上田秀夫氏分類[7]のD類の範疇に含まれる可能性を留意しておきたい。

(3)　12・13世紀の輸入陶磁とその背景

二葉町遺跡における中世集落の変遷については、過去の報告等でも取り上げられており[8]、その様相もかなり明らかになってきた。集落規模の拡大が具体化するのが、11世紀後半以降で、12世紀中頃～13世紀初頭にかけて盛行がみられ、13世紀中頃以降、急激にその規模を縮小するといった概ねの傾向が窺うことができる。

類型別の年代観　同遺跡出土の中世前期に属する輸入陶磁については、その共伴資料等から、凡そ12世紀前半～13世紀前半頃の範囲内のものと推測され、集落の盛行期において多くみられることが認識できる。近年において、大宰府出土の輸入陶磁の分類検証に基づいた編年区分[9]が設定されており、その区分に当該資料を当てはめた場合、白磁碗Ⅱ類・Ⅳ類・Ⅴ1

		白磁																				青磁						備考
		四耳壺	碗													Ⅲ						同安碗	同安Ⅲ	龍泉碗		龍泉Ⅲ	碗	
		Ⅲ	Ⅱ	Ⅳ					Ⅴ					Ⅷ	不明	Ⅲ	Ⅴ	Ⅷ				Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ		Ⅰ	不明	
		1	1	1				不明	1	2	3	4	不明	2		1	2	1		2	不明	1	2	4		2		
				a	b	c	不明		a	a	a	b					a	a	b	b		b	b	a		c		
久保5	SE301																	1										12C中～後
久保6	SB306							1																				12C中～後
	SB309			1				1																				12C末～13C初
	SE315				1																							12C中(廃絶時期？)
	SE318		1																									12C中(廃絶時期？)
	ST302							1							2													12C末～13C
	SP309																							1				12C中～後
	SX301			1				1		1				1	1							1					2	12～14C後
	SX310							2							1												2	13～15C
	SX312																										1	13～14C
	鋤溝			1																								12C中～後
	遺物包含層ほか	1	1	2				7			1	1	1		1		1		1		1					1	4	11～14C
二葉6	SB327																			1								13C
	SE306					1																1						13C中(廃絶時期？)
	SE312			1			1	1																				13C初(廃絶時期？)
	SE317		1															1										12C中～後
	SD301			1																								12C末～13C前
	SD303							2																				12C前
	ST301								1							2							2					12C末～13C前
	ST302			2																								12C末～13C前
	SP304							1																				12C
	SX304							1							1													13C前
	遺物包含層ほか							1							1													11～14C

表２　二葉町遺跡出土輸入陶磁一覧

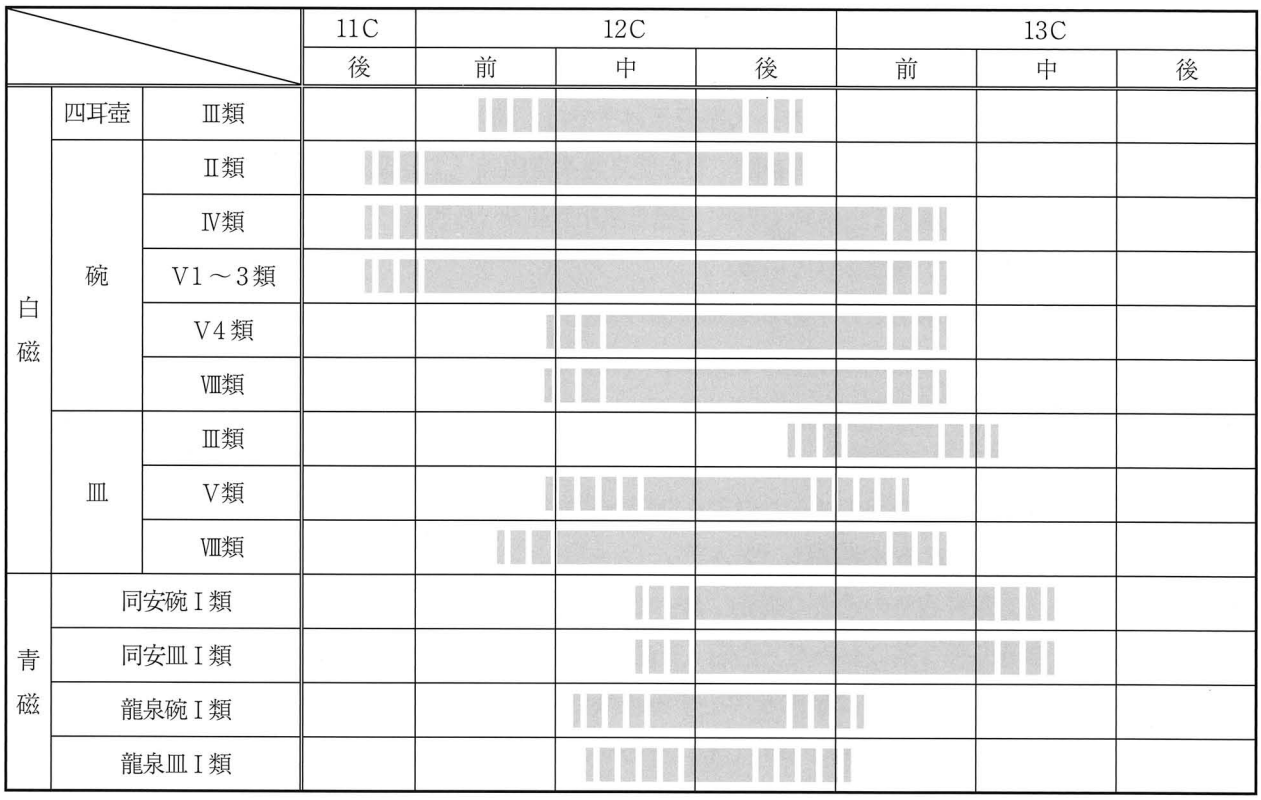


表３　二葉町遺跡出土輸入陶磁の消長

～３類、白磁皿Ⅴ類がC期（11世紀後半～12世紀前半）の標識磁器、白磁碗Ⅴ4類・Ⅷ類、白磁皿Ⅲ類・Ⅷ類、同安窯系青磁、龍泉窯系青磁碗および皿Ⅰ類がD期（12世紀中頃～12世紀後半）の標識または準標識磁器となり、すべてがC・D期の範疇に入る。また、白磁碗Ⅳ類および白磁四耳壺Ⅲ1類については、C期に出現し、D期に継続して確認される類型と考えられており、Ⅳ類の流通量が数量的に多くなる要因が推察できる。

共伴資料等に基づいて、概ねの類型別の時期的消長を表２に表示したが、先述の大宰府編年とほぼ同時期かやや遅れた（遅い時期）様相を示している。この点については、輸入陶磁の集散地である博多[10]を介した流通によるタイムラグの発生、あるいは、他の容器類との耐久性の差などの要因が想定できるが、現時点では明確にしにくい。

周辺の遺跡

一方、周辺の遺跡（各遺跡の位置については、fig. ３等を参考にされたい）においても、同時期の輸入陶磁の出土がみられる。特に、福原京関連遺跡である兵庫区祇園遺跡[11]においては、その出土量は多く、先述の白磁四耳壺（Ⅲ1類）以外でも白磁碗（Ⅳ1a類など）、白磁皿（Ⅱ1b・V2a類など）、同安窯系青磁皿（I1b類）などが確認されているが、第３次調査にて確認された玳瑁箋小碗は、最高級品として扱われた輸入陶磁として知られている。同じく福原京関連遺跡とされている楠・荒田町遺跡[12]では、白磁碗（Ⅳ1a・V4a類など）、同安窯系青磁碗（I1b類）、同安窯系青磁皿（I2b類）、龍泉窯系青磁碗（Ⅱb類）などが確認されている。祇園遺跡や楠・荒田町遺跡の南に位置する大開遺跡[13]では、白磁碗（Ⅷ2類など）や褐釉四耳壺など多種多数のものがみられる。その他、数量が比較的多いのが、二葉町遺跡の約１km東に所在する御蔵遺跡[14]である。同遺跡からは、白磁碗

（Ⅱ1・Ⅳ1a類など）、白磁皿（Ⅶ1a類など）、同安窯系青磁碗（I1b類）などが確認されている。また、松野遺跡[15]では、白磁碗（Ⅳ1a類など）、龍泉窯系青磁碗（I4b類など）などが確認されており、大手町遺跡[16]では、同安窯系青磁皿（I1b類）などが確認されており、隣接する戎町遺跡[17]でも龍泉窯系青磁碗（I3a類）が確認されている。さらに、大橋町遺跡[18]で白磁碗（Ⅳ類）、龍泉窯系青磁碗（Ⅱ類）、上沢遺跡[19]で龍泉窯系青磁碗（Ⅱ類）などが確認されている。

神戸市域およびその周辺部における12・13世紀に属する輸入陶磁の出土は、沿海部を中心として広範にみられる。特に、二葉町遺跡の所在する六甲山南麓西部地域は、福原京推定地（福原遷都1180年〔治承４〕）や拠点港であった大輪田泊（経島の築造開始1173年〔承安３〕）が所在し、要衝的性格が強い地域であることは広く知られるところで、数多くの輸入陶磁の出土は、このような諸条件を反映しているものと推察される。

(4) 輸入陶磁を出土する木棺墓について

二葉町遺跡の過去の調査において、７基の木棺墓（土葬墓）が確認されている[20]が、そのうちの３基において、白磁・青磁の供膳（副葬）がみられる。このような木棺墓における椀皿類の供膳は畿内を中心する地域においては、11世紀後半以降においてみられ、神戸市域や周辺地域においても、その事例は多い[21]。また、供膳具としての輸入陶磁使用は、12世紀後半からみられるようになり、13世紀に急増、14世紀には急減する傾向が、先学[22]により指摘されている。

二葉町遺跡の事例

ST302（久保６）、ST301（二葉６）、ST302（二葉６）にて輸入陶磁の供膳がみられる。ST302（久保６）では白磁碗（Ⅳ類ほか）３点、土師器小皿２点、鉄製小刀１点、ST301（二葉６）では白磁碗（Ⅴ1a類）１点、白磁皿（Ⅲ１類）２点、同安窯系青磁皿（I2b類）２点、ST302（二葉６）白磁碗（Ⅳ1a類）２点、土師器小皿４点、鉄製刀子１点、鉄製手斧１点が供膳具としてそれぞれみられる。特に、供膳碗皿すべてが輸入陶磁で構成されているST301（二葉６）は特異な例で、掘形の四隅付近にピットを有するなど、墓壙構造にも特色がみられる。また、ST302（二葉６）についても、破片以外で輸入陶磁が複数みられる事例は少なく、神戸市域においては、東灘区出口遺跡[23]〔第６次調査ST01（龍泉系青磁碗Ⅱb類が２点）〕にて確認されている程度で、稀少な例と言えよう。

供膳の意義

木棺墓における輸入陶磁の供膳は、その出現時期から推察して、基本的に供膳具構成との関連がないと考えられており[24]、つまり、従来の土器（土師器・須恵器・瓦器など）から「入れ替わる」ようにして普及していったようなイメージが想定されている。その背景として、12世紀後半～13世紀における、輸入陶磁の流通拡大等がその要因と考えられる。

一方で、碗皿が重なって出土するケースが多くみられることから、碗皿が「器」というよりは「もの」として埋納された可能性が高いと考えられており[25]、また、他の供膳具の事例との共通点として、埋葬者の日用品あるいは愛用品としての埋納とも考えられる[26]ことから、同時期における日常的な輸入陶磁の使用が窺える要素とも言えよう。また、約１km東に位置する。御蔵遺跡[27]においても、12～13世紀に属する木棺墓が８基まとまって検出されているが、同遺跡での輸入陶磁の出土が多いにもかかわらず、棺内の供膳具に輸入陶磁が使用されないといった事例もあることから、埋葬者の嗜好等もかなり影響して

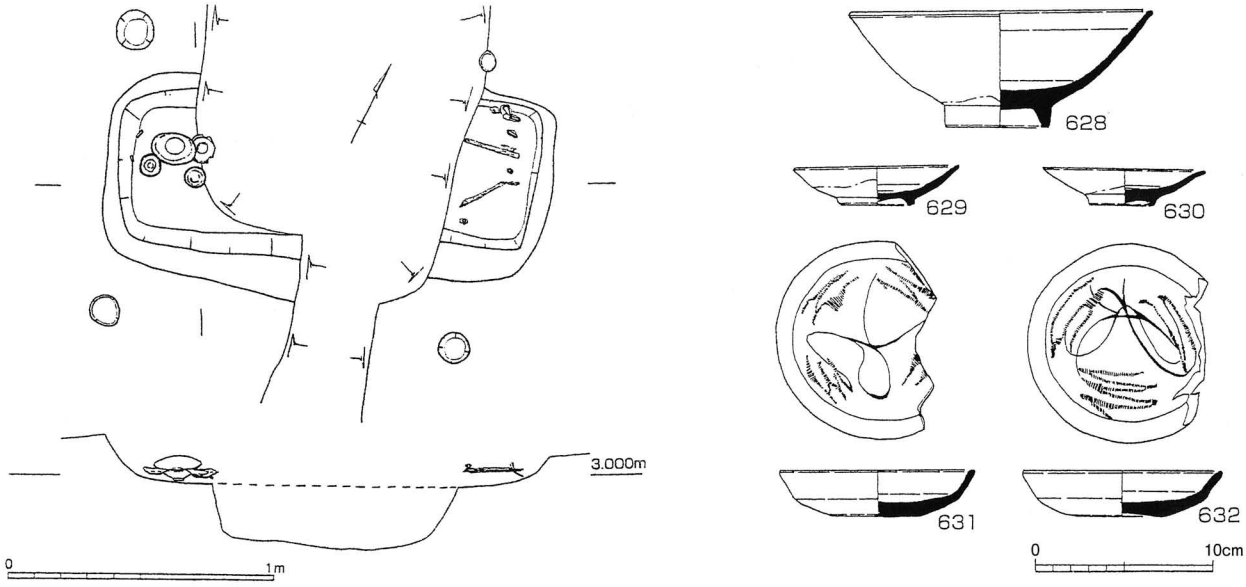


fig. 36　ST301（二葉６）　遺構図および遺物実測図

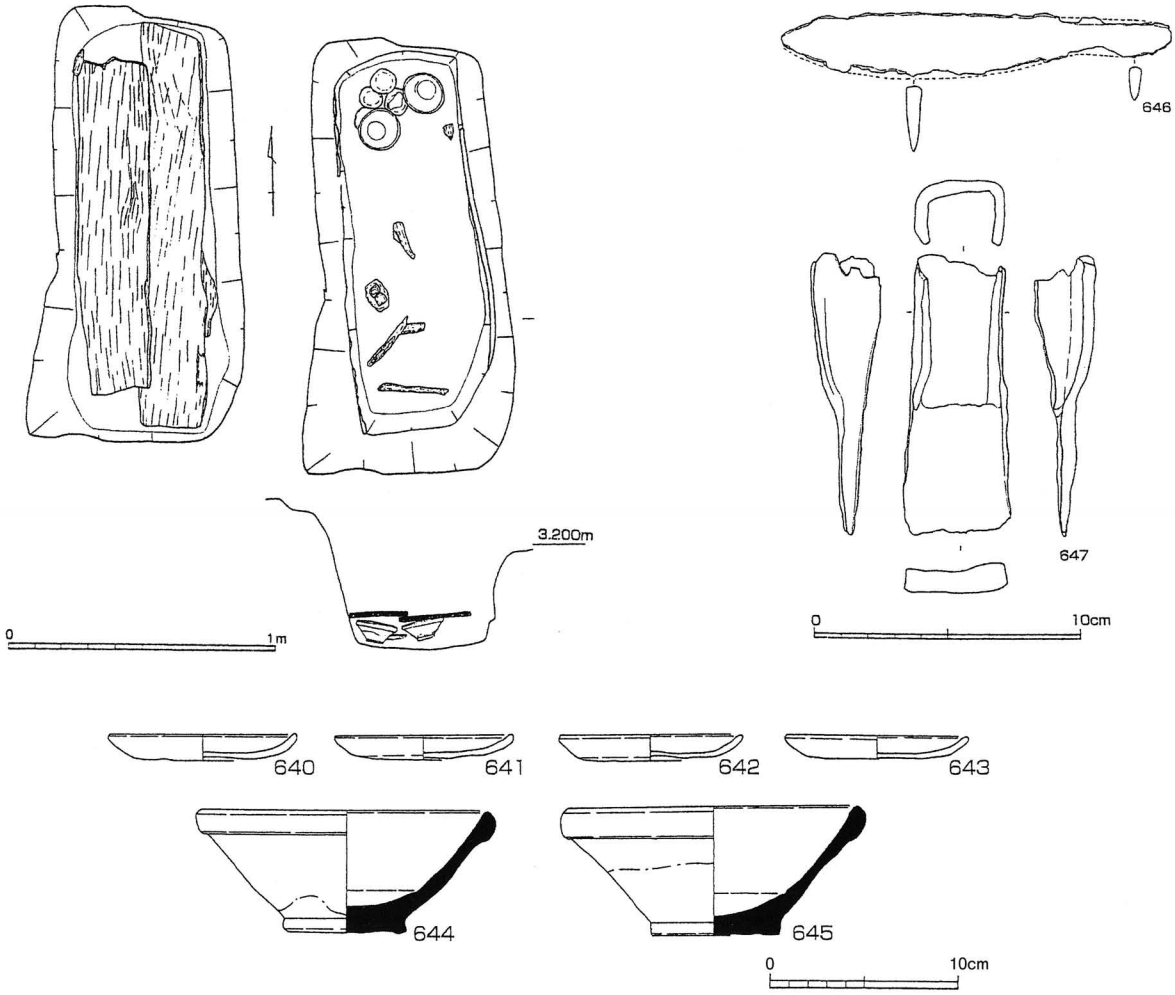


fig. 37　ST302（二葉６）　遺構図および遺物実測図

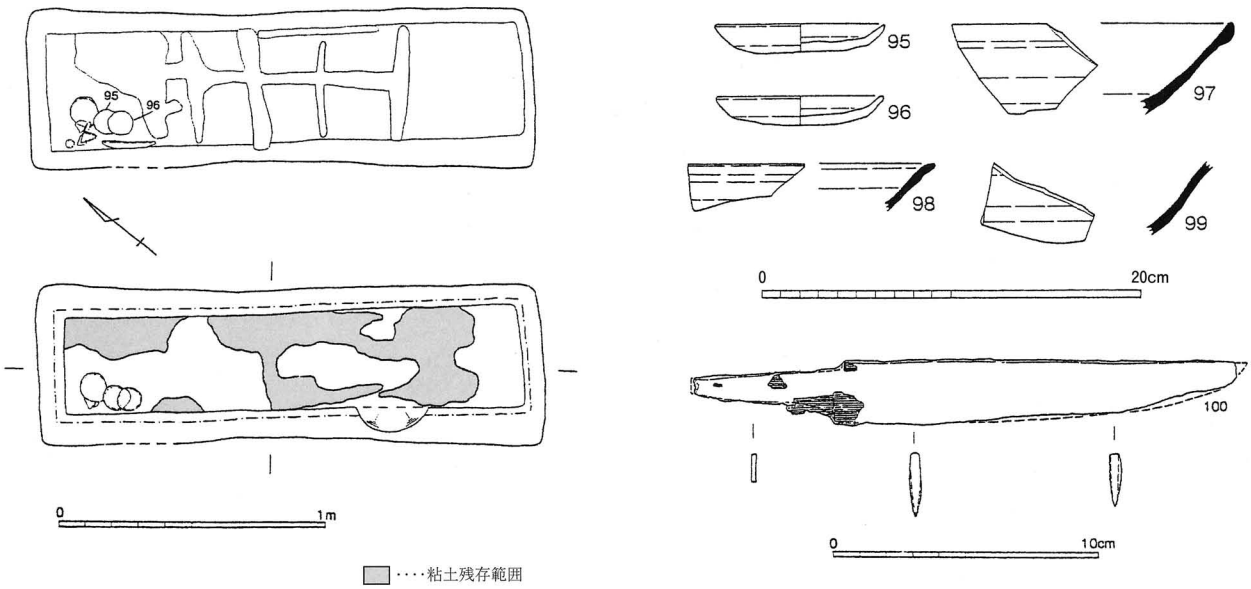


fig. 38　ST302（久保６）　遺構図および遺物実測図

いることが窺える。

(5)　結語にかえて

輸入陶磁の出土は、港湾に関わる遺跡に多くみられる傾向にある。神戸市域において、まず、挙げられるのが、二葉町遺跡に程近く、大輪田泊推定地を含む兵庫津遺跡である。しかしながら、同遺跡においては、12～13世紀代（二葉町遺跡の盛行期）に該当する資料がほとんど得られていないのが現状である。近年、兵庫県下における港湾関連遺跡の調査事例として、尼崎市大物遺跡[28]、姫路市古網干遺跡[29]が挙げられ、中世前期の資料が数多く出土しており、輸入陶磁の割合も高い。また、周辺の遺跡からも12～13世紀代の輸入陶磁の出土が多く、大物遺跡から神崎川を上った豊中市庄本遺跡[30]、古網干遺跡の所在する揖保川流域のたつの市宝林寺北遺跡[31]・福田片岡遺跡[32]・福田天神遺跡[33]などがその具体例である。つまり、主要港湾周辺の状況として、他地域からの物資が流入しやすい条件が整っていたことが想定でき、二葉町遺跡周辺の状況とも近似し、当時の諸相を解明する上で、重要な要素と言えよう。

亀井明徳氏の見解[34]によると、平氏の台頭期（平安時代末期）において、日宋荘園私貿易を自家の権益拡大の材料としたことから、瀬戸内航路の拡充が行われ、宋の文物が大量に流入する要因となったと推察している。そして、これに伴った港湾（大輪田泊ほか）の整備等により、12世紀後半以降において、陶磁器を含めた物流が活性化したことが想定されている。折しも、12世紀後半～13世紀前半にかけて、二葉町遺跡の集落が盛行のピークを迎える。今後において、これらの資料がさまざまな実相解明の一助となることを期待している。

註

1）松岡千尋「神戸市二葉町遺跡出土の白磁四耳壺」『神女大史学』 第９号　神戸女子大学史学会　1992
同遺跡の諸相を具体化する先駆けとなったことで、同成果の意義は大きい。

2）川上厚志編『二葉町遺跡発掘調査報告書－第３・５・８・９・12次調査－』 神戸市教育委員会　2001
東喜代秀編『二葉町遺跡発掘調査報告書－第14～21次調査－』 神戸市教育委員会　2008

3）山本信夫「中世前期の貿易陶磁器」『概説　中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会編　1995
山本信夫・宮崎亮一『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』 太宰府市教育委員会　2000

4）横田賢次郎・森田　勉「大宰府出土の輸入中国陶磁について」『九州歴史資料館研究論集』 4　九州歴史資料館　1978
横田・森田両氏の分類は、現在の輸入陶磁研究の指標となっている。山本信夫氏も両氏の分類を基軸した分類型式を設定している。特に、青磁に関しては、近年（2000山本）に至るまで、両氏の分類に準じている。

5）前掲１）

6）口野博史「祇園遺跡第３次調査」『平成６年度　神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会　1997

7）上田秀夫「14～16世紀の青磁椀の分類」『貿易陶磁研究』 No.2　日本貿易陶磁研究会　1982
大宰府出土資料を中心とする輸入陶磁研究の中で、やや資料不足の感がある14世紀代後半以降の青磁を含めた中国製陶磁器の様相を検討し、分類、編年を行っている。同氏の設定した分類型式のＤ類に属する可能性があるものが、当該資料に含まれており、凡そ14世紀後半～15世紀前半頃のものと推測される。

8）川上厚志「二葉町遺跡における各時代の遺構変遷」
『二葉町遺跡発掘調査報告書－第３・５・８・９・12次調査－』 神戸市教育委員会　2001

9）山本信夫・宮崎亮一『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』 太宰府市教育委員会　2000
８世紀末～14世紀後半をＡ～Ｇ期に区分し、それぞれの時期の標識磁器または準標識磁器を該当させている。

10）大庭康時「集散地遺跡としての博多」『日本史研究』 448　日本史研究会編　1999
博多における発掘調査成果より、宋商人による輸入陶磁の流通・販売の実施を想定し、多くの備蓄品などの存在も指摘している。

11）口野博史「祇園遺跡第３次調査」『平成６年度　神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会　1997
富山直人『祇園遺跡第５次発掘調査報告書』 神戸市教育委員会　2000

12）岡田章一ほか『楠・荒田町遺跡』 兵庫県教育委員会　1997
別府洋二ほか『楠・荒田町遺跡Ⅱ』 兵庫県教育委員会　2008

13）前田佳久編『大開遺跡発掘調査報告書』 神戸市教育委員会　1993

14）川上厚志ほか編『御蔵遺跡第５・７・11～13・18～22・24・28・29・31・33～36・39・41・43次発掘調査報告書』
神戸市教育委員会　2003
谷　正俊編『御蔵遺跡Ｖ　第26・37・45・51次調査』 神戸市教育委員会　2003

15）関野　豊編『松野遺跡第11～23・25・26・29～31次　水笠遺跡第２・３・５～15・17～21次発掘調査報告書』
神戸市教育委員会　2002

16）山本雅和編『大手町遺跡第１～４・６次発掘調査報告書』 神戸市教育委員会　2003

17）山本雅和「戎町遺跡第21次調査」『平成７年度　神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会　1998

18）中谷　正『大橋町遺跡第１次－１～６発掘調査報告書』 神戸市教育委員会　2006
藤井太郎編『大橋町遺跡第２次発掘調査報告書』 神戸市教育委員会　2007

19）中居さやか編『上沢遺跡第55次発掘調査報告書』 神戸市教育委員会　2009

20）前掲２）

21）橋田正徳「中世前期における土葬墓の出土供膳具の様相」『貿易陶磁研究』 No.13　日本貿易陶磁研究会　1993
埦皿類の個数やセット関係などから、１～４類に分類し、検討を行っている。また、大阪府および兵庫県下の事例を紹介している。

22）前掲21）

23）黒田恭正「出口遺跡第６次調査」『平成14年度　神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会　2005

24）前掲21）

25）江浦　洋「中世土壙墓をめぐる諸問題」『日置荘遺跡』（その３）（財）大阪文化財センター　1988

26）前掲21）
供膳具を日常的に使用されるものとして捉えた場合、陶磁器が他の土器類に比べて耐久性が優れている点から、埋葬者と接す

る機会が長くなるといった要因に基づき、愛着の深い品（愛用品）となりうる可能性が高いことを指摘した上で、流通が拡大する13世紀代において、供膳（副葬）具としての従来の土器類から輸入陶磁へと転換することは、ごく自然の現象であるとの見解を示している。

27）石島三和編『御蔵遺跡第４・６・14・32次調査』　神戸市教育委員会　2001

28）岡田　務ほか『尼崎市埋蔵文化財調査年報　平成７年度』(2)　尼崎市教育委員会　2001
岡田　務ほか『尼崎市埋蔵文化財調査年報　平成７年度』(3)　尼崎市教育委員会　2002
岡田　務ほか『尼崎市埋蔵文化財調査年報　平成７年度』(4)　尼崎市教育委員会　2003
岡田　務ほか『尼崎市埋蔵文化財調査年報　平成７年度』(5)　尼崎市教育委員会　2004

29）中川　猛「兵庫県古網干遺跡出土の陶磁器」『貿易陶磁研究』　No.26　日本貿易陶磁研究会　2006
輸入陶磁の器種別集計を行っている。数量的には、白磁碗Ⅳ・Ⅴ類、同安窯系青磁碗Ⅰ類、龍泉窯系青磁碗Ⅰ類・Ⅱ類が多く、二葉町遺跡およびその周辺遺跡の状況と近似している。

30）橘田正徳「庄本遺跡第１次調査」『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要　平成15年度（2003年度）』　豊中市教育委員会　2004

31）渡辺　昇編『宝林寺北遺跡－太子龍野バイパス建設に伴う発掘調査－』　兵庫県教育委員会　1987
甲斐昭光ほか『宝林寺北遺跡Ⅱ』　兵庫県教育委員会　2002

32）西口和彦ほか『福田片岡遺跡－太子龍野バイパス建設に伴う発掘調査－』　兵庫県教育委員会　1991

33）中谷良一編『福田天神遺跡－国道２号太子龍野バイパス建設に伴う発掘調査－』　龍野市教育委員会　1987

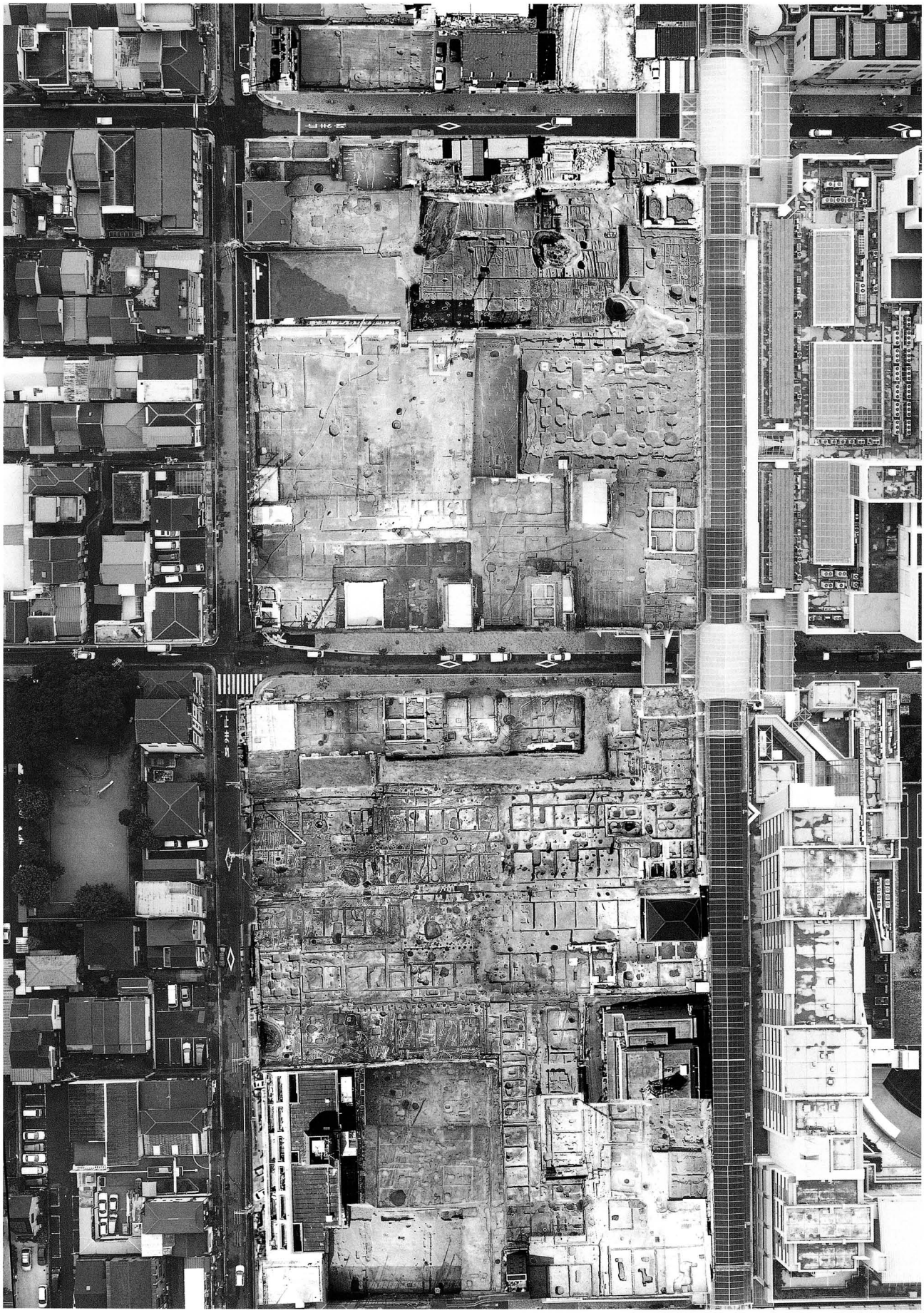
34）亀井明徳「宋代の輸出陶磁　日本－出土品を中心として－」『世界陶磁全集』　12宋　小学館　1977

参考文献

亀井明徳「九州出土の宋・元代陶磁器の分析－大宰府出土品を中心として－」『考古学雑誌』　第58巻第４号　日本考古学会　1973
山本信夫「北宋期貿易陶磁器の編年－大宰府出土例を中心として－」『貿易陶磁研究』　No.8　日本貿易陶磁研究会　1988
小田富士雄ほか『北九州の中国陶磁－出土品にみる古代の日中交流－』　北九州市立考古博物館　1988
橋本久和「紀年銘資料を中心とした貿易陶磁器の年代観－中世前期－」『貿易陶磁研究』　No.20　日本貿易陶磁研究会　2000
兵庫県立歴史博物館ほか『津々浦々をめぐる－中世瀬戸内の流通と交流－』　兵庫・岡山・広島三県合同企画展実行委員会　2004

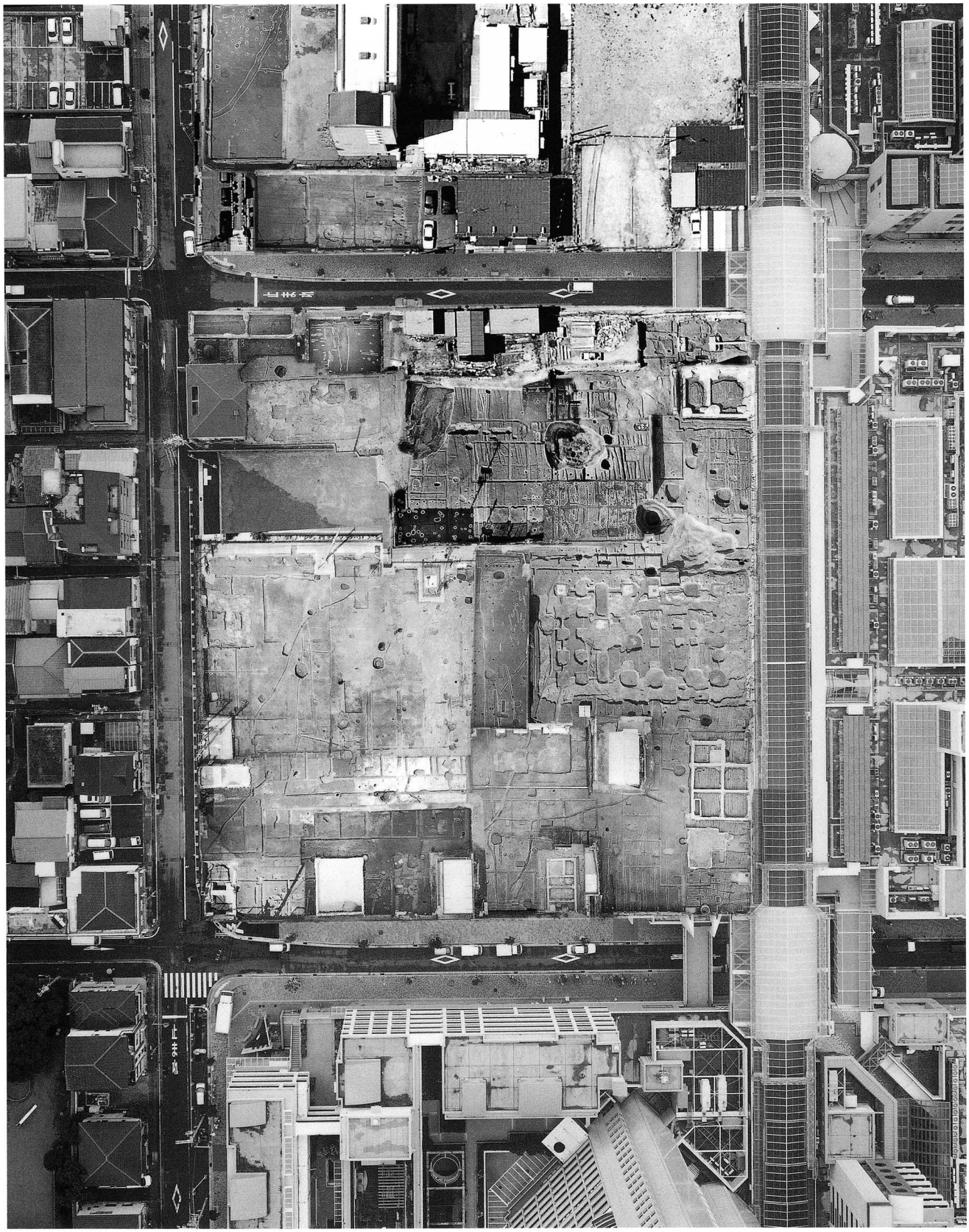
写　真　図　版

図版 1



二葉町遺跡調査地空中写真（俯瞰モザイク）

図版 2

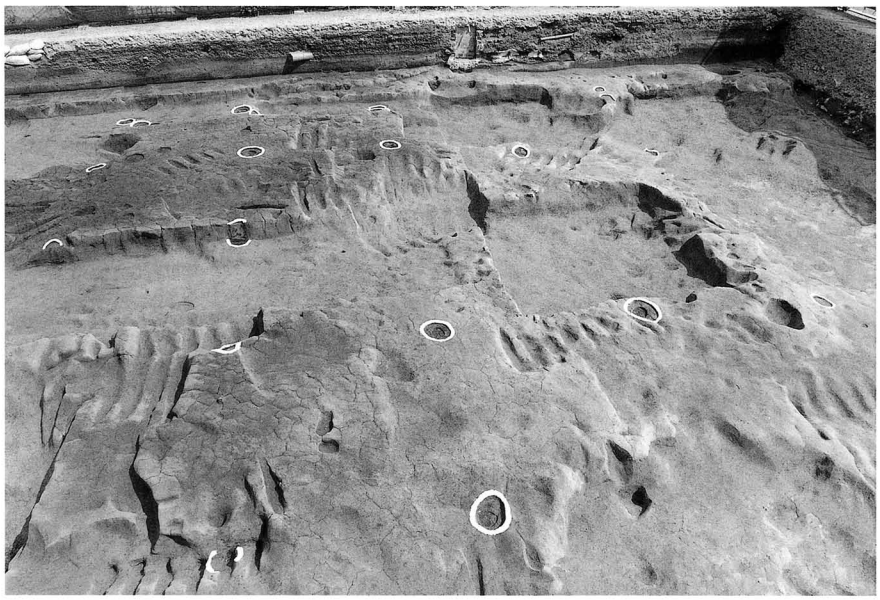


二葉町遺跡調査地（久保６）空中写真〔俯瞰モザイク〕

調査区全景（東から）

調査区全景（西から）

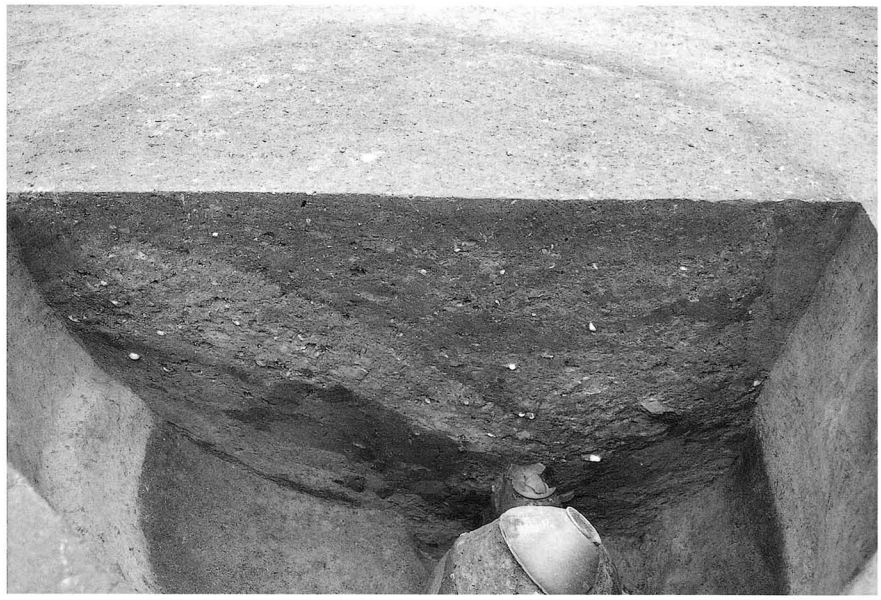
図版 4



SB326・327（北西から）

SB326柱穴（P 6）断面（南東から）

SB327柱穴断面（南東から）



SE315断面（南東から）

SE315遺物出土状況（南西から）

SE315完掘状況（南東から）

図版 6

SE316断面（北西から）

SE316完掘状況（北西から）

SE317断面（東から）

SE317石製品検出状況（東から）

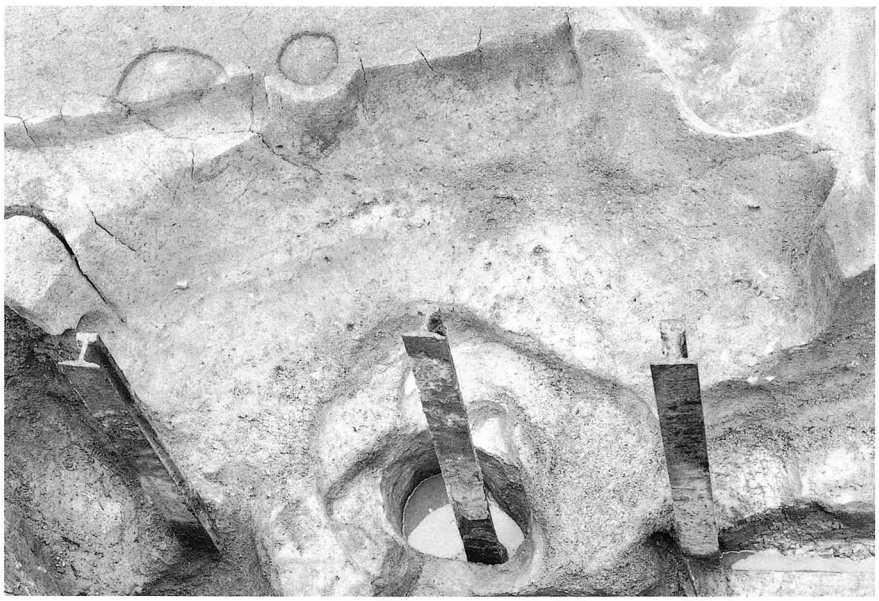
SE317曲物検出状況（東から）

SE317完掘状況（南から）

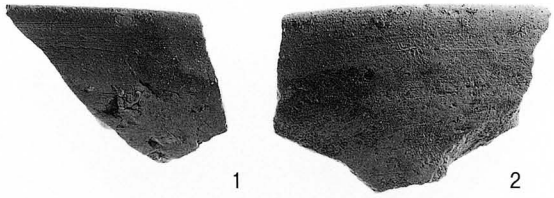
図版 8

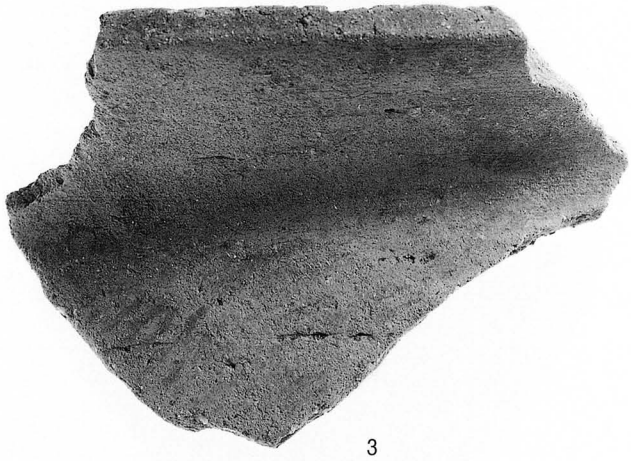
SE318断面（北東から）

SE318曲物検出状況（北東から）



SE318完掘状況（南東から）


1 2


3

8

9

10

SB326出土遺物

12

11

13

25

SE315出土遺物（1）〔8～13・25〕

図版10

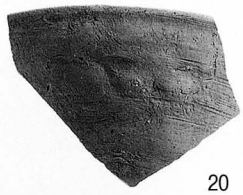
15

16

17

28

21



20

14

19

18

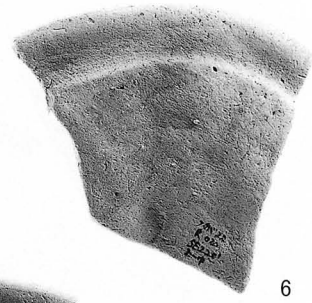
22

27

SE315出土遺物（2）

26

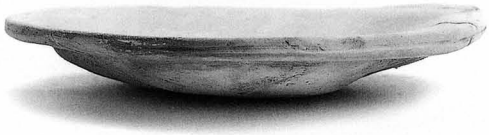
7

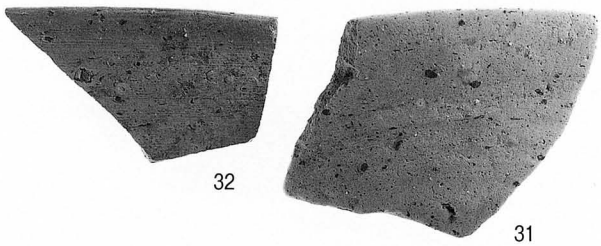

6

4

5

SE315出土遺物（3）〔4～7・26〕

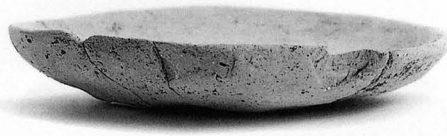

29


32 31

30

SE316出土遺物〔29～32〕

33


34

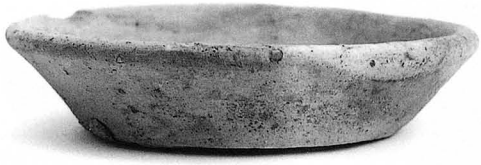
37

SE317出土遺物（1）〔33・34・37〕

図版12

SE317出土遺物（2）〔35・36・38～47〕

SE318出土遺物（1）〔48・50・60〕



62

71

72

73

80

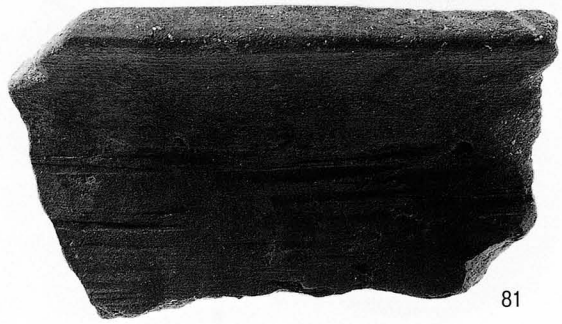
74

64

63

82

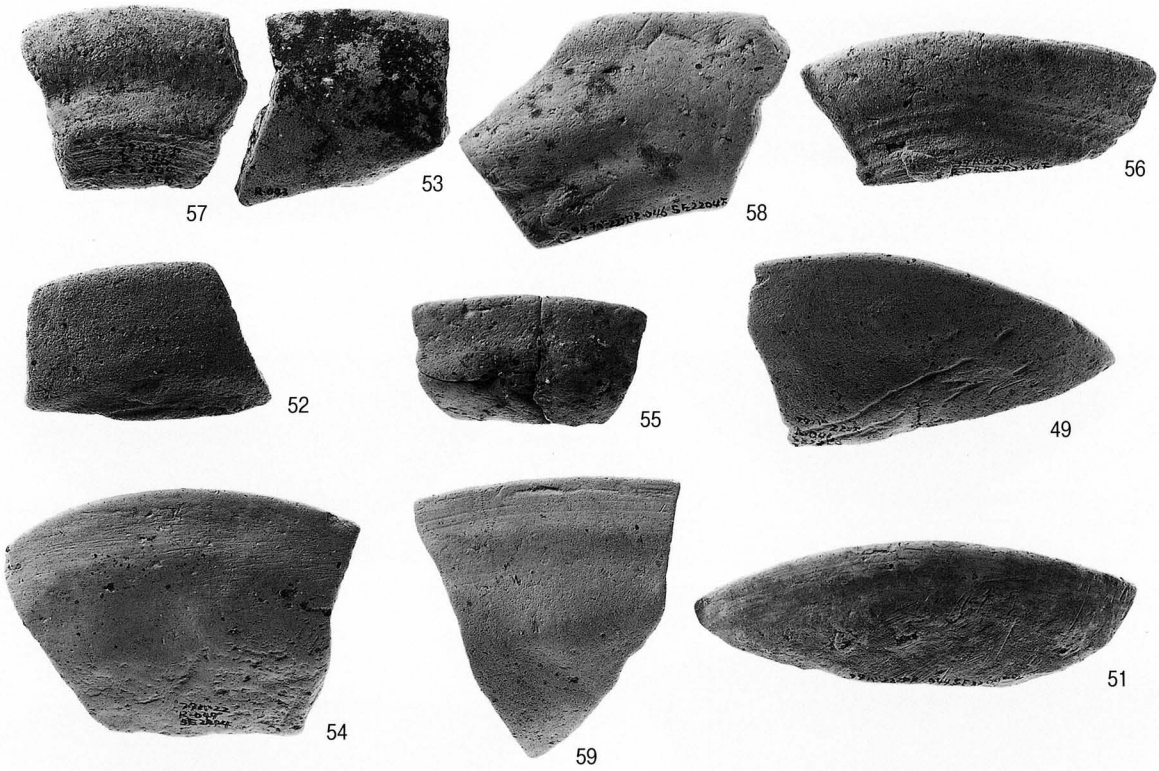
65

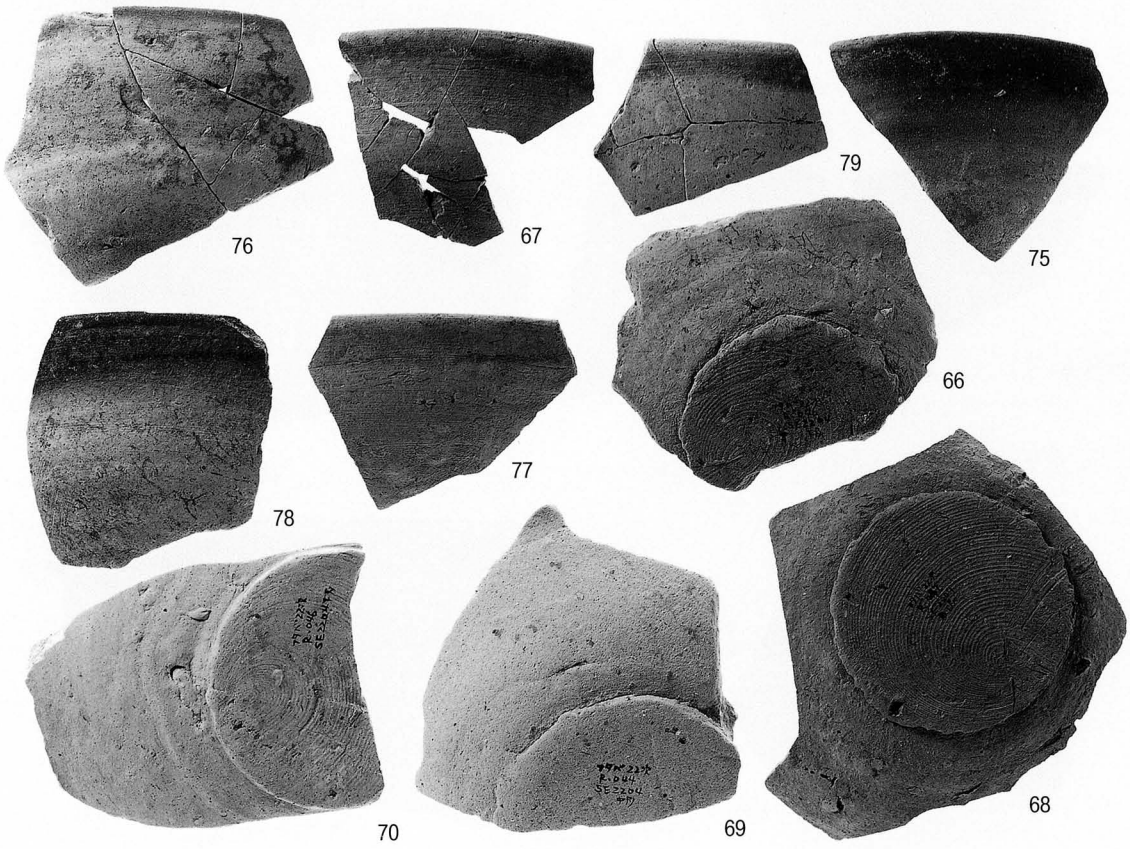


81

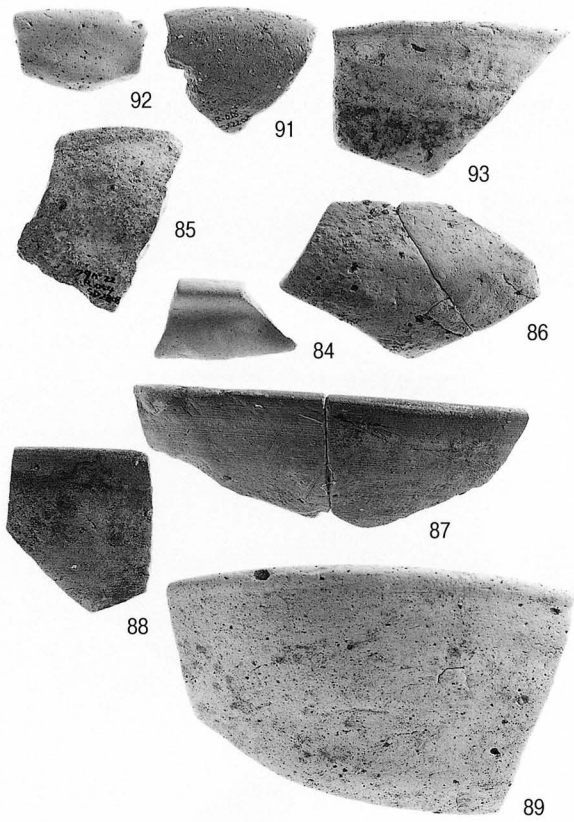
SE318出土遺物（2）

図版14

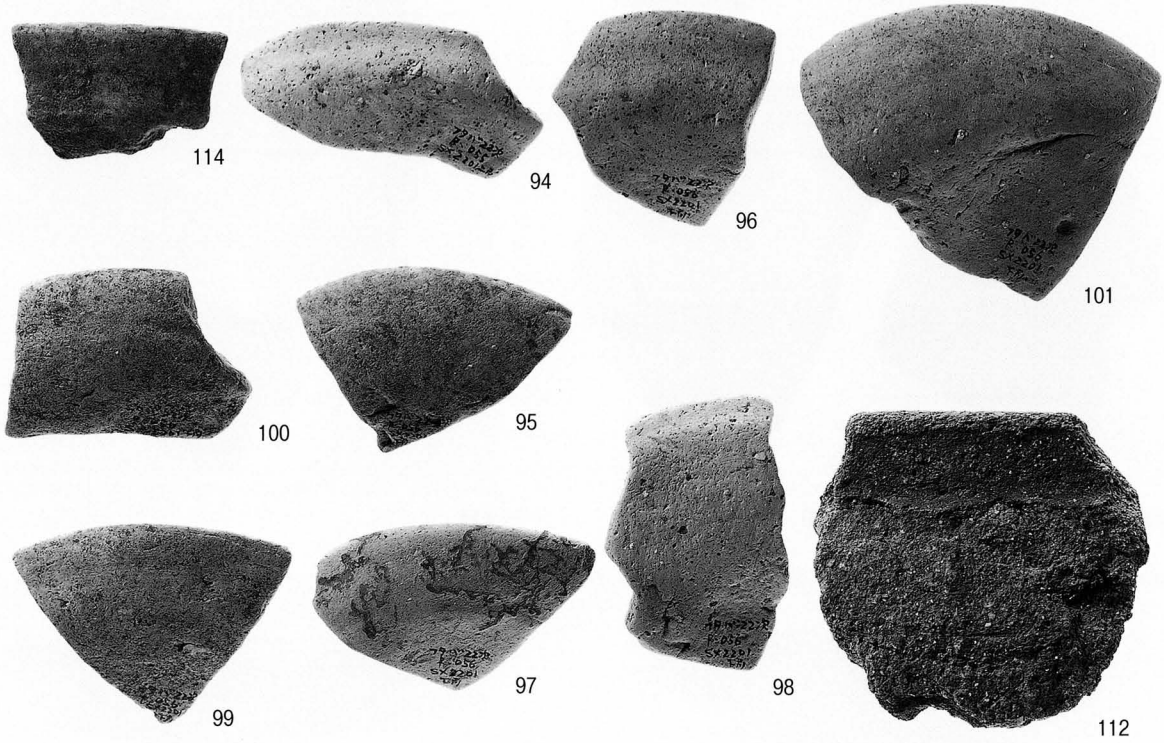




SE318出土遺物（3）

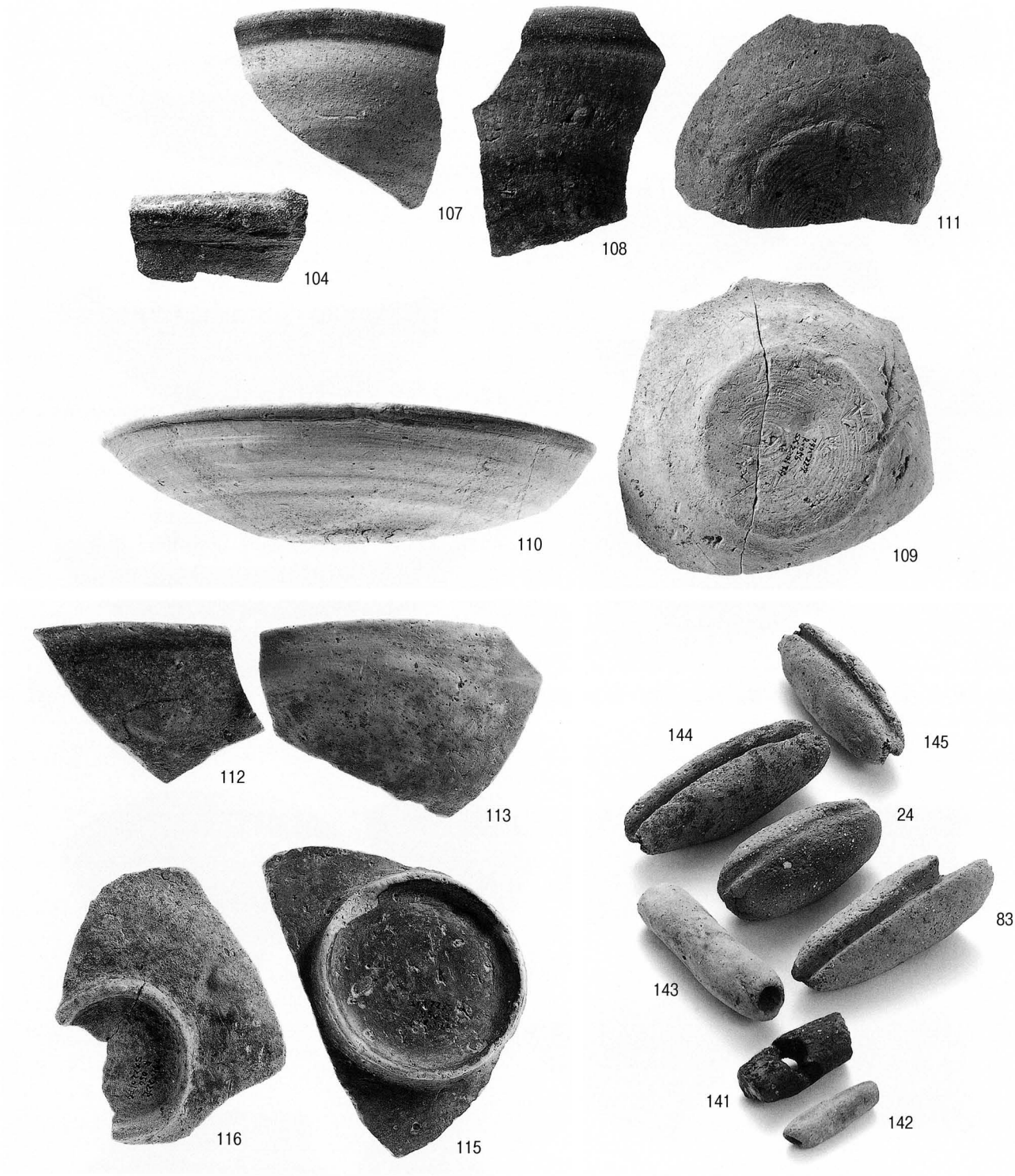


SD311〔84・87・88〕・SD318〔85・86・89〕・SK313〔92〕・SK314〔93〕・SX315〔91〕出土遺物



SX301出土遺物（1）〔94～101・103・105・106・112・114〕

図版16

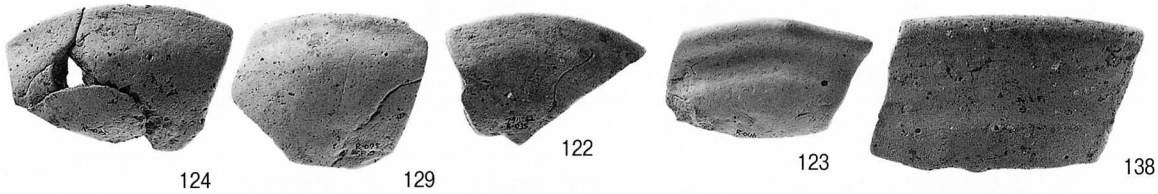


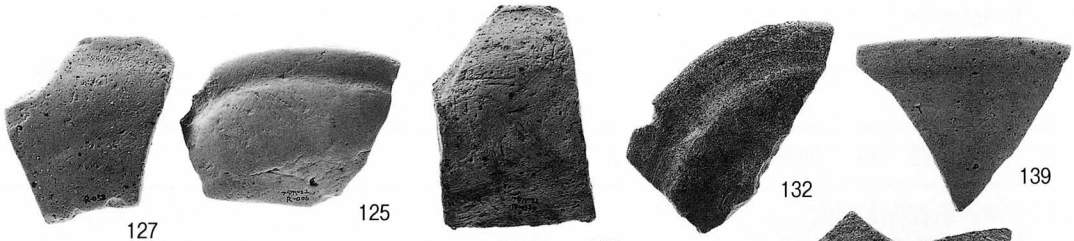
SX301出土遺物（2）〔104・107～113・115・116〕

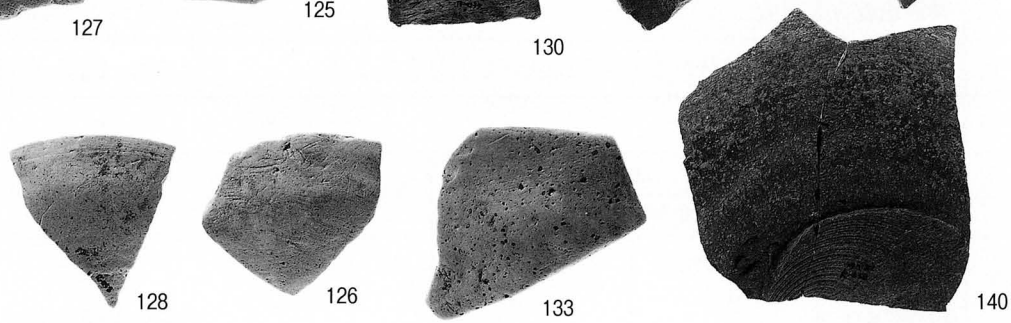
土錘

遺物包含層出土遺物

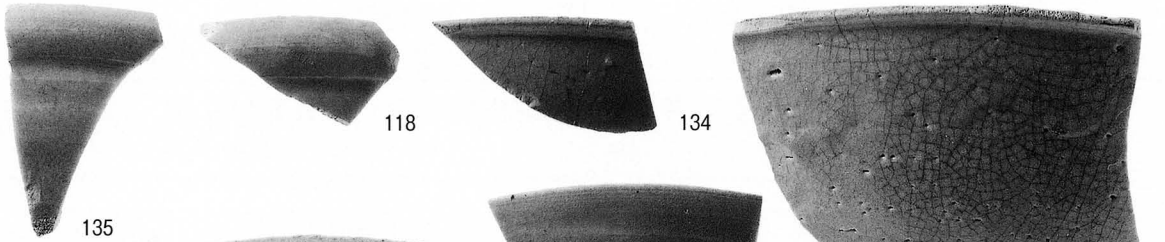
SP310出土遺物

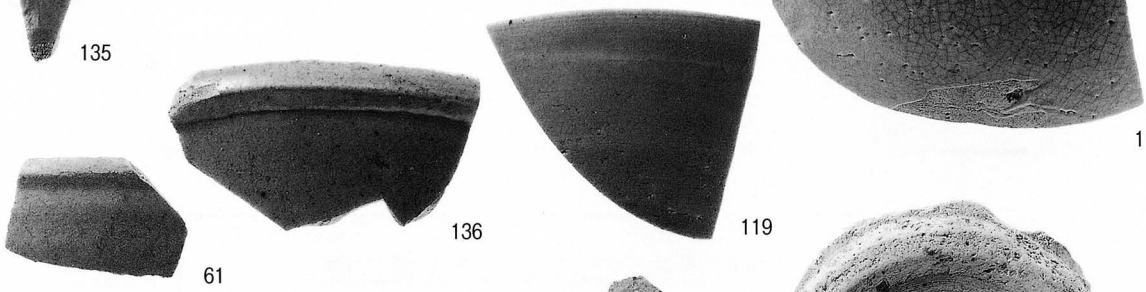


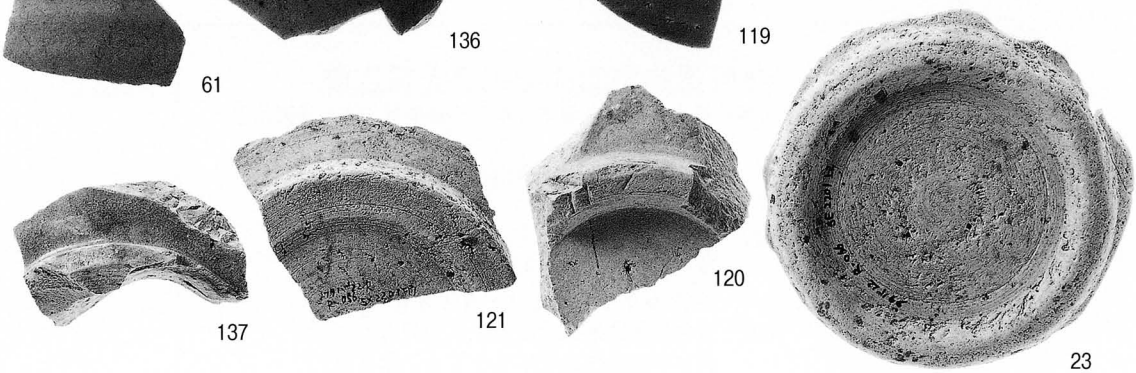




遺構に伴なわない出土遺物







輸入陶磁

報告書抄録

ふりがな	ふたばちょういせきだい22じはっくつちょうさほうこくしょ
書名	二葉町遺跡第22次発掘調査報告書
副書名	新長田駅南第２地区震災復興第二種市街地再開発事業地に伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	池田　毅（編）・阿部　功・中村大介
編者機関	神戸市教育委員会
所在地	〒650-8570　兵庫県神戸市中央区加納町６丁目５番１号　　TEL078－322－6480
発行年	西暦2010年３月31日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査原因
二葉町遺跡（ふたばちょういせき）	兵庫県神戸市長田区久保町（ひょうごけんこうべしながたくくぼちょう）６丁目番４．５．６	28106	6－24	34°38′58″	135°8′59″	市街地再開発事業

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落跡	平安時代～鎌倉時代	掘立柱建物・溝・井戸・土坑ピット	土師器・須恵器・瓦器・白磁・木製品	

要約	今回の調査では、平安時代末～鎌倉時代の掘立柱建物２棟・井戸４基の他、溝・土坑・ピットなどが確認できた。

二葉町遺跡第22次発掘調査報告書
－新長田駅南第２地区震災復興第二種市街地再開発事業に伴う発掘調査－

2009年３月31日

発行　神戸市教育委員会文化財課
神戸市中央区加納町６丁目５番１号
TEL ０７８－３２２－６４８０
印刷　大和出版印刷株式会社
神戸市東灘区向洋町東２丁目７番２号
TEL ０７８－８５７－２３５５

神戸市広報印刷物登録・平成21年度　第328号（広報印刷物規格Ａ－６類）